

**週刊チャオ
ベスト・アンソロジー**
WeeklyCHAO The Best Anthology

本書は、週刊チャオ編集部が作者の許諾に基づき編纂、公開するものです。
掲載されている週刊チャオ投稿作品の権利については、各作者が保有しています。

はじめに



この度、週刊チャオは休刊します。
でも、その前に……
何か一つの思い出を、この手に残る思い出を。

今ここにあるのは
今まで週刊チャオに投稿された中から
選りすぐりの作品を集めた
世界に一つだけのアンソロジーです。
いずれもベスト・アンソロジーの名にふさわしい作品ばかり。
それぞれの作品に込められた「思い出」を
ぜひ、感じ取ってみてください。

これまで週刊チャオを支えてくださった、
読者のみなさま、作家のみなさま、編集部員、
イラストレーター、プログラマー、ネタ職人、
セガ・ソニックチームのみなさま、その他のみなさまに、
心より感謝を込めて。

週刊チャオ編集部

Contents

#0 はじめに —3

#1 懐仲時計
チャオ裁判
・その1 —6
・その2 —10
・その3 —15

#2 ホップスター
ONLINE DREAMS —22

#3 DX
チャオ、犬をかってみる —39

#4 チャピル
遠足の贈り物 —41

#5 ろっど
純粹ノ悪魔 —56

#6 ろっど
反則です —92

目次

-
- #7** べっく・びーす
ニコとタローと……
・ 聖誕祭！ —95
・ セツブンノヒ！ —99
・ 505！ —103
- #8** 斬守
～斬首～ —107
- #9** 某
JAM —118
- #10** 宏
スーパー宏タイム
・ チャオの奴隷 —151
・ 折れる時 —159
・ ～半漁人と桜の木～ —160
・ クジャッカー —163
・ ～City Escape～ —3rd Mission— —165
- #11** スマッシュ
チャオのはね —168

チャオ裁判

懐仲時計

週刊チャオ第1号から一年おきに連載された、法廷を舞台とする三部作です。基本となる設定はシンプルながら、綿密な感情描写が読む人を惹き付けます。ソニアド2で初登場したヒーロー、ダークの概念を題材にしていますが、もしかすると、人には善悪よりももっと大切なものがあるのではないかと気付かされるような、そんなお話。

その1

「疑わしきは罰せず」

本来、裁判のあるべき姿である。

しかし、多発する犯罪、犯罪者の低年齢化という問題が、その基本をも危うくしていた。

無罪となった「疑わしき者」が、新たな犯罪を起こすという悪循環も、すでに現実のものとなっていた。

この局面において、司法は一つの決断を下した。

人の心を映す鏡と言われる「チャオ」を、裁判の重要な証拠の一つとしたのである。

「被告人を有罪とするに足る十分な証拠はない。しかし、無罪とするにもいたらない。そこで、被告人を『チャオ裁判』にかけることとする」

裁判官の、この決断は、妥当なところだろう。

まあ、実際、証拠がないだけだもんな。

「ここに生まれたばかりのチャオがいる。被告人は、このチャオと一ヶ月の間、共に生活し、その心をチャオに映してもらうこととする」

へっ。わかってるんだよ。

「ヒーローチャオ」に進化させれば、無罪放免ってことだろ？

簡単なことだ。

俺は、自信を持って、こう答えた。

「わかりました。このチャオに、私の無実を証明してもらいます」

こうして、俺とチャオの一ヶ月が始まった。

ヒーローチャオに進化させるなんて簡単さ。とにかく、チャオを大切に可愛

がってやればいいんだよ。

心を映す？

自分を可愛がってくれる人間を「悪」だと言えるか？

そういうこった。

ま、とりあえず、チャオが喜ぶことをしてやるか。

まずは、やさしく頭を撫でてやる。そして、抱っこして、ほれ、高い高い。

お、喜んでるぞ。よ～し、もう一回、高い高い～。

おっと、大事なことを忘れるところだったぜ。

ほれ、木の実だ。うまいだろ？

お前に気に入られるために、わざわざ極上のものを買ってきたんだぞ。

これで、俺を裏切ったら、わかってるよな？

こんな感じで一週間が過ぎた。

へっ。やっぱり、簡単なこったぜ。もう、こんなに懐いてやがる。

ほっといても近づいてくるし、抱っこすると大はしゃぎだ。

こりゃ、俺の無罪は約束されたも同然だな。

さらに一週間たった。

はは、本気で俺に懐いてるのか？

利用されてるだけだつてのに、単純なもんだよなあ……。

そして三週目になった。

ほ～ら、高い高い～。

どうだ？ うまい木の実だろ？

なんだって、お前のために俺が選びに選んだんだからな。

お前の好きなもんくらい、よお～くわかってるんだぜ。

「お前」？

そうだ。

今更だが、お前に名前を付けてやらないとな。

そうだなあ。どんな名前がいいかな？

ちょっと待っつけ、すぐに決めてやるからな。

……。

……。

よし、お前の名前は『ナッツ』だ。

へへっ、どうだ？ 気に入ったか？

遂に、最後の一週間になった。

拘置所に逆戻りだ。

『ナッツ』が、いつ進化してもいいようにってわけだな。

望むところだぜ。

『ナッツ』と一緒になら、どこにでも行ってやるよ。

「そろそろ進化する頃ですね」

そう言って裁判官が入ってきた時、すでに『ナッツ』はマユに包まれていた。

さて、真っ白なヒーローチャオになって、マユから出てきてくれるんだろ？

あんだけ可愛がってやったんだからな。

ゆっくりとマユの色が薄くなっていく。

だんだんと『ナッツ』の姿が見えるようになっていく。

その姿は……。

???

白くなっていない？

ヒーローチャオに進化しなかったのか？

いや、ヒーローチャオにならなかっただけじゃない？

黒い？ 黒いチャオになっている？

まさか？ ダークチャオになったというのか？

どういうことだ？

どういうことだ？

『ナッツ』どういうことなんだよ？

愕然とする俺に、『ナッツ』は、いつものように近づき、頬をすりよせてきた。

俺は、力なく『ナッツ』の頭を撫でてやることしかできなかった。

『ナッツ』は、ちょっと不思議そうな顔をしたようだったが、いつもと同じように喜んでいるようだ。

『ナッツ』だ。

ダークチャオに進化しても、俺の『ナッツ』は、『ナッツ』のままなんだ。

まだ^{ぼうぜん}杳然としたままの俺に、裁判官の言葉が突き刺さる。

「被告人のチャオが、ダークチャオに進化したということは、被告人に邪な心があったということの証明であり、被告人を有罪とするに十分な証拠となる。正式な判決は後日となるが、犯罪の重大さからみて、実刑は免れないであろう」

実刑？

待てよ。

ちょっと待ってくれよ！

「そうだよ。俺がやったんだ。罰ならいくらでも受けるよ。でもな、実刑だけは勘弁してくれよ。な？ な？ 刑務所に入ったら、『ナッツ』に会えなくなるだろ？ な？ 頼むよ。お願いだからよ……」

「ただし、そのチャオが被告人に懐いていることもまた事実であり、それは被告人が根っからの悪人ではないということの証明となろう。それは、刑を減じるに十分に値する事実でもある」

裁判官のこの言葉は、何の慰めにもならなかった。

だが、次の一言で、第二の人生に望みは持てた。

「刑期を終えるまで、私が責任を持って預かるので、このチャオのことを心配することはありません」

『ナッツ』待っていてくれよ。

すぐに、また一緒に暮らせるようにするからな。

その2

「疑わしきは罰せず」

本来、裁判のあるべき姿である。

しかし、多発する犯罪、犯罪者の低年齢化という問題が、その基本をも危うくしていた。

無罪となった「疑わしき者」が、新たな犯罪を起こすという悪循環も、すでに現実のものとなっていた。

この局面において、司法は一つの決断を下した。

人の心を映す鏡と言われる「チャオ」を、裁判の重要な証拠の一つとしたのである。

「被告人を有罪とする証拠はない。しかし、無罪とするにもいたらない。そこで、被告人を『チャオ裁判』にかけるという検察の申請を認めることとする」

ふっ、まあ、そんなこつたろうと思ってたぜ。

動機もある。状況証拠も揃ってる。

だが、そこまでだ。肝心の証拠もなければ、自白もない。

このまま最高裁までいっても有罪になることはないだろうぜ。

検察もそのことは十分わかってるってわけだ。

まあ、奴等にしたら上出来な判断だな。

だが、そう簡単に思い通りにはいかないぜ。

「ここに生まれたばかりのチャオがいる。被告人は、このチャオと一ヶ月の間、共に生活し、心をチャオに映してもらうこととする」

通り一遍の宣言には、何の感銘も受けなかったが、生まれたばかりのチャオを見た時は、少し懐かしさを感じてしまった。

またチャオを育てることになるなんて考えもしなかった。

裏街道を生きてきた俺には、もうチャオなんて別世界の生き物になっていた。

だが、こんな俺にもチャオを育てていた頃があったんだ。

初めてチャオを育てたのは、小学生の時だったか。

思えば、ニュートラルのチャオに育ったのは、この時だけだったな。

あいつが転生したのは、俺が中学の時だった。

そして、あいつはダークチャオに進化したんだ。

今でこそ、こっちの世界で生きる素質が、あの頃からあったんだと思っているが、あの当時は結構悩んだもんだ。

思い通りにチャオを育てたくて、チャオ育成関連の本も、かなり読み漁^よったもんだ。

残念ながら、何回転生してもダークチャオにしかならなかったけどな。

おかげで、周りからは、かなりいじめられたんだ。

ダーク！

ダーク！！

ダーク！！！！

まるで、極悪人のような言われようだった。

それは、高校を卒業してからも続いた。

ダークチャオと一緒にいるだけで、周りにはみんな犯罪者のような目で見やがった。

だったら、本当の極悪人になってやる。

そう決めてからは、俺は自由になったんだ。

何度も警察の世話にはなった。

もう表の世界には帰れないことはわかっている。

だが、俺は何も後悔していない。

ただ、この世界で生きることを決めた時に別れた、あのダークチャオがどうしているかが少し気になるくらいだ。

いじめられて落ち込んでいる俺を、おどけて元気づけようとしてくれたあいつに、俺はどれだけ救われたことか。

まあ、結果的に、あいつを裏切ることになってしまったがな。

あいつは、今もどこかで元気に暮らしてるんだろうか……。

そんなことを考えながら、俺はチャオを連れて久しぶりに自分の部屋に帰ってきた。

もちろん、チャオの好物の木の実はたっぷり買ってきてある。

このまま、普通に育てたらダークチャオになるのは目に見えている。

愛らしいチャオを見ていると、可愛がらずにはいられない。

だが、今それをするわけにはいかないんだ。

「お互い、一ヶ月の辛抱だ」

俺はそう言って、チャオの頭を撫でてやった。

この先、一ヶ月は触れることの出来ない柔らかな感触を、俺は名残りを惜しみながら味わっていた。

部屋いっぱいにも木の実を並べておけば、チャオは勝手に食べてくれるだろう。

お腹を空かせたチャオが、悲しそうな目で俺を見ているが、直接木の実をあげるわけにはいかないんだ。

遂に空腹に耐えかねてチャオが泣き出してしまった。

すぐ近くに木の実がたくさんあるのに、どうして自分で食べてくれないんだ。やはり、生まれたばかりのチャオに自分で木の実を見つけろってのは無理があるのか？

仕方がないから、俺は足でチャオを木の実の方へ押してやった。

傍から見れば、チャオを蹴ったように見えるだろうし、チャオもそう感じたに違いない。

だが、おかげで、チャオは木の実に気づいて、自分から食べてくれた。

こんなことを何回か繰り返しているうちに、チャオはお腹が減って泣く前に自分で木の実を拾って食べるようになった。

これで、俺も多少は辛い思いをしなくてすむようになったわけだ。

だが、念には念を入れて、時々、チャオを蹴るような真似をしなければならなかった。

こんな嫌な思いをするのはいつ以来だろうか？

しかし、それもあと数週間の辛抱だ。

こいつが、ヒーローチャオになりさえすれば、俺には明るい未来が拓けてくるんだ。

もちろん、その時には、こいつに詫びなければならないな。

今までの分を、取り戻すくらい、十分に可愛がってやろう。

もうしばらくの辛抱だ。

チャオ裁判も、あと一週間となって、俺とチャオは拘置所に入った。

進化するまでの最後の一時をここで過ごすわけだ。

もう無理やりチャオをいじめる必要はなかった。
うっすらと白くなったチャオが、俺の未来を象徴しているようだ。

裁判官や検察官達が見守る中で、チャオはマユに包まれていった。
そして、マユがゆっくりと消えていき、中から白い色をしたチャオが現れた。
ヒーローチャオだ。

俺のチャオは、ヒーローチャオに進化したんだ。

こいつを見た時の検察官の顔は見物だったぜ。

あるはずのない物を見た時の人間の表情ってのは、こうなるって見本みたいだったぜ。

さて、これで、俺も無罪放免ってわけだよな。

しかし、俺の優越感も裁判官の一言で消え去ってしまった。

「被告人は、そのチャオを抱き上げるように」

ちょっと待て。

ちょっと待ってくれよ。

そんなことをしたら、どうなるか……。

「何を言ってるんだ？ 俺のチャオは、ヒーローチャオに進化した。それで十分じゃないのか？」

そんな抗弁も役には立たなかった。

俺は、この命令に従うしかなかった。

俺は、恐る恐るヒーローチャオに近づき、祈るような気持ちで抱き上げた。

じたばた。

じたばた。

ヒーローチャオは、俺の腕の中で、そんな形容しかしようのない動きをしていた。

頼む。

ちょっとだけ辛抱してくれよ。

あと五分、いや三分だけでいいから、おとなしくしてくれ。

じゃないと、俺の未来が、いや、俺達の未来が閉ざされてしまう。

都合のいい未来かもしれないが、俺はおまえとの未来に希望を持ってるんだ。
頼む……。

しかし、願いは通じなかった。

裁判官が冷酷に言い放った。

「チャオは被告人に抱かれることを極度に嫌がっている。被告人が通常なら育て方をしたからであることは明白である。それが意味することは、チャオが被告人の心とは反対の姿に進化したということである」

そんなことは言われなくてもわかってるよ……。

「この状況で、ヒーローチャオに進化したということは、被告人の心に邪なものがあつたことの証明となる。そして、それは被告人を有罪とするに十分な証拠となる」

それとも言われるまでもないさ……。

あれだけのことをしたんだ、一生ムショ暮らしになっても当然だ……。

だが、最後にこれだけは言わしてくれ。

俺は、まだ話を続けようとする裁判官を制してヒーローチャオの前に来た。

そして、ヒーローチャオの目線に合わせてしゃがみこみ、一言だけ言った。

「信じてもらえないだろうが、俺はおまえを愛してるんだよ」

シャバの最後に、おまえと暮らせて幸せだったぜ。

おまえのおかげで、忘れていたものを思い出せたような気がする。

いつになるかわからないが、戻ってこれた時は、またチャオを育ててみようと思ってる。

どうせダークチャオになるだろう。

だが、それが俺がチャオを愛した証なら、誰に恥じることもないさ。

最後に振り返った時に見たヒーローチャオの目に、^{おび}怯えの色がなかったことが唯一の救いだった。

たとえ、それが俺が離れていくからだだったとしても。

俺はおまえの幸せを祈ってるよ。

元気でな、バイバイ。

その3

「疑わしきは罰せず」

本来、裁判のあるべき姿である。

しかし、多発する犯罪、犯罪者の低年齢化という問題が、その基本をも危うくしていた。

無罪となった「疑わしき者」が、新たな犯罪を起こすという悪循環も、すでに現実のものとなっていた。

この局面において、司法は一つの決断を下した。

人の心を映す鏡と言われる「チャオ」を、裁判の重要な証拠の一つとしたのである。

僕は、今、裁判所にいる。

他人の裁判を傍聴しているわけじゃない。

被告人として、この場所に立っているんだ。

あの日、僕は、ある同級生に言われるまま、何かを持たされてあの場所に行ったんだ。

その同級生は、優等生で通っていた。

でも、僕はいつも、そいつにいじめられていた。

大勢でいじめられることもあれば、あいつ一人だけの時もあった。

痛い思いをするのは大勢でいじめられた時だったけど、あいつが一人の時は、もっと怖い思いをしなければならなかった。

あの日も、あいつが一人で来て、僕にこう言ったんだ。

「これを持って、この場所に行け。そこにいる人間に、これを渡して代わりのモノを受け取ってくるんだ。いいか、言われた通りにするだけでいいんだぞ。くれぐれもナカミが何かなんてことを気にするなよ」

逆らえるわけがなかった。

きつと、良くないことをさせられるんだと思った。

でも、そのせいでこんな目にあうなんて、思いもしなかったんだ。

いや、わかっているけど、僕に逆らう勇気はなかっただろうけど……。

指定の場所に着いた時、あいつの言っていた人間はいなかった。
代わりに待っていたのは警察だった。

あいつは、こうなる可能性を考えて僕を利用したんだ。
僕が抵抗できないことを知っているから、うまくいけば何も問題は起こらない。

うまくいかなかった時は、あいつの代わりに僕が警察に捕まるだけのことだったんだ。

もちろん、僕は警察にそのことを全部話した。

でも、無駄だった。

当然、あいつは完全にシラを切ったし、あいつの表の友人や学校関係者からは、僕の言っていることの反対の言葉しか出てこなかった。

そして、僕は起訴されることになった。

未成年が起訴されるような犯罪を、僕はしてしまったということになるんだ。

なぜ、僕は、こんなところにいるんだろう。

こんな場所からは、すぐにでも逃げ出したかった。

でも、できるわけがなかった。

裁判は、同じことの繰り返しだった。

僕は事実しか言えなかった。でも、その証拠はどこにもなかった。

そして、僕が「犯した罪」の証拠はあった。

僕に必要なものは、僕の言う真実を証明する方法だった。

でも、そんなものがあるとは思えなかった。

それが見つからなければ、延々とこの裁判は続いていくんだろう。

それは、いつまでも僕がここから開放されないということなんだ。

こんな辛い思いをし続けなければならないのなら、いつそ罪を全部自分のせいにして刑務所に入った方が楽かもしれない。

とにかく、僕はここではないどこかに逃げ出せれば、それでいいんだ。

もういい。

全部、自分のせいにしてしまおう。

そう思った時、裁判官から意外な言葉が告げられた。

「被告人の主張は終始一貫している。しかし、それを裏付ける証拠が何一つない。そこで、被告人を『チャオ裁判』にかけ、その証拠にすることとする」

一瞬、何のことだかわからなかった。

でも、『チャオ裁判』のことは聞いたことがある。

「ここに生まれたばかりのチャオがいる。被告人は、このチャオと一ヶ月の間、共に生活し、心をチャオに映してもらうこととする」

そんなに都合良くヒーローチャオに育って、無罪になるなんて簡単には思えない。

でも、一ヶ月だけでも、ここから逃げ出すことができる。

それだけでいいんだ。

その後のことを考える余裕は今の僕にはなかった。

束の間の自由を得て、僕は小さなチャオと一緒に家に帰ってきた。

でも、ここも安息の場所ではなかった。

元々、共働きの両親は家にいることが少なかった。

僕がこんなことになっても、今まで以上に仕事に打ち込んでいるみたいだ。

それは、まるで目の前の事実から目を逸らすためのようにも思えた。

でも、それは僕にとっても幸いだったかもしれない。

今、僕の世界には、小さな子供のチャオしかいなかった。

このコがどう育つかによって、僕の運命が決まるなんてとても思えない。

でも、そんなことはどうでもよかった。

他に誰もいない世界での、唯一の救いがこのチャオなのだから。

僕はチャオの世話をしながら、ずっと話し続けていた。

僕は、それほどおしゃべりな方ではなかったけど、このコの前では話を止めることができなかった。

これは現実逃避なのかもしれない。

けれど、僕は、僕のことをチャオに話し続けた。

子供の頃のこと。

学校から帰ってきても、家には誰もいなかった。

暗い部屋でお母さんが帰ってくるのを待っていた。

窓の外で楽しそうに遊んでいる同級生達を、ずっと眺めていたこともあった。

一緒に遊ぼうと声を掛ける勇気がなかったんだ。

チャオに僕の話が理解できているかはわからない。

でも、チャオは、じっと僕を見ながら話を聞いてくれている。

そんなチャオを見ていると、なんとなく、僕を心配してくれているような気がしてくる。

だいじょうぶ、今は君がいるから寂しくないよ。

中学の頃のこと。

いじめられたのは、この頃からだった。

抵抗することも、誰かに相談することもできなかった。誰も助けてくれなかった。逃げることもできなかった。

僕の話聞きながら、チャオが僕の膝を撫でている。

なんだか、僕を元気づけようとしているみたいだ。

生まれたばかりのチャオでも、僕の話を理解できているということだろうか。

高校の頃、今のこと。

いじめられるのは変わらなかった。

あいつに出会ってしまった。

チャオが怯えたような表情をしている。

心配しなくてもだいじょうぶだよ、誰も君をいじめたりしないから。

僕は……、また、いじめられることになるだろう……。

もうどうなってもいいや。

一番楽なことを選ぼう。僕に戦う勇気なんて最初からないんだ。

僕はチャオに話し続ける。

君に会えて良かったよ。短い間だったけど、とても幸せだった。もうすぐお別れだね。

僕は、刑務所に行くことになるんだ。

でも、これで、あいつから逃げるができる。

僕は、あいつの手の届かないところに行くんだ。

チャオが進化する直前の最後の一週間は、拘留所で過ごすことになっている。

でも、裁判所の人が僕達を迎えに来た時には、もうチャオはマユに包まれていた。

なぜ、こんなに早くチャオが進化したのか、僕にはわからなかった。

知らせを受けた裁判官が慌てて僕の家に来た時、マユの中からチャオが出てきた。

やっぱりヒーローチャオではなかった。

出てきたのはオレンジがかった色をしたチャオだった。

何タイプかは知らないけど、ニュートラルに進化したみたいだ。

もっとも、ヒーローチャオじゃなかったら、どんなチャオになっても、僕には大した違いはないんだけど。

「これは、ニュートラルの力タイプ、いわゆるオニチャオですね。このことが、どういう意味か君にわかりますか？」

落ち着いた口調で、裁判官が語りかけてきた。

わかっている。

それは、僕が刑務所に入ることになるということなんだ。

「チャオが、ニュートラルの力タイプに進化したこと。そして、通常では考えられない早さで進化したこと。これらのことから導き出される結論は一つです」

裁判官は、ここで一呼吸置いて、僕と僕の目の前に立っているチャオを見た。
「君を守りたいという強い思い、それがこのチャオを変えたのです」

チャオが、僕を守る？

そんなことがあるのだろうか？

「このチャオは君を守れるだけの力を求めたためオニチャオに進化したのです。それも一刻も早く力を必要としていたため、こんなに早く進化しなければならなかったのです」

このチャオは、僕を守りたいという思いでオニチャオになったというんだろうか？

確かに目の前のチャオは、ファイティングポーズをとって、僕を守るように裁判官の前に立ちふさがっていた。

「君は、こんなに小さなチャオに守られなければならないほど弱いのですか？」

返す言葉がなかった。

裁判官から、目を逸らしてうつむいた僕の視線の先には、今にも裁判官に飛びかかろうとしているチャオの姿があった。

「君は、このままずっと、この小さなチャオに守られながら生きていくつもりなのですか？」

僕は、確かに弱い存在だと思う。

でも……。

「君の弱さが、今回の事件を起こしたことは疑いありません。その弱さを克服できない限り、君はまた同じような事件を起こすことになるでしょう。また誰かに同じようなことを強要された時、君はどうするつもりですか？」

チャオが、裁判官に向かって一歩踏み出した。

僕は、そのチャオを引き止めた。

そして、抱っこしてチャオの顔を見つめた。

チャオの中では力強いオニチャオとはいえ、体の大きな人間相手には勝ち目はないだろう。

それでも、このチャオは、僕のために立ち向かおうとした。

なぜ、そんなことができるのか、チャオの目を見てみると、その答えがわかってきた。

チャオの目には「勇気」があふれていた。

それは、僕にもっとも欠けているものだった。

そのことに気づいた僕は、チャオを降ろすと裁判官に向き直って答えた。

「その時は……、僕は、もう逃げたりしません。立ち向かう勇気を、このチャオが教えてくれたから」

僕がそう言うと、裁判官は僕の目を、じっと見つめてきた。

僕は、今度は目を逸らさずに、裁判官の目を見ることができた。

「わかりました。この言葉を聞けただけで『チャオ裁判』を行った^{かい}甲斐がありま

した。これで『チャオ裁判』は閉廷します。判決は後日改めて言い渡すことにしましょう」

そう言うとか裁判官は去っていった。

僕は、チャオと一緒にその後ろ姿を見送った。

どんな判決になっても、今の僕なら受け止めることができると思う。

あれから、何ヶ月かが過ぎた。

僕は今、あのチャオと一緒に暮らしている。

進化した頃の頃はオレンジ色だったけど、今ではすっかり赤い色になっていた。

体が赤くなっていくのはオニチャオの特徴らしい。

でも、詳しい人に聞くと、このチャオはまだ「二次進化」していないらしい。

これから、このコがどう成長していくか、僕はとても楽しみにしているんだ。

僕達が出会うキッカケになったあの裁判は、僕の無罪の判決で終わった。

このチャオが、僕の無実を証明してくれたんだ。

そして、僕をおとしいれたあいつが逮捕された。

あいつの表の知り合いの目はごまかせても、裏の繋がりを完全に隠し通すことはできなかった。

僕の『チャオ裁判』の結果を受けて、警察が威信を懸けてあいつの悪事の証拠を探し出したんだ。

最初からそうしてくれていたら、僕がこんな目にあうこともなかったのだけれど、このチャオと出会うことができたから、あの裁判があつて良かったのかもしれないと思う。

このチャオは、今では僕の親友になった。

人生を変えてくれた大事な友達を、僕はこう呼んでいる。

「ユウキ」

ほんのちょっと勇気を出すことで、自分を変えることができる。

君が教えてくれたことを、これからも大切にしていこうと思う。

完

ONLINE DREAMS

ホップスター

チャオというキャラクターにスポットを当てた作品は数あれど、チャオ育成というゲームそのものに着目した作品はなかなかない。そんな中、ONLINE DREAMSは、ある意味では幻想の世界を描き出しました。これを読めば誰もが「こんなゲームが欲しい！」と思うはず。続編として「ONLINE DREAMS Episode 2 -Real Dreams-」も書かれています。

1998年12月。

DC版「ソニックアドベンチャー」が発売。チャオ、この世に生誕す。

2001年6月。

DC版「ソニックアドベンチャー2」発売。ヒーローチャオ、ダークチャオが登場。

2001年12月。

GC版「ソニックアドベンチャー2バトル」発売。チャオは大人気キャラクターとなる。

2007年4月。

新作が全く出ない、というあまりのチャオの不遇さに一部チャオラーがキレて（！？）署名運動を始める。

数年後。

その願いが叶い、ついにチャオの新作ゲーム発売される…

それは、チャオラーたちの予想を大きく覆すものだった。

…いわゆる「ネットゲーム」。名前は、「CHAO ONLINE」。

プレイヤーはチャオブリーダーとなって、簡単なゲームをして小動物やカオスドライブを集めて、ガーデンのチャオに与えて育てる。

同じように簡単なゲームでリングを稼いでレア卵を買ったりすることもできる。

育てたチャオをレースやカラテで他の人のチャオと競わせたり、
自分のガーデンを自分の好きなようにアレンジしたり、
あるいは他の人のガーデンにお邪魔したり、
また延々とチャットに明け暮れたり…

ネットゲームならではの楽しさと、チャオのかわいさが相まって、ソフトは大ヒット。

発売直後はサーバーがパンクして苦情が殺到する、なんて事態もあった。

…だがそれも、昔の話。

どんなネットゲームでも、発売から数年経てば人は減り、新しい作品へと移動する。チャオ・オンラインだって同じ。

これは、そんな架空の歴史の先、201X年、人が減って寂しくなった「CHAO ONLINE」の世界で起こる、小さくて大きな物語——

【ONLINE DREAMS】

少年はつぶやいた。

【少年】「はあ、今日も人がまばらだなあ…しょうがないか。」

少年、といっても、チャオ・オンライン上での話である。

実際には40過ぎのオタクかも知れないし、あるいは女性なのかも知れない。だが、この世界でそれは意味を成さない。

この世界では、自分から喋ったりオフ会でも開かない限りは、サーバー上で見える姿が「全て」なのだ。

ユーザー名、イクス。

彼は今、コミュニケーションロビーの中央にいる。

基本的にブリーダーはチャオガーデンかプライベートルーム（自分の部屋）で過ごす。交流のために巨大なホールのようなものが設置されている。それが、コミュニケーションロビー。

チャオガーデンやプライベートルームに同時に入れるプレイヤーの数には制限があるので、多人数でのチャットをする場合などに利用されていた。

…が、人が少なくなった今では使われることはほとんどない。たまに移動する人を見かけるくらいである。

発売直後はここに人が溢れ、見ず知らずのプレイヤーとのチャットが盛り上がったものだ。

などと昔を思いながら、ロビーを歩く。

彼はチャオ・オンライン以前からのチャオフアン。

人が少なくなった今でもここにいる理由は、チャオが好きだから。それしかない。だけど、それで十分。

【イクス】「さてと、それじゃ今日も稼ぐかな、っと。」

と、リング集めのゲームに向かった。

普通のゲームであれば、1人でできれば十分だが、ここはオンラインゲーム。それではつまらないし、意味がない。

複数人でミニゲームに挑戦した方がリングや小動物などを集めやすくなってるのだ。

…が、やる相手がいなければ同じことであるが。

リング集めなどのゲームも、バリエーションがそこそこ多いのでまだ楽しめるが、アクションが苦手な人でも稼げるようにするために難易度は低く、マンネリ

化している。

既に新しくミニゲームが配信されることもなくなった。

残り少ないこの世界に住む者、誰もが感じていたこと。

『いよいよ、チャオ・オンラインも末期か——』

イクスは慣れた動きでゲームをクリアし、リングを稼ぐ。

数分後、ゲームが終了し、彼はコミュニケーションロビーに戻った。

するとそこには、今では数少ないイクスの友人、メリッサがいた。

赤い帽子とロングテールが印象的な女性キャラクター。いわゆる「中の人」は問題にしてはいけない。

【メリッサ】「こんばんは〜。」

【イクス】「お、こんばんはー。」

人が減り末期になったオンラインゲームに於いて、友人が1人でも残っている、というのは奇跡的なことである。

友人が皆いなくなり、1人になって飽きて止めてしまう…オンラインゲームから「引退」するケースとして、よくある話の1つである。

かくいうイクスだって、メリッサがいなければ今はやってたかどうか分からない。

チャオの進化や色の遺伝の法則などは基本的にソニアド2バトルのそれを継承しているので、結局はソニアド2バトルをやれば良いという話になる。

人と人がつながるから、オンラインゲームなのだ。

【メリッサ】「そういえば、あのチャオどうなったの？」

【イクス】「あー、無事全ステータスレベル99。見てみる？」

【メリッサ】「いいの？ それじゃ、お邪魔しますー。」

そう言って、2人はコミュニケーションロビーからイクスのチャオガーデンへと移動した。

【メリッサ】「おーっ、ちゃんと二次進化もしてるー。」

【イクス】「まだ完全じゃないけどねー。」

【メリッサ】「レースとかはもう出したの？」

【イクス】「まだ。今からやるつもりだけどね。」

こんな感じで、そのチャオの前でチャットする2人。
他にも、何匹ものチャオが、2人のまわりで遊んでいる。

【メリッサ】「そういえば、チャオって確か、最初はソニックシリーズの付属キャラだったんでしょ？」

【イクス】「うん。ソニックのキャラでリングや小動物やカオドラを集めて、チャオを育てる。一番最初はヒーローやダークの概念もなかったらしいよ。オレはその頃はまだチャオは知らなかったけどね。」

【メリッサ】「へー、最初はニュートラルだけだったんだ？」

【イクス】「うん。その後、いくつかソフトが出たんだけど、それから何年もチャオが育てられるソフトが出なくてね。確か、ソニックシリーズにちょこっと顔を出すだけだったのかな？」

【メリッサ】「それって…『過去のキャラクター』ってことじゃないの？」

【イクス】「たぶんそうだったんだと思う。当時のソニックチームにとって、チャオは『過去のキャラクター』に過ぎなかった… だけど、一部のチャオファンが、それを許さなかった。」

【メリッサ】「それが、あの署名活動…」

チャオがまだあまり有名でない時代、そしてもう10年近く前の話。

署名活動は、『伝説』として語り継がれていた。

いわば、このゲームを『創った』活動なのだから――

【イクス】「その答えが、このゲーム…チャオ・オンライン。」

【メリッサ】「なるほどねー。」

チャオガーデンに、ゆっくりとした時間が流れる。

基本的にはソニアド時代と同じで、プレイヤーがチャオガーデンに居ない限りは時間が進まない。

『浅く、広く』よりは『狭く、深い』コミュニケーションを目指したゲームだ。

…そこに、人影が現れた。

他人のチャオガーデンには、その人の「カード」、簡単に言えば名刺を持っていないと入れない。

カードはコミュニケーションロビーで直接会うことで交換することができる。
つまり、少なくともイクスのカードを持っている人、ということになる。そして人が少なくなった今、ここに入る人間はメリッサを含めて数人しかいない。
…が、そこに現れた人は、イクスの予想を裏切った。

【イクス】「グライフ…さん…！？」

【メリッサ】「ウソ…！？」

そこには、既に『引退』したはずの、グライフの姿があった。
彼は印象的ないわゆる「おじさんキャラ」であり、2人の先輩的存在だ。
メリッサも初心者の頃に彼に色々教えてもらったという。

【グライフ】「よう、久しぶりだな。ちょっと戻りたい気分だったので戻ってきたぜ。」

【イクス】「お、お久しぶりです…！！」

一礼をする。こういうアクションもすることができる。

【グライフ】「何の話をしてたんだ？」

【メリッサ】「チャオ・オンライン以前の、チャオの歴史についての話です。署名とかね…」

【グライフ】「ああ、それか。」

そんな中でも、チャオガーデンのチャオたちは気ままに遊んでいる。

【イクス】「あ、そろそろ木の実あげる時間だな…ちょっと食べさせてきます。」

【メリッサ】「はいよー。」

するとイクスはガーデンのヤシの木のところへ走っていった。ただし、会話は聞こえる。

【メリッサ】「そういえば…グライフさんはどうしてるんですか？」

【グライフ】「今は別のネットゲやってんだ…エターナルギャラクシーっての。」

【メリッサ】「え、あれやってるんですか！？」

エターナルギャラクシー。

この時代、最も有名なオンラインゲームの1つである。

その独特な世界観と斬新なシステムが人気を呼び、マスコミにも取り上げられた程だ。イクスやメリッサも名前は聞いたことがある。

【グライフ】「ああ。昔からネトゲやってる俺としたことが、完全にハマっちゃってな。正直、しばらくは戻れそうにないぜ…」

【メリッサ】「やっぱり、面白いんですか？」

【グライフ】「まあな…よくできてると思うぜ。何より運営が安定してる。」

ネットゲームは、発売したらそれで終わり、ではない。「サーバーの運営」を行う必要がある。そして、これが一番重要。

例えば、バグを見つけたら修正する、新しい要素を定期的に配信する、不正行為を取り締まる、などなど…。

…と、言うだけなら簡単であるが、実際にはとても難しい。

バグ修正が困難だったり、不正行為がいたちごっこだったりすると、途端に運営が難しくなる。

ゲームの出来がよくても、運営に失敗してしまい、人が減る…そんな経緯を辿ったネットゲームは過去に数え切れない。

エターナルギャラクシーが人気な理由も、ここにあるのだ。

【メリッサ】「なるほどね…」

【グライフ】「俺もこれからはたまには来るだろうけど、あっちメインだろうなあ。」

そう2人が話していた時、突然イクスがエサやりを止めた。まだ全員に木の実を食べさせていないのに、である。

【イクス】「…」

【メリッサ】「イクス、どうしたの？」

【イクス】「何がエターナルギャラクシーだよ…何が運営がいいだよ…何が世界観がいいだよ… みんなみんな…他に面白いネトゲが出たらあっさりと離れてく…そんなのおかしいよ！！」

突然のことに、メリッサもグライフも何も言えない。

【イクス】「発売直後はみんな『チャオかわいい！』って言ってたのに！『ずっと育てたい』って言ってたのに！！『サービス終了までいるかもしれんw』とか言ってた奴も！結局誰も残ってないじゃないか！！」

しばらく、チャオガーデンに沈黙が走る。

その後、グライフがこう言った。

【グライフ】「…じゃああれか？ おまいさんみたいに最初から最後まで同じゲームを続ける人が正義で、コロコロ遊ぶゲームを変える人が悪か？」

【イクス】「…そうじゃないよ…でも、悔しいんだ…折角チャオのかわいさをみんなに分かってもらえたと思えたのに…」

そのまま、イクスの姿が消えた。そう、『落ちた』。

それと同時に、メリッサとグライフは、コミュニケーションロビーに戻った。というより、放り出された。

イタズラ防止のため、チャオガーデンの主がログアウトすると、そこにいた他の人は自動的にコミュニケーションロビーに戻る仕様なのである。

しばしの沈黙の後、グライフがぼつりとつぶやいた。

【グライフ】「純粋過ぎる想いは裏返って悪になる、か…」

やがて、2人がゆっくりと語りだす。それはコミュニケーションロビーをゆったりと流れる小川のように。

【メリッサ】「人間性の違い、なのかな… 流行りに流されることが悪い訳じゃないし。」

【グライフ】「それにネットゲはコミュニケーションが肝だ。仲のいいフレ（フレンド）がそっちに行ったから、とみんなで行っちゃうこともある。」

【メリッサ】「イクスさんにとっては目の前で『チャオを辞める』ところを見せられる訳だから、余計…」

【グライフ】「今日は久しぶりだし色々やろうと思ったんだが…悪いな。俺のせいでこんなになっちゃって。」

【メリッサ】「いえいえ、とんでもないです。むしろ戻ってきてくれて嬉しいですよ。…イクスさんもきっと、心の中ではそう思ってるはずですし。」

【グライフ】「だといいがな…ま、今日は落ちとくわ。お疲れ様。」

【メリッサ】「お疲れ様でした。」

…やがて、2人の姿も消えた。誰もいなくなったコミュニケーションロビーは、再び静寂に包まれた。

それから、イクスもとうとう姿を見せなくなり、そのまま1週間が過ぎた。

【メリッサ】「あの人のことですから、昔のゲームでチャオを育ててるのかも…」

【グライフ】「オフラインに籠^{こも}れば、ただチャオだけを見ていれば済む…か。」

その時、2人が考えたことは、同じだった。

【メリッサ】「でもそれは…本当に幸せなの…？」

【グライフ】「それが本当の幸せかどうかは…分かんないな。」

【グライフ】「…普通にかぶったなw」

【メリッサ】「な、なんかごめんなさい…w」

しばらくの間をおいて、再びメリッサが。

【メリッサ】「私はよく分からないですけど…オンラインゲームになるって、チャオにとっても、本当に幸せなことだったんでしょうか？ あのままオフラインのみのキャラで居続ければ、運営がどうかで批判に曝^{さら}されることもなく、イクスさんみたいな辛い目に遭う人も減って…」

【グライフ】「どうだろうな…ソニックチームにでも聞いてみるか？ ってのは冗談として、1つ言えるのは…もう戻れない、ってことじゃねえのか？」

【メリッサ】「そうですね…」

…このまま、月日だけが過ぎていくと思われた。

が、この翌日、とんでもない事態が、彼らの目の前にのしかかる。

『その日』、公式ホームページに、このような文章が掲載されたのだ。

【重要】「CHAO ONLINE」ネットワークサービス終了についてのお知らせ

平素より弊社「CHAO ONLINE」のネットワークサービスをご利用いただき、誠にありがとうございます。

このたび、201X年9月30日24時をもちまして、「CHAO ONLINE」のネットワークサービスを終了させていただくことを決定いたしました。

長らくの間「CHAO ONLINE」のネットワークサービスを続けて来られましたのは、皆様の暖かいご支援があったからこそと、スタッフ一同、心より厚く御礼を申しあげます。

現在もご利用いただいております皆様にはご不便、ご迷惑をおかけいたしますが、何卒ご理解いただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

この一報を聞いた2人は、当然チャオ・オンラインに駆け込んだ。この時、6

月末。残り3ヶ月。

【メリッサ】「チャオ・オンラインが…」

【グライフ】「終わっちゃう…!!」

だが相変わらず、イクスの姿は見えない。

カードを交換した相手であれば、その相手の居場所（チャオガーデンか、コミュニケーションロビーか、ミニゲーム中かなど）が分かるようになっているのだが、そもそもオンラインになっていない。

【メリッサ】「いずれは来ると分かってた…でも、本当に来るなんて…」

【グライフ】「全てのものに始まりがあれば終わりがある…それだけなんだから…」

突然の終焉^{しゅうえん}予告。

チャオ・オンラインは、異様な雰囲気^{しゅうえん}に包まれた。

数少ないプレイヤーがざわめくようにコミュニケーションロビーを駆け抜ける。

【メリッサ】「接続人数も、明らかに増えてる…!」

【グライフ】「そりゃそうだろう… このゲームにオフはねえんだ…」

チャオ・オンラインのデータは、ゲームサーバー上に保存され、オフラインでチャオを育てることはできない。これは不正防止の意味合いが強い。

つまり、サービスの終了、それは彼らのチャオ全てが電子の海へと消えてしまうことを意味する。

久しぶりに見る名前もいくつかある。その様子をコミュニケーションロビーの中央で見ている2人。

【グライフ】「色んなネットゲやってきたが…これだけリアルなのは初めてかな…」

そして、次の瞬間。

【メリッサ】「あ、イクスだ!」

コミュニケーションロビーに、1週間と1日振りにイクスの姿が現れた。そこに向かう2人。

イクスもそれに気づいたのか、2人の方を見る。

…そして、開口一番（といっても吹き出しであるが）、
【イクス】「ちくしょおおっ！！！」
そう、叫んだ。

普通、公共の場であるコミュニケーションロビーで叫ぶなんてことはマナー的にありえない。

場合によっては、「痛い人」として認識される場合もある。
が、今回は違った。それはむしろ、自然なこととして認識された。

【イクス】「なんで…なんでこんな…」

メリッサとグライフは、今のイクスにかける言葉を持ち合わせてはいなかった。黙って立ったまま。

…そこに、1人の男性キャラがやってきた。キャラクター名、DD。
イクスたちの昔の仲間である。が、最近はずっかり見なくなっていた。
他の人たちと同じように、サービス終了を知って慌てて戻ってきたのであろう。

【DD】「うお、みんな久しぶり！ やっぱみんな、終わるって聞いて戻ってきたの？」

【メリッサ】「お久しぶりですー。」

【グライフ】「まあ、俺は似たようなもんかな。でもこっちの2人は違うぜ？ ずっとやってたんだからな。」

【DD】「マジ！？ すごいな、ずっとやり続けてたんだ… あ、オレ、サービス終わる前に色コンプしてみたいんで、また！」

そう言うと、彼は足早に彼らの前を通り過ぎた。

彼以外にも、久しぶり、と挨拶する人が何人もいた。

そして、そのほぼ全員が、挨拶だけして、足早に自分のチャオガーデンへと消えていった。

サービス終了までに、〇〇をしておきたい。

普通ならごく当たり前の考えである。

【イクス】「…今度はこれかよ…」

【メリッサ】「イクス？」

再び、イクスの様子が変わった。

【イクス】「いざサービスが終わるってなればみんな掌^{てのひら}を返したように戻ってきてやがって！色コンプしたいんだっただけとやってろよ！レース制覇したいんだっただけ毎日通ってろよ！」

今のイクスには、自分以外の何もかもが嘘で塗り固められたように感じられた。

どうせ他の人もチャオなんかどうでもいいんだ。

「チャオ育て」という「ゲーム」がしたいだけで、チャオをかわいがりたい訳なんかじゃない。

サービスが終わればみんなさっさと他のゲームで遊んでるに違いない。

そして、チャオはまた、人の心から永遠に忘れ去られていく…

【イクス】「結局、みんなそうなんですよ！？ それでいいんですよ！？」

が、それをグライフがキツパリと否定した。

【グライフ】「違う！」

【グライフ】「思い出せ！なんでチャオ・オンラインは作られたんだ！？」

【イクス】「…！」

【メリッサ】「10年近く前に、いたんでしょ！？ チャオがこのまま人々の心から忘れ去られるのが、悲しくて、悔しくて、許せなかった人たちが！」

…署名運動。

【メリッサ】「その人たちがみんなの想いを集めた結果作られたのが、このゲーム… 私はそう聞いた。他にもない、イクスさんからね。」

【イクス】「ごめん… なんか最近、おかしくなってたよ…」

イクスは頭を下げるアクションをして、謝った。

が、今度は悩み出す。

【イクス】「でも、10年前の人たちみたいに、署名をするなんて自分にはできそうにないし…」

【グライフ】「いや、署名ってのはあくまでも『想いを表す1つのカタチ』に過ぎないんじゃないか？ チャオに対して、それぞれ自分にできる目一杯のことをする。それが、チャオにとっても一番幸せなんじゃないかな？」

【イクス】「うーん、自分のチャオを、目一杯かわいがるぐらいしか、できないけど…」

【グライフ】「それで十分だよ。むしろそれが一番大事なんじゃないか？」

答えは、決まった。

【イクス】「メリッサさん、グライフさん、ありがとうございます。残り少ない時間で、自分ができることを、やってみたいと思います。」

こうして、彼らのチャオ育ても再開した。

イクスにとって、6月末にサービス終了が発表になってからの時間は、チャオ・オンライン発売からの時間の中で、一番充実したものとなっていた。

発売直後は、それこそ徹夜でかわいがったのに。

発売から数年、1日も休むことなく、毎日チャオガーデンに通ったのに。

それでも、充実度では、「残り3ヶ月」には、なぜか敵わなかった。

9月初め。

最後の1ヶ月ということで、サーバーが無料解放された。

ますますチャオ・オンラインに人が戻り、発売直後、とまではいかないものの、かなりの活気を取り戻していた。

【キャラA】「懐かしーい！」

【キャラB】「やっぱりチャオはかわいいねー！」

【グライフ】「見ろよ、みんな戻ってきてるじゃねえか。」

【メリッサ】「みんな、チャオを忘れた訳なんかじゃないのよ。そりゃ人間だから、他のものに離れてしまうことはあるけど…」

【イクス】「これだけの人が、チャオを忘れずにここにいてくれる…！」

それは、何物にも代え難い光景であった。

「運命の日」9月30日が近づくにつれて、ますます活気を取り戻すチャオ・オンライン。

そして、チャオ・オンラインのホームページにある公式掲示板、つまり「チャオB」も再び賑^{にぎ}わいを増していた。

「30日までに〇〇したい！ どうすればいいですか？」

「最後の思い出に友達募集！」

「レース大会やります！ 最後なのでみんな参加してください！」

そんな書き込みが、次々と増えていく。

それはまるで、散り際鮮やかな花のように――

そんな中、こんな書き込みが。

「9月30日夜9時、残り3時間からコミュニケーションロビーでラストカウントダウン集会をしませんか？」

最後の瞬間を、みんなで一緒に見届けよう、というのである。

そして、その発言に対し、賛同の書き込みが相次いだ。

「いいね！ やりましょう！」

「僕も行きます！」

「最後の思い出になるといいですね！」

それは、チャオ・オンラインの世界でも話題になっていた。

【イクス】「みんなで行きましょう！」

【メリッサ】「そうね！ 10月からは、みんなバラバラになっちゃうけど…」

【グライフ】「なに、チャオが好きならまたどこかで会えるさ。俺が言うのもアレだけどな。」

そして、ついにやってきた、最終日、9月30日午後9時。

【イクス】「うわっ、すごい人！」

【グライフ】「発売日並じゃねえのかこれは！」

【メリッサ】「ウソ…ざっと見ただけで100…いや、200人はいる！」

もちろん集会に参加しない人のほうが多いため、全接続者が200人、という訳ではない。

チャットの発言も、すぐに流れてしまい、会話を把握するのはまさに至難の業。

そんな中、カウントダウン集会が始まった。

【イクス】「終わっちゃうんだ… チャオ・オンラインが…」

…すると、突然、イクスが走り出し、自分のチャオガーデンへと消えた。

【メリッサ】「イクスさん!？」

【グライフ】「最後はチャオと一緒に迎えたいんだろ…そつとしといてやれ。」

【イクス】「ありがとう…チャオ…」

彼はチャオガーデンで、1匹1匹をなでて、またなでて、繰り返し、全員に最後の挨拶を告げていた。

そんな中、午後10時。

突然、画面上部にテロップが流れた。

みなさんこんばんは！ ソニックチームです。

【メリッサ】「テロップ!？」

今まで、「CHAO ONLINE」を遊んでいただきまして、ありがとうございます。

ここまで長い間サービスを続けてこられたのも、皆さんのおかげだと、スタッフ一同感謝しています。

さて、突然ですが重大な発表があります！

6月末のサービス終了発表以降に頂いたたくさんのお願いやご意見を真剣に検討した結果、

今年12月23日、チャオの誕生日に続編「CHAO ONLINE2」を発売することになりました！！

…その瞬間、コミュニケーションロビーが興奮の渦に包まれた。歓喜の絶叫がとどろ轟き、その声は収まらない。

この「CHAO ONLINE2」では、新しいチャオの追加や新ゲームはもちろん、あっと驚く新機能や新システムも用意していますので、お楽しみに！

そしてなんと、「CHAO ONLINE2」では、引き継ぎ登録をすることによって、なんと「CHAO ONLINE」のサービス終了時のデータを引き継ぐことが可能になります！

【イクス】「みんなと…また会える…！！」

しばらくの間、チャオとお別れしなくてはなりませんが、どうぞ12月まで楽しみにしてください！

【グライフ】「すごいサプライズだなこりゃ…！」

それでは、残り少ない時間ですが、「CHAO ONLINE」を最後までお楽しみください！

最終日の午後10時、残り2時間になったの、まさかの続編発表。しかも、テロップ上にて。

コミュニケーションロビーは、まさにお祭り騒ぎとなっていた。

そこに、イクスが戻ってきた。

【メリッサ】「あ、イクス！」

【イクス】「こんなことって…あるんですね…！！」

【グライフ】「いや…普通ねえぞこんなこと…！」

そこに、悲しい顔は1つもない。3ヶ月経てば、またみんなと、チャオと、会えるのだから。

そして、ついに来る、最後の瞬間——

まもなくサービスが終了します。プレイ中のユーザーはすみやかにログアウトしてください。

というテロップが流れるが、落ちる人間など1人もいない。みんなでカウントダウンを続ける。

(なお、自らログアウトしなくても、時間になれば自動的に切断される)

やがて、人々の叫びが、1つになった。

「5！」

「4！！」

「3！！！」

「2！！！！」

「1！！！！！」

——そう、これは終わりなんかじゃない。始まりなんだから——

(No.012)

サーバーとの接続が切断されました。タイトル画面に戻ります。

Press start Button.

チャオ、犬をかってみる

DX

独特のゆるふわさが癖になる、DXさん初期の作品です。

チャオとほかの動物との接触は、ゲーム内ではキャブチャとして、互いに対立する生物のように描かれます。けれども、実際には同じ愛玩動物なのですから、共通点は意外に多いのかもしれませんが。あなたは犬派？ それともチャオ派？

チャオ「そにつくー」

ソニック「ん、なんだ？」

チャオ「ちやお、いぬをかってみたいちやお」

ソニック「犬う？ んー」

一時間経過

チャオ「そにつくーはやくきめてちやお」

ソニック「チャオ、ちゃんと自分で世話できるか？」

チャオ「できるちやお」

ソニック「じゃあいいだろう。いつしよに買いにいこう」

チャオ「やったちやおーかいにいくちやおー」

ペットショップ

チャオ「ちやおこれがいちやお」

ソニック「チワワか（ベタだな）」

チャオ「なんかいったちやおか」

ソニック「いえなにも」

家

ソニック「名前はなににする？」

チャオ「なまえちやおか…」

一時間経過

ソニック「あの一」

チャオ「ちやおちやおちやおちやおちやー」

ソニック「わ！ なんだよいきなり大きい声をだすなよ」

チャオ「なまえきまつたちゃお」

ソニック「なんていう名前だ？」

チャオ「ぼち」

ソニック「い、いい名前だな（ベタベタベタベター！）」

チャオ「なーんかさつきからいつてるちゃお」

ソニック「いえなにもいつてないでございまする」

チャオ「（どーよーしてるちゃお）」

チャオ「ま、それはおいといてよろしくーぼち！」

ぼち「わん！」

三年後

チャオ「ちゃおーもうだめちゃお、てんせいしちゃうちゃお」

ぼち「くーん」

チャオ「だいじょうぶちゃおしんじやうわけじゃないちゃお」

ソニック「あ、ピンクの繭につつまれた」

ソニック「たまごになった」

たまご「こんこん、ぱか」

チャオ「ちゃおふつかつちゃおー」

ぼち「わん！」

それから幸せに暮らしましたとき

END

遠足の贈り物

チャピル

「遠足大作戦」から続くシリーズの第三弾。ステーションスクエアを舞台とする世界観ということもあって、他の作品のオマージュが随所に見られる作品となっています。各話の末尾にある(truncated)とは、CHAO BBSで長文が投稿された際に付加される、内容が端折られたことを意味する文字列。原文ではこれがわざわざ計算された状態で投稿されました。

その1 遠足勧誘と異常な反応

「なあ、どうしよう…」

「どうしようって言われても…」

暗い部屋の中、机を囲んで、神妙な表情で相談している様子の二人。

いや、正確に言えば一人と一匹。少年が一人と、チャオが一匹です。

彼らが挟む机の上には一枚の紙切れが。

「ロッカクに相談されても困るちゃお。誘われたのは、オマエちゃおよ？」

「うーん…」

その紙切れ、どうやら映画のチケットのようです。中央に大きく「CHAO IN SPACE 2」の文字。

「映画は別にいいんだけどね、その後の食事が問題なんだよ食事が」

力のこもった少年の言葉に、首をかしげるチャオ——ロッカク。

「遠足に行くなら、やっぱり弁当だと思わない？ 思うだろ。お店で食べるなんて、なんだかなあ…」

少年の言葉にため息をつくロッカク…

と、そのとき、

「たっだいまあ〜。」

部屋の扉が開き、暗い部屋に光が差し込みました。とたんに、演出効果諸々を狙ってカーテンまで閉めていた部屋の実態が、丸見えに。

帰ってきたのは、もう一匹のチャオ、カラアゲです。

「おかえりー。」

少年は席を立つ、と同時に映画のチケットをすばやく隠し、笑顔を作り、帰ってきたチャオ、カラアゲに声をかけます。

しかし、その笑顔も次のカラアゲの一言で凍りつきました。

「今度は映画を観に行けるちゃおか。楽しみちやおねえ。」

さて、このあたりで登場人物紹介をば。

まず帰ってきたチャオ、カラアゲは、ヒーローガーデン出身のコドモチャオです。ロッカクも同じヒーローガーデン出身、彼らは幼馴染です。ひょんなことからヒーローガーデンを抜け出し、ステーションスクエアへとやってきました。

凍った表情の少年、彼については、詳しいことは明らかになっていません。現在高一、特徴としては、遠足がものすごく大好きです。

ここはその少年の住むアパート。もともと一人で暮らしていた少年ですが、一ヶ月ほど前からカラアゲとロッカクも住みつきました。

少年の高校はチャオと人間の共学が認められているので、最近はロッカクと一緒に通っているそうですよ。

で、

「そんなんっ、どうして映画だってわかったんだっ！！」

あわてふためく、少年。

その様子を、カラアゲのポヨがハテナになります。

「ばれたってどうゆうことちゃお？ チャオは何も知らないちゃお！ さてはオマエら、チャオに黙って何か秘密の作戦を立てていたちゃおね！ はっ、もしかしてそれが映画！！」

カラアゲの発見に、ますますあわてる少年。

「いや、なんでもない、映画なんて誰が言った？ 競馬の間違いじゃないかい？ こないだのゲ…」

「いや、オマエは確かに映画と言ったちゃお！ おいロッカク、真相は何ちゃお？？」

「ロッカク、何も言うなあつ。」

少年の叫びもむなしく、

「実は少年は今日、同じクラスの女の子に、映画に誘われたちゃお。」

ロッカクはカラアゲにあっさり教えてしまいました。

カラアゲの追及の手は、止まりません。

「それはつまり、デートのお誘いちゃおね？ 相手は誰ちゃお？ 日取りはいつちゃお？ いつから付き合ってたちゃおっ！？」

少年が答えます。

「日にちはあさっての土曜日、午前十時！ 付き合ってたことなんて一度もない！ 彼女いない暦十六年！ 相手…同じクラスの人だけど、明るいというか、感覚的

というか…」

「オマエ、さっきは隠そうとしたくせに…」

カラアゲは大きくうなずいています。

「それならまたないチャンスちやお！ 無難に好感度を上げる方法を伝授してほしいかないちやおか？ チャオのモテモテウンチク講座でもいいちやおよ。あさつての土曜日、となると時間は限られているちやお！ 急いで準備しないと！」

しかし少年は、何やら複雑な表情です。

「いや、それがさあ、行こうか行かまいか、迷ってるんだ。」

少年の台詞に、目を白黒させるカラアゲ。

ロッカクが台詞を引き継ぎます。

「少年いわく、お昼はお弁当でないとダメらしいちやお…」

「弁当のよさがわからないような人と付き合ってもなあ…」

「……」

「…えっと、ほんとのところ、どういうお誘いだったちやおか？」

カラアゲの質問に、通学組の二人が答えます。

「昼休みにふらふらしていたら…」

「突然後ろからどーんと、擬音とともに声をかけられて…」

「『その少年！ 週末映画行かない？ チケット二枚手に入ったから』」

「その後の流れで、食事と一緒にすることになったちやお…」

「…ぜんぜん断る理由がないちやおね。」

「同感ちやお。」

「いやだって弁当が。」

「最初は映画だけの予定だったんでしょ？」

「食事を言い出したのは向こうだった！」

「『ひょっとして何か用事あった？』『うーんどうしよう。』『あ、ちなみに昼食もつけるから。』」

「それはオマエが優柔不断だからちやお！！」

「どうして昼食の話が出る前に、一度悩んだちやおか？」

「チケット二枚というのが怪しすぎて、別の意味での罠だと思った。」

「最初に準備してたに決まってるちやお！」

やれや(truncated)

その2 流れの波と前日予定

やれやれといった表情のロッカク。

「こないだの遠足のときはびしびし行動してたのに、こういうことになるは無駄に悩むちやおねえ。」

ロッカクの台詞に、少年は首を振ります。

「あの時は綿密な計画に沿って行動してたからな。」

「どこが。」

少年は立ち上がって宣言します。

「とにかく、僕は、行かない！」

「なーんでーちゃおー！！」

ダブルでチャオの、猛抗議。

「オマエに気があるという物好きがどんなヤツか気になるから、必ず行くちやお！」

「やだ！」

「デートだって一種の遠足だと思えばいいちやお。」

「遠足は弁当のあるものだけなんだ。」

「映画だけ行って食事は断るってのはどうちやお？」

「やだやだ。」

「少年ー！」

「やだ、絶対断る！！」

結局少年はそのまま意見を変えようとせず、翌朝金曜の学校へと出発していきました。

家を出る直前、カラアゲがさりげなくチケットをポケットに滑り込ませていましたが、少年はへそを曲げたままです。

学校に着いて、下駄箱を開けた少年とロッカクの目に飛び込んできたのは、次のような文句でした。

「昨日言い忘れていたことがあったから、改めて話をしたいんだけど、どうかな？」

「これは…」

固まる少年。

「ど真ん中ストレートちやおね。」

少年はしばらく考え込んでから、手をぼんと打ちます。
「相手にも気の毒だし、きっぱりと断ることにしよう！」
「それは！ ダメちゃお！！」
「どこが？ これぞ完璧な計画だと思うのだが。」
「まだ本当に相手に気があるかどうかもはっきりわからないんだから、それを確認するだけでもいいちゃお。とにかく行きなさいちゃお！ 食わず嫌いはもってのほかちゃお！」
ロッカクに押し切られる形で、しぶしぶ教室に向かう少年。
教室の扉をがらりと開けると、偶然にも、目の前には話題の彼女が立っていました。
「おお、少年。」
彼女、片手を挙げて挨拶。^{あいさつ}
「手紙読んだでしょ。ちょっとこっちに来て。」
あまりの偶然に驚き、物も言えない少年の手を引いて、ひとけのなさげな窓際に移動します。

そこへ来て、落ち着いた少年がここぞとばかりに口を開きました。
「実は、明日は行けそうにないんだ。」
「えっ、なんで？」
驚く彼女。隣にいたロッカクが横槍をいれます。
「少年っ、オマエ暇なくせに、デタラメ言ってるちゃお！！」
倒れる少年。
「ああ、なんでそれを言ってしまうんだあつ。」
「暇なら行けばいいちゃおに、ねえ？」
彼女は、苦笑しています。
「なんか、私避けられてるよ。」
その台詞に、激しく首を横に振るロッカク。
「ほんとに、ゼーんぜん、暇ちゃお！」
少年、今度は落胆のため、またしても言葉がありません。

「それなら、昨日言い忘れていたことってのは…」
彼女はそう言って勝手に少年のポケットをあさり、映画の券を取り出します。
「実はこれ、ペア券で、チャオと人で、一組。」
「！！？」
言葉ないまま驚く少年。

「そういうわけだから、ちゃんとそのロッカクと二人で来ないと映画観れないから。」

よく見れば、映画の券には確かに「チャオと人間のペアにのみ有効」と書かれています。

「それじゃ、明日だったよね。よろしく。」

彼女はそれだけ伝えと、足取り軽やかに去っていきました。

「…これって本当にデートの誘いだったのかな？」

少年の疑問にロッカクはただ、首を傾げるだけでした。

「と、こんな感じだったちゃお。」

ロッカクが一通り、カラアゲに学校での出来事を説明しました。

「うーん。」

聞いていたカラアゲが腕を組みます。

「それってあれじゃないかちゃお。チャオと飼い主の、ダブルデート。」

「そ、それはないちゃおよ。」

ロッカクがあわてます。

「第一彼女、チャオと一緒に学校に来てるの、見たことがないちゃお。」

チャオとの共学が一般的だといっても、まだまだ一人で通う人も多いのが実情です。

彼女もそんな一人でした。

ロッカクが話をまとめます。

「というわけで、この件に関しては、単なる勘違いの可能性が高いことが判明したちゃお。」

「なるほどー。にしてもその彼女も、少年のことを『少年』と呼ぶちゃおね。」

「ロッカクと一緒に行くようになってから、『少年』がかなり浸透したちゃお。今はもう、本名で呼ぶ人はほとんどいないちゃおね。」

「ほおー。」

どことなく楽しそうなカラアゲ。

カラアゲは笑顔のまま少年に話しかけます。

「じゃあもう、映画に行かない理由はなくなったちゃおね。少年っ！別に付き合わないんだったら、弁当がどうか関係なしちゃお！」

「いや、まだわからん。」

渋い顔をしながら答える少年。

「ペア券が二枚あるんだったら、彼女のほうにもチャオがいることになるぞ。これは本当に、ダブルデート…」

「まっさかあ。」

楽観視のカラアゲ。

「まさかこのロッカクに、それはないちゃおよー。」

「まじちゃお！？」

深刻視のロッカク。

「それは困ったちゃお。どうするちゃお！？ 快諾、断る、お友達…」

少年はにやにやしています。

「そんなわけだからむ(truncated)

その3 カラアゲサイドとジャストな字数制限

「そんなわけだからむしろ、僕よりロッカクのほうが心配だなあ。なあ、カラアゲ？」

少年に便乗するカラアゲ。

「ヒヒヒ、そうちゃおね。ロッカク、この際ダイエットをしてみないちゃおか？ん？ ダイエットは明日までにはきついちゃおか。それなら、魔術で好感度アップ？」

「カラアゲ、この世界のどこに、魔術学校があるって言うちゃお…」

「ま、それはそれでともかくとして…」

少年は話題の方向を修正しつつ、

「相手のチャオって、誰？」

もったもな疑問をぶつけます。

「うーん。」

悩むカラアゲ。

「ロッカクの校内のチャオ間での評価はどんなちゃお？」

「実は校内でコドモチャオはロッカクぐらいなものだから、これといって親しくしている様子もないし。」

「少年の奇行に付き合っているだけで、精一杯ってとこちゃおね。」

「なるほどー、よくわかたちゃお。」

「僕の個人的な知り合いはいるけど、違うだろうしなあ。」

「うーん、こっちはシロちゃおか…」

悩むカラアゲに、ロッカクが囁^{ささや}きます。

「ちょっとちょっと、もっと『ロッカクに気がありそうなチャオがいるんじゃないちゃおか?』とかいう質問はしないちゃおか!？」

「えー、それはないちゃおよ、ねえ。少年。」

「同感。ロッカクはねえ。」

「一人ぐらいいたって、罰は当たらないと思うちゃおけど…」

「ないない。」

「大体気になるチャオがいたら、ロッカク宛にも下駄箱レターが来ないとおかしいちゃお!」

「そ、それはそうちゃおね…」

カラアゲの指摘に、思わず納得してしまうロッカク。

「今考えるなら、相手の連れてくるであろうチャオを口説き落とす方法ちゃお!」

「なるほど! そのとおりかも!!」

「映画のクライマックスにこう言うちゃお。『たとえグラールまで飛ばされても、オマエのことは、わすれない。』」

「ぐらーる、ぐらーる…わかったちゃお! 試してみるちゃお!」

こうしてよくわからない予定が作られつつ、夜はふけていきます…

そして翌日、運命の土曜日。

少年とロッカクは元気に映画館へと出発していきました。二人を見送ったカラアゲは、一人準備を始めます。

どこからかごそごそと取り出したそれは、そう、映画の一人無料券。先日カジノボリス前でもらいました。おとといにカラアゲが「今度は映画を観に行けるちゃおか。」と言ったのは、これが理由だったのです。

「サスガのカラアゲ、チャオってメチャメチャ運がいいちゃお〜。」

無料券を見つめ、ニヤリと笑うカラアゲ。

「少年を映画に誘う物好きがどんなヤツか、この目におさめるてやるちゃお!」

少年とロッカクが映画館前に着いてきよろきよるとあたりを見回していると、ヒザカクン。背後から唐突にヒザカクンを受け、よろける少年。

「おはよー。」

振り向けば彼女がいました。

「さっきのヒザカクンは、何!？」

「あ、ちょっとやってみただけ。」

「はあ？」

彼女の言動は、少年の理解の範疇^{はんちゆう}を超えているようです。

彼女が見えたにもかかわらず、まだあたりを見回しているのがロッカク。

「お連れのチャオは、どこちやお〜？」

「連れのチャオって？」

頭上に疑問符の彼女に、少年が答えます。

「ペア券だったから、そっちもチャオを連れてくるのかと思ったんだ。」

「そのことか〜。」

そう言って彼女は自分の映画のチケットを取り出しました。

「ペア券だったから、誰かに一緒に来てくれるように頼もうかとも思ってたんだけど、おとといの夕方カジノボリス前を通りかかったときに、一人用のタダ券配ってたから、それ使うことにしたんだよね。」

その言葉に、激しくショックを受けるロッカク。

「そ、そんな…」

「あれ、どうかした？」

彼女の疑問に答える少年。

「実は昨日の夜、ロッカクが期待…」

と言いかけたそのとき、

「！！それは言っちゃダメちゃお！！」

ロッカクの妨害攻撃回し蹴り！

少年は蹴られた足を押さえつつ、文句を言います。

「ロッカク、おまえ、他人のことはぺらぺらしゃべったくせに…」

「あれはカラアゲにだったちゃお！ こんな公衆の面前でしゃべるのはルール違反ちゃお！」

こんな会話を、笑って聞いている彼女を指して、少年は続けます。

「公衆の面前というが、聞いているのは彼女ぐらいじゃないか。」

「いや！ ステーションスクエアのどこかに、地獄耳はきつといるちゃお！ 可能性を考慮しろちゃお！」

「ありもしない可能性を考慮してどうしろと。」

「なにお〜！！」

「…あ、そろそろ時間みたい。」

彼女の一言で、二人は我に返りました。

少年は、人差し指をロッカクに向けて、静かに言い放ちます。

「とりあえず、ここは休戦だ。」

「のぞむところちゃお！」

大きくうなずくロッカク。

こうして、二人と一匹は映画館に入っていきます。

そのはるか後ろの建物の影で、じっと様子を見ていたチャオがいました。

カラアゲです。忍び足で映画館に向かっていきます…

いったい、何を企んでいるのやら…

(truncated)

その4 チャオスペ2とパクリ疑惑

シアターが暗闇に包まれました。同時に、ざわめいていたあたりの物音も、すっと静まりかえります。

最初に、宣伝用の映像が数本。そして、いよいよ始まる、CHAO IN SPACE 2。

派手な音楽とともに、広大な銀河の映像が、スクリーンに映し出されます。編隊を組んだ宇宙船が、その前を通り過ぎると同時に、宇宙船の後ろから出ていた緑色の光線が交差し合い、描き出される某映画会社の名前。

しかしそれも一瞬でかき消され、曲調が弦音楽へと一変しました。

宇宙をバックに、立体文字がゆっくりとスクロールしていきます。

ふと、席に座っているロッカクの耳に、不思議なポリポリという音が聞こえてきました。それも、近くから。

驚いてあたりを見回してみますが、特に何も起こっていないようです。ポリポリの音も、もう聞こえません。

気のせいかと考え直し、ふと手元のポップコーンの入れ物を見たロッカク。狐に包まれた気分になりました。まだ少ししか食べていなかったはずのポップコーンが、なんと半分以下に減ってしまっています。

ロッカクは、右隣に座った少年の服を引っ張ります。

「ちょっとちょっと、ひょっとしてオマエ、ロッカクのポップコーン、黙って食べたちゃおか？」

「へ？ そんなわけないじゃないか。」

「じゃあどうして、ロッカクのポップコーン、こんなにちよっぴりになってる
ちゃお？？」

「彼女が食べたんじゃないの。」

と言って少年が指すのは、ロッカクの左隣。

「おいっ、なんでそうなるの。少年じゃあるまいし。」

映画を観ていたのを中断された彼女は不満げに返事を返し、と、言い終わって
首をひねりました。

「両側の二人が違うとなると、そんなことができるのは誰だろう？」

「怪しいのは、前後？」

「前後ちゃおか…」

ロッカクは後ろを煽り見ました。するとそこには、黒いマスクをかぶった、見
るからに怪しいチャオが！

ロッカクは少年と彼女にそれを伝えます。

「絶対に怪しいちゃお！ あいつが犯人ちゃお！」

「んー、黒マスクつけてたら逆に、物は食べにくいんじゃないのかなあ。」

少年の冷静な意見に対し、ロッカクは黄金カードを。

「いや、実はその黒マスクの口元に、白い塩らしきものが付着していたちゃお！
きっとポップコーンのものちゃお！」

そのときふと、ロッカクは自分のポップコーンの入れ物を見て、悲鳴を上げま
した。

「ぬおっ、ロッカクのポップコーンがあっ、全部、ない！ コンニャロー！！！」

「ちょ、なら映画が終わった後で話つけようよ。」

ロッカクは彼女の言うことも聞かず、座席をよじ登り始めました。驚く後ろの
黒マスク、あわてる彼女と少年。

ロッカクは黒マスクを取り押さえると、てっぺんのボンボンをつかんで思い切
り引っ張ります。

スポン！

中から現れたのは…

「オマエ、カラアゲ？」

「もっと食べなきゃダメ！特に少年！おまえ細すぎ！」
「くそ〜、カラアゲめ〜、ポップコーン絶対返せちゃお！」
「充分食べてるのでいらないから！細いのは遺伝だからあつ！！」
「ふっふっふ、ポップコーンはすでにチャオのおなかの中で、さっき飲んだオレ
ンジジュースと牛乳とトロピカルパラダイス状態ちゃお！」

先ほどからにぎやかなここは、映画館近くのファミリー・レストラン。映画を
観た後、彼女に連れてこられました。

ロッカクにまくし立てるカラアゲ。
「チャオがポップコーンを盗むために、どれほど苦労したと思っているちゃお
か？映画館に入るのもカラアゲ独自の技を使ったし、黒マスクもなかなか見つ
からなかったちゃおよ！？」

少年が話に乗ってきます。

「そういえばカラアゲどうやって映画館に入ったんだ？」
「そんなの簡単だったちゃお。実はチャオ、おとといカジノボリス前で、怪しい
オヤジに、タダ券もらってたちゃお！」

その台詞に、あれ、と反応する彼女。

「ん？それってこんな細い目をした人じゃなかった？」

彼女がこめかみを引っ張って、細い目を作ります。

「確かにそんな顔だったちゃおねえ。」

「じゃあそれ私がタダ券もらった人と同じ。」

「へえー。」

「でもなんでタダ券配ってたんだろ、今思えば不思議だよね。」

「うーん。」

ハテナになるカラアゲのボヨ。

「いずれその理由も小説化されるんじゃないちゃおか？」

「私には、そこまで期待できない…」

少年がにわかに、手をぼんと打ちました。

「期待といえばロッカクの…」

「！！」

とたんにロッカクが激しく咳き込みます。

「その話題は不可侵ちゃおお！」

ロッカクの反応を見て、ニヤリと笑うカラアゲ。

「そういえば、チャオのアドバイスは試したちゃおか？ 決め台詞『最初からクライマックスだぜ！』だったっけ？」

「ぜんぜん違うちゃお…」

「それってただのパクリ…」

少年のつぶやきに、カラアゲが反論します。

「パクリとはひどいちゃおね！ そんなこと言ったら、この小説なんて全部パクリ…」

「それを言っちゃ、おしまいだろ！」

「キャラとしての寿命が縮まない(truncated)

その5 彼女の真意と偶発の役割

「キャラとしての寿命が縮まないように、発言には気をつけたほうがいいちゃおよ、カラアゲ。」

ロッカクの言葉にかみつくカラアゲ。

「いや、チャオはあえてこの事実を問題としてとりあげたいちゃお！ ある意味これは、チャオたちがいつもパクリっぽい話題で話しているということも意味しているちゃお！」

「そんなこと言ったら、普通に話していたら、最近気に入った台詞とか、会話に取り入れるよなあ。」

「うーん、確かに影響されやすい節はあるかもしれないちゃおねえ。」

「ま、それはある意味ノリがいいってことでもある！ きっと大丈夫！」

「…それで片付けて本当にいいちゃおか少年？」

「少年はいいかもしれないちゃおが、チャオたちは、パクリ疑惑というスキャンダルに耐えられないちゃお！ ガラスのハートが粉々ちゃお！」

「カラアゲ…オマエまたパクってるような気がするちゃお…」

そのときでした。会話を聞いていた彼女が、ふっと笑顔を見せました。

「なんか、かわいい。」

「何が？」

「三人が。」

言われて、互いに見合う三人。

「実は今日呼んだのは、それについて相談があったからなんだ。」

彼女はそう言って、カラアゲとロッカクを見やります。

「つまりその、私今、チャオをパートナーにするか、悩んでるんだよね。周りのみんなは、チャオいいよって言って誘ってくれるけど、どうなの、実際？」

少年は首をひねります。

「それにしてもなんで僕ら？ 映画まで誘って。」

「それは半分ノリ。少年の反応面白いじゃない〜。」

言われて、複雑な表情になる少年。

「それに割と最近から、一ヶ月前ぐらいからチャオと暮らしてるんでしょ？ ほかの人は小さいころからチャオと暮らしてる人が多くて、その慣れの感覚の差というか、私が一番聞きたいのは、つまり初心者でもなんとかなるのかってとこのよね。」

渋い顔をして、少年が腕を組みます。

「少年—どうするちゃお—？」

「騒ぐことはない。」

カラアゲの声にも、少年は表情を変えません。

「僕らは偶然、この街で出会った。事情が重なり、三人で暮らすことになったが、意外なほどに、苦労はなかった。むしろ自分のほうがチャオに助けられているんじゃないかと思えるほどに。」

「少年、渋いちゃおー。どうしたちゃお？ どっか、怪我したちゃお？」

心配そうなロッカク。

カラアゲはうんうんとうなずいています。

「少年の苦労が減った分、チャオたちに苦労がかかっているということちゃおね。」

「ちょっと待て、僕はカラアゲに苦労をかけたことはないつもりなのだが。」

少年の反論に、ロッカクが鋭く一言を浴びせます。

「こないだ散々映画に行くだの行かないだの言って困らせたのは、誰だったちゃお〜！？」

ぎくりとする少年。そこにカラアゲも加わります。

「学校に行くとき、チャオをいつも置き去りにするのは〜！？」

「いや、カラアゲ、おまえいつも日中、近所のチャオと遊んでるんだろ？」

「問答無用！ オマエをこれから、世直しの連中のところへしょっぱいて行くちゃお！」

「ひ、ひえ〜。」

その様子を見ていた彼女が、笑います。

そして一言。

「決めた。チャオ、飼う。」

それを聞いたロッカクがあわてます。

「ほんとに？ 少年の言ったことを真に受けてないじゃおか？」

「大丈夫。いざとなったら、パートナーのチャオに頼るから。」

「う、うわ、少年の影響で彼女まで、悪い子になっちゃったじゃお〜。」

「ごめんね〜、でも少年もロッカクもカラアゲも、なんだか楽しそうじゃない。ちょっとぐらい困難があっても、二人で乗り越えられるような気もしてきた。」

数日後、彼女は学校にチャオと一緒に来ました。生まれたてのコドモチャオです。

おまけにもう一つ、いいことがありました。これにより、今まであまり話し相手のいなかったロッカクに、一人の友ができたのです。

「な、ロッカク？ 僕はおまえたちに多少の迷惑はかけたかもしれないが、ロッカクに友達を与えるという大事な役割も果たしていたんだ。これでもう、文句はつけられないだろ？」

「本当にそこまで考えていたかどうか、疑問じゃおね。」

おしまい。

純粹ノ悪魔

ろっど

ろっどさんといえばファンタジーやSFを貴重とした作品が持ち味の作家。純粹ノ悪魔は、そんなろっどさんの作品群の中でも、最も端的にまとまったファンタジーです。
読み切りということで、忙しいぐらいに場面や設定が眼前を過ぎ去っていくのですが、それでもテンポよく読めてしまうのが不思議ですね。

0 始動

時にして「今、より二百年もの前——

世は未だ、悪魔と人々が住み着く平和無き戦乱——

始まりを謡^{うた}ったのは、一部の悪魔による「荒天」だった。

乱れに乱れた世を「力」によって制圧した。

しかし、無論の事、悪魔の目的は、世を制圧する事では無い。

人間界からの莫大なエネルギーを経て、「天界」を支配する事だった。

いわく、「荒天」。

それに気付いた「天界」の悪魔らは、人間に手を貸す事によって、——いや、人間の味方につき、自らを盾として立ち塞がるのは、無理であった。

なぜなら、悪魔はこの世に存在出来ない。

人間という個体を完全に支配するしか、手立ては無いと思われていたからだ。
だが、状況を打破すべく、一人の人間が名案を企てた。

人間と「共生」する。

銃火器、原子爆弾、水爆、様々な兵器を持ちうる中で、
人間と「共生」する——いわば、魂に纏^{まと}う盟約を行った。

その、始まりの「荒天」と、「共生」による「盟約」から、早三十年。

未だに戦乱は治まっていない。

——が。

悪魔に支配されつつある世を、己が身に宿る信念と、その強き眼光によって、救うべく。

全くもって無名であつた、たった一人の、少年が。

——立ち上がった。

以前まで、精神的に死んでいた彼が。

二度と起き上がれない程に痛めつけられる境遇を経た彼が。

遙か東方の島国にて、

時は蠱^{うごめ}きを見せる。

後に「完全なる天成」と異名される英雄が、`聖誕、した。

太陽暦、西暦の始めであるとされた聖者の生まれる誕生日に…。

1 聖誕

「なあ、一つ、訊かせてくれ。」

漆黒と言うには明るすぎる、純白と言うにも暗すぎる。

中途半端な少年が声をかけた。

「何で世界はこうも——思い通りにならないんだ？」

「知るかよ。」

偉く真面目ぶった友人の態度に、わざとつっけんどんに返す男は、少年と一緒に笑った。

「日高、冗談言うんだったら、もっと笑って言えよ。」

「悪い。」

少年は——日高 立。小学校三年生以内に習ったその漢字の読み仮名は、ひだかりゅう。

幼き頃から家族に不平不満を持ちいる少年であった。

「ところで、谷本——」

「ん？」

「——悪魔とかいうの、最近ニュースでよくやってるよな。」

たにもと ひろあき
谷本 博明なる同級生は、不信そうに頷いた。

「また出たらしいなあ…こっちに来ないと良いけど。」

「来たら来たで、どうにかなる…と思うね。」

「確かに。」

「(そうだな…さっさと出て来て欲しい、こんな世の中だし。)」

密かに思う、日高の胸内を放って置いて、恐怖にすくむ話題を変えようと、谷本は、

「今日の授業なんだっけ？」

と、気楽に話しかける。
 そんな、いつも通りの日常に、不安の陰も差す事が無い。
 だが、日高はその「不安の陰」を求めている。

「(もう生きてるのは嫌だな。)」

とある事情から、そう思ってしまう少年だった。
 少年に科せられた、生後の肩書きとも言える名目は、「不幸」。
 そう、何をやっても上手く行かないのだ。

努力は惜しまない。性格は明るく、一度決めたらやり通す。
 常に冷静な判断を持ち合わせ、しかしその実力を面には出さない。
 少しばかり「言い回しがくどい」といった面もあるが、比較的友好的な少年である。
 しかし、上手く行かない。

「不幸」の名目。肩書き。
 それを親に話したら、「生活難で困っている人々は」だの、とか言われてしまった。
 少年の考え方は全く違うのである。

「(いくら生活が並だって、それが幸せだと思えなければ意味無いね。)」

価値観の相違——それが、幸不幸の最大の「分岐点」だと言うのだ。

つい先日だって、悪意があってやった訳では無いのに、少女は必ず自分のせいにする——
 今までずっと頑張ってきたのに、他の人にばかり優しくする——

といったつまらない「嫉妬^{とつと}」を抱えつつも、そんな自分が嫌になりつつも、
 この“激痛^{とつと}”は止まってくれない。
 誰でも良いからどうかして欲しいほどの痛み。でも、どうにもならない現実。

「(どうなってんだよ、この世界は——)」

「おーい、日高？」

「んあ？——悪い！」

つつい、考え事をしてしまう、日高 立。彼は、そんな少年だった。

趣味を訊かれると、必ず答える言葉は「特に無し」。

夕焼けの空を見上げて、物音一つしない街路のど真ん中、いつもの帰り道という日常を謳歌するのが大好きな少年である。

家に帰れば、また地獄が待っている。嫌になる。

かといって、他に帰る所は無い。という訳で、部屋に籠る。

そんな彼が、たった今、一番好きなゲームは、

「(ああ——さっさと帰って“チャオ”を育てたい——)」

任天堂のゲームの、ソニックチーム作成、ゲームキューブのソフトの、——言うまでも無いだろうと思う。

ソニックアドベンチャー^{うんぬん}云々、それらのシリーズだ。

この少年が、今の精神状態でなぜ、このようなゲームのジャンルに惚れこんだかと言うと…。

日高 立。彼は不幸の身の内に、不平不満を隠蔽し、明るく過ごそうと努めている。

ゆえに、人を信頼する、といった感情に劣っていた。

しかしながら、“チャオ”なる純粋な生物は、純粋さ所以の「可愛らしさ」がある。

そう、“チャオ”は素直で、これが“チャオ”そのもののなのだ。

着飾ったり、あるいは自分を強く見せようとする人間たち…とは、全く正反対。

純粋なる存在。であるからの“チャオ”。

「(悪魔の方が、よっぽど理解出来る行動を取ってるよな——)」

そんな、少年だった。

「…で、今日の授業何だっけ？」

いつもの日高の姿に安堵しつつ、谷本は呆れ顔^{あき}で再度、訊ねた。
覆される事の無い「日常」——二度と取り戻せない「過去」——
今が一番幸せだという事を実感するに関しては、谷本 博明の方が上手であった。

時、進みて日常の白昼。
少女は友人との会話を楽しみつつも、何か「欠けたモノ」を感じていた。
給食といった、昼食を摂りながら。

「(何か…違和感がある…。)」
「深雪？ 深雪ー？」
「へ？ えっと、何？」

普段なら、“超、を付けても良いほどの友好。
友の事を一に考え、「差別・偏見」といったものの見方を全くしない少女。
幸山 深雪。さちやま”の、みゆき、といった古風な苗字の少女。

「どうしたの？ 今日の深雪…どこか変だよ？」
「ううん、何でも無い。」
「そお？ 変だよねえ？」

^{だんらん}団欒の輪を創る友にも話しかけ、訊ねる。幸山の無二の親友とも言える彼女は、

「明日香…深雪にもローになる時があんのよ。そっとしといてあげなさいって。」
「でも…しいちゃん…！」
「良いと思う。深雪は深雪。性格が変わった訳じゃない。」

^ま瀬 明日香。密かに——ではなく、あからさまに「彼」へ思い馳せる少女である。
良い意味でも「差別」をしない、いわば人と人との区別という境を付けない幸山が、唯一、友人以上を認めた「四人組」、後の二人は、

「さすが、しいちゃんは凄いねえ。」

「別に…思った事を言っただけ。」

“人を褒める、技能に優れた、^{くらかわ}倉川 ^{よし み}義美と、

“正論で民を動かす、^{きよ み はら}清見原 ^{なぎさ}汀である。

「しいちゃん」といった愛称は、

「…『シイ』？」

と、黒板に白墨で、大きくド派手に書いた「汀」を、真瀬が読み違えた事から付けられた。

「(何だろ…何か変…。)」

そう思う幸山の脳裏に、一人の少年の後姿が過ぎる。

はっと振り返ってみると、給食をいかにも楽しそうに笑ってる彼の姿があった。

が、

目が合いそうになって、素早く逸らす。

そう、最近になって、ようやく彼を意識し始めた幸山は、つい…最近。

彼に“酷い仕打ち、をしたばかりだったのだ。

いつも偉そうに、自分に勉強を教えてくれた少年——

本当はとても優しいのに、その優しさを欠片も見せない少年——

傷付き、立ち直れそうに無い自分を、一生懸命の「誠意」で、支えてくれた少年——

その彼の行動原理は、「愛情」だったのだ。

しかし、自分にはそういう気持ちが無いと、相手への侮辱とも取れる言葉を伝えた。

「(もしかして……。)」

その彼はと言うと、幸山の哀しそうな表情を見て、スプーンを取り落としてしまっていた。

「何やってんだよー。」

「らしくないなあ、日高。」

落ちたスプーンを拾って、溜息をつくのは、日高 立なる少年であった。

「あはは…。」

苦笑いを浮かべながら、ちらりと横目で彼女を見る。

やはり哀しそうな表情をしていた。

と、

そんな「何でも無い日常」の最中、

過去と現在の“切断”が、

荒々しく、その姿を見せる――

「何だあ?!」

一瞬にして、校内は燃えていた。

警報が鳴っている。地鳴りが凄い。外には黒煙が舞っている。

“悪魔”――その惨状だった。

「――器のデカイ人間は、どいつかあ？」

人間とさほどの変わりも無い、まるで魔法使いのような服を身に付ける青年は、一目でそれと分かった。なぜなら、

「(こいつ…手から…炎を出した…?)」

あり得ない。ゆえに“悪魔”。

“悪魔”は人間を支配し、この世に繰る。

人間の中核、核とも言える“自我”を崩壊させ、君臨する。

ゆえに“悪魔”、その出現。

「…ッ…繰り返す！ 避難せよ！ 第十三地区にて、“炎”の悪魔が召喚された！」

「決めたぜ…その女あ！」

右の人差し指で、差した先にいる少女――

そして、それを見て愕然とした少年――

足がすくんで逃げる間も無い生徒たちを背景に、それは跳んだ。

「もらった！」

「！！」

刹那、

自らに何かが起こるのを感じた。

悲しみは怒りへ、怒りは行動へ、意志は力へ、絶望は恐怖をかき消した。

その少年は、立ちすくむ生徒たちの中、ただ一人、動いていた。

“悪魔”の、炎の大剣を、己が身で防いで。

「な…らあ！」

怒れ狂う“悪魔”は、その炎によって現す大剣に、力を注ぐ。

その人間にはあり得ない力で、少年は宙を舞った。

「うあっ…！」

「ひ、日高！」

谷本が叫びを上げる。

偉そうに勉強を教えていた少年は、窓ガラスを突き破って、校庭へと真っ逆さまに落ちて行く。

「決定だ！ 全て全て全て全てえ！ 俺の“炎”で炙^{あぶ}ってやるぜえ！」

最初に標的とされた少女——幸山 深雪は、

自分の傷付けた少年が落ちて行くのを知って、しかし、どうする事も出来なかった。

悲しみという感情を、残していても。

ところが。

制服を乱した少年が、帰って来た。

後ろから、“悪魔”に跳び蹴りをかまして。

壁に激突した“悪魔”の表情は、すでに憤怒の形相だった。

「ぐう…ふざけるなよ、“人間”…！」

「(…ははは…足が震えてるよ…どうするって言っても、…)」

——させたくないといった感情が、形になる。

何も特別な力を持っていないはずの少年が、

“悪魔”から放たれた閃光を、

両手で「受け止め」た。

「んなあっ！？」

本人としては、

「(…うわ、危ね！…?)」

といった具合だったのだが、それでも、両手の前に、紅い炎は揺らいでいる。

人間は、特別な力と、悪魔に対抗出来るという意志、強靱なる心が無ければ、
“悪魔”と対峙すら出来ない。
だが、逆に、

「対抗する」意志と強靱な心、果てしない感情を持ち合わせていれば、条件は達
せる。
そう、特別な力。

“我が名を呼べ。誓約せよ、力欲しき者。戦いのみに身を殉じろ”

驚愕する“悪魔”を目前にして、

“我が名は”

日高 立は、立ち上がる。

“アルシエル”

自らの、意志で。
黒に染まりし太陽を、分かち為に。

「アルシエル！」

爆発が、沸き起こった—————...

2 復讐

鋼鉄の鎧を纏った、自称「正義の執行長」は、ただひたすらに走る。
 長らく人の世から離れていた自分を、一人の友人として扱ってくれた、お返しとして。

「おらおらあ！ 邪魔だァ！」

「正義の執行長」は、ただひたすらに、友人の前に立ちはだかる敵を、^な難^{たお}ぎ倒していた。

「ふう——^{てっは}“鉄羽”も好い加減にして欲しいですね。あれでは——」
 「それでも無いのではないか？」

一見して「チャオ」と分かる外見をしているのは、崖の上に立つ、少年。
 姿無き声の主、「チャオ」である少年…ジェネティ・ディペロッフの盟約主は、

「壮観だ。多数の悪魔相手をするならば、あれほどの逸材はいまい。」
 「ですが…。冷静さが欠けていますね。」
 「ジェネティ、それは贅沢というものじゃよ。^{おとり}“鳳”よりは、幾分——」

続けようとした言葉を、ジェネティが受け取り、口にした。

「マシですね。」

英雄の“聖誕、より、早き事、二年。
 後に『完全なる天成』と呼ばれる少年は、その頭脳^{こうかつ}の冴えを利用し、狡猾な手段を得——

“復讐、の為に、思うが^{まま}尽、大いなる力を振るっていた。
 他でも無い、誠意と愛情を、更なる誠意と愛情で返してくれた、彼女の為に。
 彼女が“復讐、を望んでいなくとも。

その内面を秘め、『完全なる天成』、通称“鳳”は、九つの仲間と共に、「悪魔の軍勢」を占めにかかっていた。

「んん？ 何だお前？」

鋼鉄の弾丸を目前として、尚、敢然と立ち塞がるのは、「悪魔の軍勢」、「剣士」。

「予は“ガルマ”の担い手なり。鋼の意志を持ち得る騎士よ。予と刃を交える覚悟があるならば、腰に帯びる大剣、抜くべし。」

好感を得る青年の姿をしたそれは、中に悪魔の魂を秘めた、人間である。
——悪魔は人間を乗っ取り、地上で手にした力を行使して、天界までもを乗っ取ろうとしているのであった。
それゆえ、天界の“魔化”を恐れた他の悪魔らは、人間と共生し、盟約と呼ばれる儀式を経て、悪魔らと対峙する。

その、中枢。「悪魔の軍勢」を治める、五つの冰山。全称、「五帝」。
青年の姿をする悪魔、“ガルマ”の担い手、ソルジャーに対し、「正義の執行長」は。
断言する。

「良いだろ。お前の心意気い！ 確かに受け取った！！」

無駄に、大きな声で、叫ぶ。

「俺の名前は^{やつがたけ}八ヶ岳 ^{そういち}宗一！ 翼が誇る“鉄羽”！…しかと見届けて、もらう。」
「良かろう。さあ、抜け。“真なる鼓動よ、目覚め、時と共に歩むべし、——」

両者共に、身の丈の倍ほどのある大剣を、軽々と構えた。
戦闘開始。空に浮かぶ雲の渦が、まさに今、開始の合図と嘆いた。

「ジェネティ、こんな所にいたのかね。」

行動を一にする、ジェネティ・ディベロッフの友人の一人——
中老に差し掛かる年老いの割合、表情は若く見える男性は、おっとりとした口調で告げる。

「“^{せんげ}千羽” とも異論は無いよう。早急なる行動を、“朱雀”。」

「了解しました。それでは、僕たちも散りましょうか。」

ふと、崖の上からの風景を見る。そこには、街、大自然、全てを見下ろせる光景が、絶え間なく広がっていた。

「…多少、名残惜しいですね。」

「心配あるまい。どちらにせよ、君が“王”なのじゃろう？」

ジェネティとしか名を持たない「チャオ」が、盟約主であるディベロッフに、確認された。

無論、ジェネティは頷く。彼は、指導力と戦略、頭脳戦に関しては負け無しの、参謀なのだ。

“鉄羽”、八ヶ岳 宗一を第一線に送り込んだのも、戦略。

「“鳳” …そして、“^{おおとり}鳳” …。彼らに、永久の幸福がありますように。」

最後にそう言って、その場を後にした。

「“おおとり” は？ まだなの？」

からかい言葉で話す彼女は、“おおとり” と呼称される少年を想う一人。

死に行く間に、自らの全てを表明した“鳳” の、無二の親友。

真瀬 明日香であった。

「まだ…らしいですな。」

彼女の盟約主、セーレが、短くも的確な言葉で表した。彼女の言葉を本気に取り替えているのだ。

実際、少年が定刻通りに来た事など無い。いつも決まっている事だ。

彼女もまた、“鳳”、『完全なる天成』九つの仲間の一角。
“熾天使”である。

「お？ おお？ 来たよー！」

通称するまでも無く、誰が言い始めるでも無く、中心人物にて最強。
華麗なる翼の主。氷の力を操る、“神格”。
日高 立。空を飛んで、やって来た。

「遅れた。」

「もお、大事な勝負時なんだからねっ。」

「む？ 立よ。定刻通りのはずでは？」

日高の盟約主、アルシエルが、確める。「彼女」は何かある毎に、彼をたしなめるのである。
もちろん、寝坊したなどと言ったら、説教ものだ。だから、彼はごまかした。

「それより！ 空中要塞に！ 突撃敢行だ！ 飛翔出来るな？」
「まっかせといて。」

真瀬にとっては、最早“二人の世界”であった。アルシエルもセーレも置いてけぼりなのだ。
だから、先日のとある事件の結末を先急ぐ為に、彼女は念を押す。

「飛ぶぞ！」
「——全部終わったら、返事、もらうからね。」

飛翔が揺らいだ。“熾天使”はにやりと、勝利の微笑みをもらった。

それは大陸の如く端然に。戦艦の如く隔絶に。
空中に都市を築き上げた。

名付けた名は、空中要塞、『ルシファウンド』——^{だてんし}墮天使の名である。
元より、「悪魔の軍勢」を束ねる人間の盟約主の名でもある。

そう、人間——なのだ。

「…ルシファー。本当に“フェニックス”は滅んだんだな？」

「はい。間違いありません、閣下。」

「惡魔の軍勢」より、「閣下」と呼ばれる人間——

惡魔の力に支配されず、逆に怨念と逆襲の念で支配した人間——
実名、ミカエル＝サラウンド。

頭脳明晰にして成績優秀。性格は他に尽くし、友好的である明るい性格。

そう、日高 立と、瓜二つの性格。

だが、彼もまた、絶望の淵にあった。かつての日高と同じように。

「僕らの“荒天”も時が、刻一刻、迫っている。」

「はい。その為の準備も、全く万全です。」

「そして必ず、この世界を創り出した万物の創造神、そして、僕を見捨てた奴らへ——」

「はい。復讐を。」

実は、天界にての階位がある。

創造神。『万物を創りし』と言うように、^{ことわり}理を生み出した者。人間の偶像的な言語で、

神。

それが、頂点に立つ、天界の王である。

次に、『三つ^{どもえ}巴の』と形容される、三つの支配下。側近。

墮天使ルシファー、神鳥フェニックス、地獄のアバドン。

地底、深く、深くに住む、天界の罪人を裁く“地獄”、その最下層。

そこを司るのが、アバドンである。

法廷「ゲヘナ」——そこを通らなければ、罪人は罪を払えない。

しかし、墮天使ルシファーは、アバドンを取り込み、罪状を消し飛ばした。

取り込まれたアバドンは、ルシファーの体内にいる。

一人だけの、娘を残して。

その名はアルシエル。彼女も、父を殺めたルシファーに、“復讐”するべく、降りてきた。

日高の元へ。

神鳥フェニックスは、理を捻じ伏せる者はいかなる場合に於いても裁くべき、といった堅物なのである。

よって、“降臨”に時間はかからず、降りてきた「場所」――

他でも無い、幸山 深雪であった。

恐れたルシファーはこれを治め、フェニックスをモハーの断崖まで追い詰め、これを討つ。

全ては回り、今に至る。

「失敗は、あり得ない。」

「はい。」

「さてさて、僕の宿敵の様子を拝むとしよう、ルシファー。」

空中要塞に、爆音が轟^{とどろ}いた。

「ふう…大分疲れてきたなあ。」

「我を前にして如何ほどの力量、とくと見受けたし。さながらも動じぬ真なる心、この“ガルマ”が打ち砕こう。いざ、“八剣”！」

八つの刃が空中に輝き、その閃光で空を裂く。

「剣士」最強最大の力、一点集中一撃必殺の剣技。

それが今、解き放たれようとしていた。

「よりによって八かよ。俺の苗字と被るンだよなァ。」

「退くならば端から来ずとも良からう。しかし、訊こう。なぜ戦う？」

大剣を軽々と振り回し、最強最大の剣技に対抗するべく、鋼鉄の鎧を外す。

簡単な服装となった八ヶ岳は、大剣を上を高々と持ち上げた。

「俺はこの先に、行かなくちゃならねえ。」

「なにゆえか。」

「惨めな俺を突き放し、それでも裏切らなかったアイツへの、俺が出来る全てだ。」

「…信念に於いて、ここに立つ——我が戦った内でも、最も強き力を誇り、我を打ち破った者の言葉に、騎士よ、そなたは背かず、立ち向かうと言うか？」

微笑ではない、苦笑ですらない、偽りの交じらない笑みを浮かべ、八ヶ岳は大剣を下ろす。

そして、叫んだ。

「ったりめーだァ！！」

その声は、彼の思惑通り、少年の心に、届いていた——

「うし。到着だな。」

「ここより先は敵地。油断は禁物にて禁物。立、無茶はするでないぞ。」

アルシエルにたしなめられて、仏頂面を瞬時、見せる日高であったが、数秒と経たない内に気を取り直し、隣の“熾天使”に声をかける。

「みんな、頑張ってくれてるからな。ここからは飛ばすぜ。」

「それでも付いて行ってく、あたし、言ったでしょ。」

「——…立さま…。あなたの心の赦す^{ゆる}限りで良いのです。どうか、どうかルシファーをお許し下さい。」

セーレが懇願するように、言った。彼女は日高の事を「さま」付けで呼ぶのだ。そう、彼女はルシファーの娘にして、天界最大の“治療師”であった。それに基づき、誰よりも人の心に敏感な真瀬を、選んだのである。

「ああ。分かってる。」

日高も、そんな彼女の心を理解してか、肯定した。

「問題は、あいつが反抗して——」

「——召喚した時、だな。」

古風な口調で喋る、アルシエルが、結論を先急がせるべく、口早に済ませる。

「よし。行こう。」

「立さま。くれぐれもお気を付けて。お怪我、なさらぬよう。」

「本当の本当に気を付けてね。」

「ああ、もちろんだ。」

振り向かず、前だけを見て。

自分の道を進む。自分だけしか進ませない。

だから、彼は仲間の声を心の内に聞き、それを受け止め、^{つぶや}呟くように言った。

「俺は、必ず戻るよ。」

3 乱戦

右向きにかわした「魔法」を、緑の弾丸と認識する間も無く、次の一手を考慮する。

二対一という絶対的に不利の立場、はっきり言えば勝利するのは無謀とさえ言えた。

だがしかし、彼女には絶対に譲れない箇所がある。

他でも無く、日高 立、彼が信頼してくれたという事実。

それだけで、絶対になるのだ。

「はあっ！」

セーレの“治癒の風”の流れに汲み、「僧侶」の治癒法を分析する。

その分析こそが、勝利の一手に繋がるから、であった。

もっとも、セーレは戦上手な方では無い。

“治癒師”の言われの通り、治癒し、回復を主とする悪魔——いや、精霊であるのだ。

ところが、打って変わって、真瀬は、これを転用。

あつという間に「戦闘用」にしてしまった。

その名の通り、“熾天使”…セラフィムという片手剣を創り出し、治癒の力の流れ、治癒の三段階解析のうち、分析、把握、治癒の治癒で止める。

これぞまさに、“治癒師”最大の戦闘法である。

敵は、「僧侶」が回復に回り、「魔導師」が攻撃に転じる。

つまり、「僧侶」が討たれれば、「魔導師」は動じる。

「あ、相手はどうやら…あまり有効な攻撃手段は持っていないようです…。」

「余裕だな。だが、余裕過ぎる。何かが引っかかる。」

「(術中にはまってきてるかな?)」

元より、頭脳の明晰な方では無いはずの真瀬も、かなり冴えていた。

この手が破られれば、この手で防ぎ、またこの手を打ち——

将棋の試合、それを見ているようだ。

「魔導師」は、短気な性格がゆえして、決戦してしまおう、と、力を振り絞る。
これが、術中。

「(よし。)」

「アクエリアス！」

水の大魔法を、その手から唱え、放つ。と、間も無く雨…否。
津波が周囲から、迫って来た。
しかし、予測通り。この程度ならば。

「(アクエリアスの次は、グラフィアスの呪文が来ます！)」

分析の主、セーレが忠告すると、礼を言っている暇も無く、手を打つ。
まず、治癒法の開始。津波の水は、「魔法」の流れを汲む。
だから、治癒の流れに巻き込み、静止させ、吹き飛ばす。

「追撃のお——！」

「と、止まった…？」

「「グラフィアス！」」

「両者」一斉に叫ぶと、剣戟けんげきのような衝撃波が、幾つにも連なり、飛翔する。
アクエリアスの津波に守られた真瀬は、津波を消し去ってくれた「魔導師」に、
感謝の念を込めて、ウインクした。

「ちっ」

「ひあっ！？」

衝撃波が、「僧侶」の目前で広がる。これには、「魔導師」も驚愕する。
そして——衝撃波が「僧侶」を包み込み、文字通り「消した」。
分析、把握、治癒、ではなく、治癒を逆流させ、力を吸収し、弾けさせたのだ。

「「僧侶」は討った！次はあなたよ、「魔導師」！」

「よくも…図に乗るな！！」

怒れ狂った「魔導師」が、戦略多の真瀬に取り込まれるのに、さほどの時間はかからず、
戦闘終了。まさに、八ヶ岳と同時の時刻に。

「我が、〃八剣〃を、見事だ……。」

「ういー……。」

大剣を重たそうに、地面に突き立て、滅び行く「剣士」を前にしてから、ふと。
溜息をつく。

「問題は、こっからだよなあ。まったく、じじいめ。もっとマシなところに創れっての。」

独り言を呟く程に、八ヶ岳は高揚していた。

そう、勝ったのだ。「悪魔の軍勢」、「五帝」の一角、「剣士」に。

彼がした事と言えば、単純明快。

〃八剣〃を通り越したただけだった。

一点集中を糧とする〃八剣〃は、それが当たらなければ意味が無い。

もちろん、彼は間一髪、避けられた、といった具合だった。

「しかしまあ…あいつら、しっかりやってくれてんだろうなあ？」

二つの翼が、この地へ向かう事を知っている彼は、

心にも無い疑いを、口にした。

「ルシファー。」

「はい。五帝はどうやら、全滅のようです。」

城、その頂点の極まりに座を置くミカエルは、部下の不意に不意を重ねた所業に、腹を立てていた。

「剣士」は、“鉄羽”八ヶ岳 宗一に。

「魔導師」と「僧侶」は、真瀬 明日香に。

そして、「龍騎士」と「武道家」は…。

“左翼”カーレッジ＝ビリーと、“右翼”双葉 水成に、討たれた。

盟約主、フェニックスを宿す“凰”に、忠実なる「悪魔の軍勢」幹部は、討たれた。

最早、打つ手は一つ。

「…僕が出る。」

「はい。その方が良いでしょう。」

「温存して置きたかったが…仕方無いな。」

王座の椅子、その一言で形容が済んでしまう、そんな椅子から、ミカエルはやつとの事で、重い腰を上げた。

かなり荒れている人間が、こちらへと向かって来る。

地団駄を踏んでいるように、やかましく音を立てて。

それは、城内の頂から、やはりやかましくやって来た。

「「悪魔の軍勢」…「勇者」ミカエル＝サラウンドォ！」

「墮天使ルシファー！ お前の悪行もこれまでだ！」

強烈な微笑と共に、それは、やかましくやって来た。

「そういえば、ここからどうすれば良いのか、聞いてなかったね。」

「ですが、じっとしている訳にも行きませんし…ああっ！」

「え？ なになに？」

空中要塞「ルシファウンド」、その中央部庭園の噴水に腰掛けていた真瀬は、仲間の計画が順々に進んでいるのを、知った。

なぜならば、聞こえたからだ。

世界を一つに束ねる声が。流麗な音程となって。

「…計画、進んでるらしいね。」

「そのようです。だとしたらば？」

「決戦の地、へ、いざっ！」

洒落込んだ口調で叫んだ後に、空中要塞を、真瀬は後にした。

剣戟が唸りを上げる。悪魔の叫びが茫然と響く。

片や、怨念を心に抱き、自らの弱さを知らず、永久に復讐を唱えて来た者。

片や、そんな自分から脱し、強く立ち上がり、己の信ずる為に唱える者。

正負の対決、氷と雷が今、激突を始めていた。

——風が呼ぶ 私をこの地に——

地獄のアバドン、その娘たるアルシエルの司る能力は、氷。

自在に氷を生み出し、集め、弾けさせる。

対に、「三つ巴」一角、墮天使ルシファーの司る能力は雷。

大気の摩擦、それゆえに稲妻を多々、華麗に操る。

氷は、大抵の場合、攻撃には向かず、雷はルシファー独自の天才的能力によって生み出される、絶対的な破壊力を持った力であった。

「何の為に動く？ 何の為に立てつく？ この世は詰まらぬ事だらけだ。滅ぼしても、理を捻じ曲げようとも、問題は無い。」

最初の居場所から一歩も動かず、その万力を振るうミカエルは、ひたすらに問い詰めていた。

何故、と。

「お前も知っているはずだ。この世は理不尽すぎ、どうしようも無い事だらけだという事を。」

一方、防戦を余儀無くされた日高の方は、答えている隙も無い。

もちろん、相手も答えを要求している訳では無いようなので、答えるつもりも無かった。

が、それでも、その考え方には、どこか懐かしい響きを帯びている。

「努力は無に帰し、想いは灰と化す。純粹たる者は、もう、どこにもいない。」

その言葉の断片から、今まで味わって来た苦しさ——哀しさ——負の感情、全てが捉えられた。

ゆえに、日高は共感出来たのである。自分と同じ境遇を味わって来た者として。だが、決定的に、両者は違っていた。

「だから、理不尽を理不尽で覆す。僕の——」

「違ってる！」

大声を上げた日高の目には、今やもう、この世を恨む欠片も見られなかった。ただ一つ。倒すべき相手を、見据えている。

——美しき世界は もはや失われ——

「…。」

「ああ。そうだよ。お前の言ってる事はもっともだよ。」

次々と繰る稲妻を、氷の盾で防ぎは防ぎ、更に防ぐ。

止む事の無い電撃が、その音から、どれだけの威力を秘めているのかを感じ、尚恐れない。

「でもな！！」

一遍に迫り来た稲妻を、周囲一帯を全面凍結し、耐え忍ぶ。

「力で支配するなんて考えは、馬鹿げてる。」

静けさが戻った城内の頂に、声が響いた。

怒れるミカエルが、更に怒りを増して、言う。

「馬鹿げてる？ そうでもしなければ、何も変わらないだろう！」

その怒りが、雷となって、現実を現す。

「教えてやろう！ 純粹たる生物、その象徴が“悪魔、だ！ かの“悪魔、らの姿は、純粹さ所以に、混沌の文字を取った言葉で連ねられている！」

日高には何を言っているのか、分かったような気がした。
なぜならば、彼もそう言っていたから。

——たった今 在るのは 確かな悲しみだけ——

「シー・エイチ・エー・オー！ 組まれる単語は“チャオ、だ！ この意味が分かるか！」

稲妻は一層深みを増したかの如く、荒れ狂う。
それら全てをかわし、または凍らせ、または防ぐ。

「人間なんか、この世から消し去った方が、全体の辛さは消える！ “死、の救済だ！ そして純粹たる“悪魔、が、世界を支配する！」

アルシエルも、日高との長きに渡る付き合いから、感じ取った。
自ら見てきた辛い過去を、その惨状を、象徴していて、現しているモノ——
“現実空間、及び「世界」を滅ぼす事によって、己の思うが儘の世界を創り出そうとしている。

「それが、僕が今まで味わって来た全てに対する、等しき対価だ。」

「やっぱり、違ってるな。シエル。」

続きを受け継がれたアルシエルは、ふっと鼻で（無いが）笑って、こう言った。

「残念だが、ルシファー。そしてミカエル——」

——だけど 振り向かなくても 分かる——

「——「不幸」など、この世には存在しないのだ。」

そう、己が禁じていた単語を、堂々と、アルシエルは言っただけ。
地獄のアバドン、たった一人の父であるアバドンを亡くした、「不幸」なはずの

アルシエル。

その本人が、自らの境遇を否定した、いや…。

境遇の捉え方を、否定した。

「良いか？ よく聞けよ。「不幸」かどうかは、自分で決める事だ。そうだろう？」

「だが、一人間が足掻^{あが}いたところで、「不幸」の現状は覆せん。」

「だから、覆すのはそっちじゃない。」

そして、一言が、ミカエルを貫く。

「自分を覆すんだよ。意志でな。」

——そこには やっぱり あなたがいた——

4 —

拡音の力で世界中に届く調べ——
見事な音楽が、世界中に響く——

全てを終わらせる為の力へと、換わってゆく。

「自分——？」

衝撃を受けたのは、見るまでも無く分かった。
声には怒れ狂っていた時の破片はわずかも無く、心ここに在らずの面持ちであった。

「そっちを変えれば、自ずと変わって来るであろう。」

「「不幸」の現実も、な……。」

「……………」

顔をうつむかせて、考え込んでいる様子のミカエルに、微笑を浮かべる日高と、意識体の中だけで、自分の盟約した、あれほど崩れていた少年が、たった今、誰よりも強い相手に対峙している事を、誇らしく思うアルシエルに、声が届く。

「そう、か……。間違って、いたのか……。」

顔を上げ——かかった、その時。
稲妻が轟き、危うく日高は貫かれるところだった。

「！」

「だが、もう遅い。」

浮かべてあった表情は、完全な笑み。
墮天使ルシファー、ミカエル＝サラウンド、支配の証であった——

「おいおい。本当に来るのか？」

若い青年が、不審げも無く、訊くだけ訊いた。

“右翼” 双葉 水成とは、彼の事である。

途方も無い、地平線すら見える、大草原。そこに、集まっていた。

「来るだろうよ。あいつの事だ。」

“左翼” カーレッジ＝ビリーが、返答する。

次いで、“鉄羽” ハケ岳 宗一は、

「しかしまあ、あんなでけえ神殿にあったのが、これ一つなんてなあ。」

「これ一つで充分ですね。偉大なる名を響かせる鍛冶師が創りし、伝説の一品——」

「音を奏でる為だけに生まれた者じゃしの。」

ジェネティが続けようとした言葉とは全く違う言葉を、盟約主のディベロッフが取って付けたように言った。

“朱雀”の異名を持つ、“チャオ”である。

「でもさ、決戦の土地としては——殺風景じゃない？」

“千羽” …少なからず被害を治めるのが、君の得意分野だろう？」

「ははは… “千羽” も大変だ。“前縁” に頼られたんじゃ、キリが無いね。」

“千羽” 伊藤 彩夏。“前縁” フラン＝ラザ＝フィレア、“後縁” クラン＝ラザ＝フィレア。

いずれも、戦闘として名高い「仲間」である。

そして、空中要塞から戻ってきた一人。

「…覚醒してみたいだよ。」

“熾天使” 真瀬 明日香、盟約主セーレが、探知した。

「遂にか…。」

「歌は？」

「そろそろ…。」

「よし。来るぞ！」

天空から轟雷が閃き、大草原“ハイラル”、決戦の地へ、舞い降りた。
墮天使ルシファー、降臨…それが、行われたのである。

——同じ道を行くと言う あなたの笑みは——

「あいつはまだかよ！」

「縮まりませんね。どうも“鳳”は——」

「呑気に解説してる場合じゃねえだろ！」

雷は一つにまとまっていく。その姿は、異様に小さく、そして可愛げに溢れていた。

その代償としてか、大きな電撃に守られていたが。

「俺の降臨先を読むとは、なかなかじゃないか？」

それが、体に似つかわしくない低い声で、確認するように言った。

電撃纏いし、雷鳴轟き、稲妻 迸る——

「ルシファー！！」

そこへ、

対する宿敵、

一人の少年と、一人の悪魔が、

青天の如く翼を用いて、飛んで来た。

稲妻を華麗に避けて、その中枢、ルシファーの元まで行くと、
右手から放たれる冷気で、ルシファーはわずかに揺らいだが、
すぐさま稲妻に捉われて、日高 立は弾き飛ばされた。

「いっつつつ…。」

「相も変わらず、無茶するヤツだな。」

「おかえり！」

仲間の声に苦笑をこぼす日高が、再び、立ち上がる。

「よし…。出来るだけ抑えてくれ。その間に——」

「——天翔ける力を、手に入れる。」

「任せとけ。俺ら“十翼”を、なめんなよっと！」

十人にして一垓の、“十翼”のうち、八人が、

日高を信頼し、全てを託す。

——どこまでも どこまでも 澄み切っていた——

…右手を挙げる。その力の温かさに、氷が溶けないかと訝^{いぶか}しむ。

そんな暇は無いと思いながらも、心中、苦笑にまみれている。

大きな力。これを振るえば、世界は滅ぶ。以前の彼ならば、そうしていただろう。

だがしかし、今は違っていた。

それは、世界を守る為に。

いつか、いつかと信じて。

純粋な、純粋な力を振るう。

一つに束ねられた、世界中の人々の力は、

やがて少年の右手に集結させられ、最後の歌の詩と共に、翔ける。

稲妻を抑えてくれる仲間の為にも。

自分を信じて歌う、人々の為にも。

そして何より——

——誠意と愛情を、更なる誠意と愛情で返してくれた、彼女の為——

——やはり あなたはどこまでも 澄み切っていた——

「永久に連なる力よ。過去・現在・未来に於いて、かを葬る。」

「いくぜ、シエル。」

たった一人、纏う雷撃の中枢に、飛び込む。
その、青天の翼を持つ少年の姿に、感極まる。
永久に、封じる為。
永久に、悪を絶つ為。

「無謀な…！」

「コキュートス！！」

その力は、全てに渡る願いの力は、
純粹ゆえに罪を犯した“チャオ”——ルシファーの元にも、
…届いた。

「…まずい。」

「何してんだよ。どうやって溶かすつもりだよ。」

「これじゃあ、取り返しつかないね。どうやって「悪魔の軍勢」の残存を減ぼすつもり？」

“ハイラル”にて。

世界中に幸せの音が沸き起こったものの、この永久凍結された“チャオ”は、
溶けない。
世界のどこかに残存勢力がいる。はずなのであるが…。
ルシファーの封じられた今、その術と居場所を知る者はいない。

「どうやって溶かす？」

「む…立。」

「俺！？」

起動に莫大な力を必要とする、「コキュートス」の術法。
それは、一命を永遠に、凍結する術法。
ゆえに溶けない。

「はあ…。」

一同そろって、九人そろって、溜息をついたその時。

紅き翼と一緒に、それはやって来た。

どこまでも、やかましく。

「どうしたの、みんな？」

「ああ、“鳳”が永久凍結してしまっ——」

「そういや、どうやって溶か——」

「でも、そんな方法がっ——」

「え……」

「何？——」

「「コキュートス」の解析が出来れ——」

「いくら私でも出来な——」

「そんな事言うな…よ？——」

「どうしたんだ？ お前ら？…あ…。」

そこに、いたのを、見た。

白麗の笑みで、偽り無しの優しさで、包み込む力で、

それは、神鳥フェニックスを盟約主に持つ、人間。

古風な苗字の読み方の、人間。

幸山 深雪。本人だった。

「う、嘘…？」

「へっへー。みんな、フェニックスの“再生”、忘れてたでしょ？」

「ああっ！！」

フェニックスだけが持つ、最強最大の治癒法。それが、“再生”。

どんなものでも、壊れたとしても、元に戻せる。それが、“再生”。

つまり、死んでも、生き返る。

「そ、そうだ！“業火”でコキュートスを溶かせるか！？」

「出来ぬ事は無いが…。その後はどうする？」

「えっと…。」

うまく頭が回らなくなって来た日高を支える為、無意識に反応する。
彼女——幸山 深雪が。

「ルシファーの力で、世界中から悪魔を消し去る。それが良いよ。」

「ですね。さすがは“凰”。」

「じゃ、いくよー！」

「ちょ、待て、早——」

ほんの、一振り。

コキュートスが、跡形も無く溶けてしまった。

気絶しているルシファーに、お辞儀をして、日高は、両手を掲げる。

「(…消し去る…のも、もったいないかな…。)」

そんな事を考えた瞬間、名案が思いついた。

「(みんなが、仲良くしてくれると良いんだけど…そうだ。)」

更に名案が。

今やもう、負の感情は無い。

ルシファーにでさえ、悲しみの欠片も見られなかったのだから。

そして、悪魔の所業、“荒天”は、幕を閉じた。

一つの生命たちを、残して。

“朱雀”ジェネティ・ディペロッフは呆れる。

「あなたという人は、何がどうなるか分かっていないようですね。」

“千羽”伊藤 彩夏は、感激する。

「やっと終わったね。長ったらしかつたりやありやしない。」

“前縁” フラン、“後縁” クランは、そろって賞賛する。

「“鳳” 日高 立さん。」

「ありがとう…と言って置くべきか。」

“鉄羽” ハケ岳 宗一は、相変わらずである。

「ふわあー…さっさと帰ってパーティーだな。」

“右翼” 双葉 水成は、現状を語る。

「“チャオ” が存在した今、王として世界を治める役割はやはり、ジェネティがすべきだな。僕は、田舎に引っ込むとするよ。」

“左翼” カーレッジ=ビリーは、調子良く、戯言を残して行った。

「運命がゆえするなら、また会うとしよう。」

“熾天使” 真瀬 明日香は、諦観気味に言う。

「…ま、良いんじゃない？」

“鳳” 幸山 深雪は、理想を思っていた。

「これで、平和になると良いね。」

“鳳” 日高 立。

便宜上、世界を救った張本人。

この世に “チャオ” を生み出した人間は、生まれ変わった “彼” を見て。

わずか笑みを見せながら、溜息と同時に、言った。

「何だ——悪魔っていうよりは、まるで——」

二度と、会う事の無いよう、いざに備える為、
 名義だけの悪魔を、地底深くに封じた後、
 不況を覆し、挙句、世界まで保ってしまった少年は、
 苦し紛れでは無い笑みをそれに乗せて、
 青空の如く果て無い翼を羽ばたかせながら、
 故郷へと戻って行った。

だがしかし。

「言っとくけど、深雪。」

「負けるつもりは無いからね、でしょ？」

「いやいや、折角平和になったんだから、そんないさかいは…。」

「あんたが言わないの！」

日高 立の「不幸」の肩書きは、外れていなかった。
 それでも、もう、それをどう取るかは、彼次第。
 少しだけ成長した少年は、例え何が来ようとも、既に恐怖は感じなかった。
 それを大きな成長と見つつ、少年は飛翔する。

どうしようも無い「不幸」だからこそ。
 それを外すよう、努力すべき。
 その努力が無駄だというならば、なおさら。

全てを語るのは、全てが結末を迎えてから。
 日高 立は、そう信じるまでも無く、確信していた。

なぜなら。

——今の俺の境遇を思えば、そうなるだろ？——

——それとも——

——俺の思い違いか？——

反則です

ろっど

またろっどさんですか。はいまたろっどさんです。本日はろっどさんの実力を見るためにあえてこの執筆三十分かつ推敲ゼロ分という作品を掲載してみました。……というのは嘘で、本当にこの作品の人气が高かったんです。ろっどさんは第二期週刊チャオで書いたページ数が最も多い作家なので、時にこういった待遇もいいじゃないですか。反則ですか。反則です。

じゅえるれーす

実況のろっどです。本日は話題騒然の「まうんとぶらつく」の実力を見るために、ここ、ダイヤモンドコースまでやってきました。

レースが始まる前に、「まうんとぶらつく」選手のおさらいをしてみましょう。

オヨギのスキルはおおよそ5000近く、カニカニ池ではレコードを叩き出したという噂もあります。

おしくもヒコウは0ですが、ハシリ、スタミナとともに約3000。

なんととってもすごいのはチカラですね。チカラですか。はいチカラです。

始めのビックリ箱ですら手で掴んで退け、次の木を折るほどのチカラの持ち主ですからね。

おお、いよいよスタートですよ。スタートですか。はいスタートです。

さあ、8番「まうんとぶらつく」選手、スタートです。

おおっと、まず最初のビックリ箱を飛び越えた。すさまじいジャンプ力です。

他の選手たちが一生懸命ついていこうとしますが、追いつけません！

さて、崖を軽々とジャンプで飛び越えて、木を折って直接木の実を口の中に放り込みました！ これは反則では…？ レースにルールはありません。

順調に進んでいく、まうんとぶらつく選手！

ここでカニカニ池との連動である長い池が立ちはだかる！

まうんとぶらつく選手速い！ とてつもないスピードです！

池を上がると、難なくダッシュで平地を駆け抜ける！

そして最後の落とし穴もまたいで、なんと、レコードをぶっちぎりでゴール！

優勝者は、2位と1:13差をつけてゴールしたまうんとぶらつく選手です！ 実況のろっどさん。はいなんでしょう。

あれ、人間ですよ？

さようなら

男はチャオを抱きかかえると、そのままお出かけマシンへ入れた。
数秒後、チャオは森へ送られた。

数日後、男はチャオを抱きかかえると、そのままお出かけマシンへ入れた。
やはり、チャオは森へ送られた。

数日後、男はチャオを抱きかかえると、そのままお出かけマシンへ入れた。
今回も、チャオは森へ送られた。

数日後、チャオは男を抱きかかえると、そのままお出かけマシンへ入れた。
そのシャッターが再び開いたのは数年後だった。

いちにちなになにさん

僕の名はクラウン。今日は園長さんの代理に、園長室で勉強する事になった。
園長さんの仕事は1つ。そこに座っているだけでいい。

「あの、すみません」

桃色のチャオがやってきた。

「繁殖の仕方について教えてほしいんですけど」

なんと、このチャオは僕に熱があるらしい。

それは嬉しい。だがいきなり繁殖というのは早過ぎないか。もう少し順序を踏まえてから

「きゃああああああああ」

翌日、僕は園長さんに怒られた。

僕の名はクラウン。今日はクラスに預けられたまま全く引き取られないあの子

の代わりに、クラスに預けられる事となった。

おとなしくしていればばれる事はない。チャオならば替え玉受験とか簡単だからだ。

今日はおえかきですよー、と声がする。みんなが元気よく返事をする。

ああ、平和だなあ。

今日はトランペットですよー、と声がする。みんなが元気よく返事をする。

じゃあ、クラウンちゃんに手本を見せてもらいましょう、声がする。元気よい返事が聞こえた。

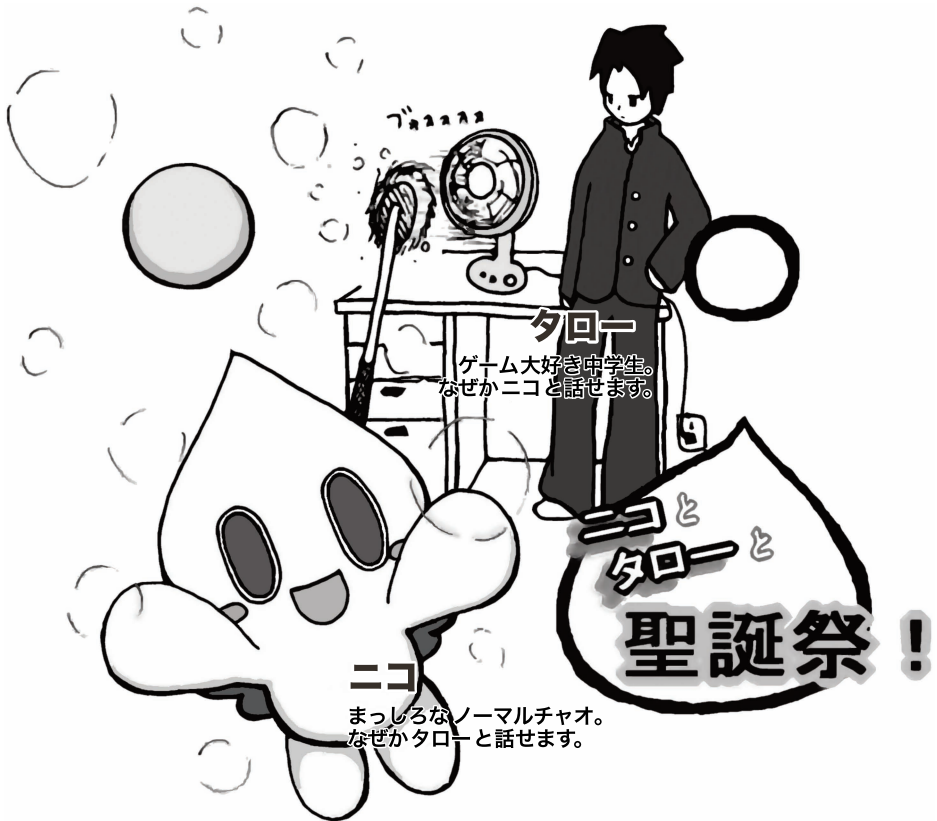
仕方ないなあ。

ちなみにトランペットを習うのはこれで98回目だ。

ニコとタローと……

ぺっく・ぴーす

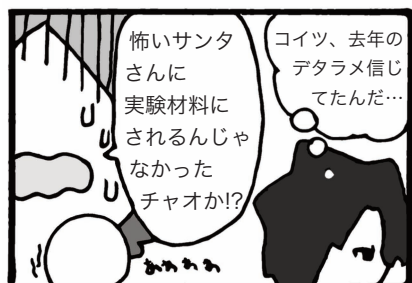
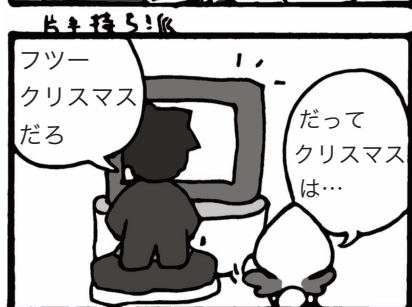
週刊チャオで唯一の連載四コママンガシリーズ。聖誕祭！から505！までを収録しました。
この作品をアンソロジーに掲載するにあたり、最も苦勞したのが、縦書きを横書きに修正すること。そのほかにもこのアンソロジー・エディションには、たくさんの手直しが加えられているので、原典と読み比べていただくと、また新たな発見があるかもしれません。



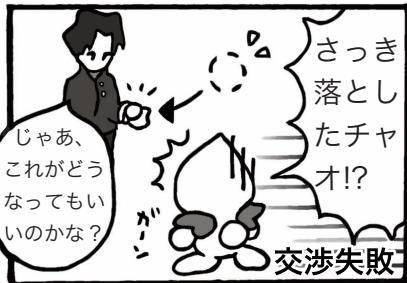
欲望



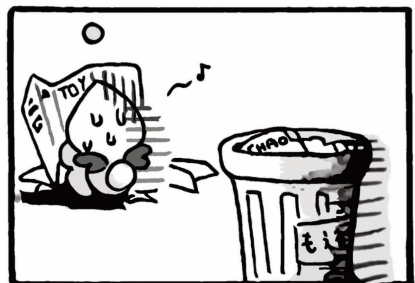
うちの担当のサンタ



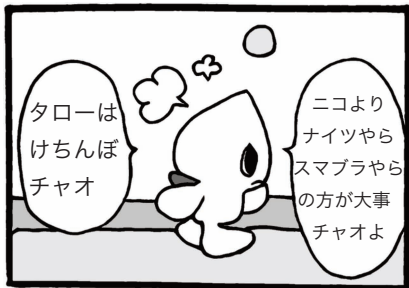
※ちょいグロ注意(どこが)



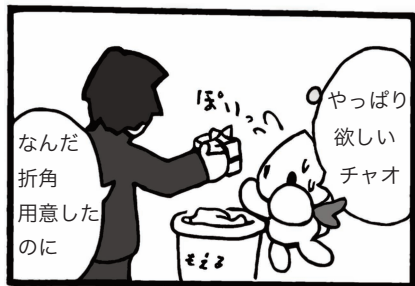
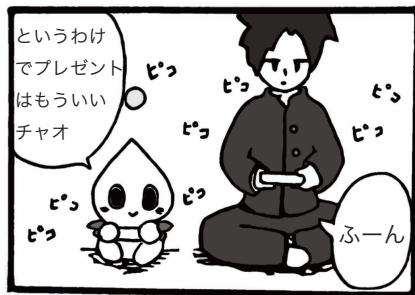
ドナドナ



バーニングカー



ストラップ960¥



ニコとタローと セツブンノヒ！

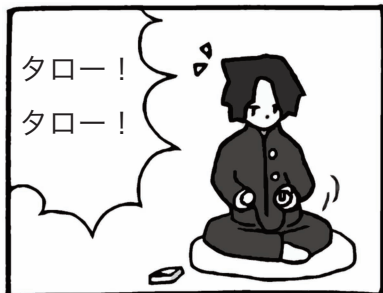
タロー
ゲーム大好き中学生。
いつも制服なのは、
別にめんどくさいからとか
いうわけではない。



ニコ
まっしろなニュートラルチャオ。
まっしろなのは、
別に作画のためとか
いうわけではない。



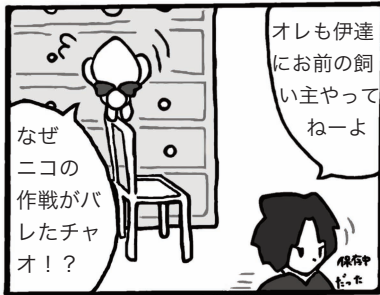
ピーナッツも豆(多分)



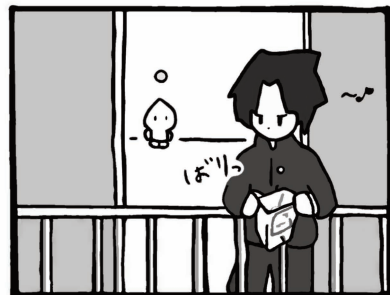
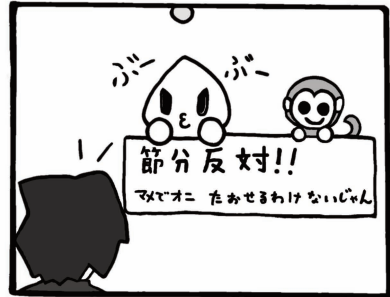
お子様の手の届かないところに



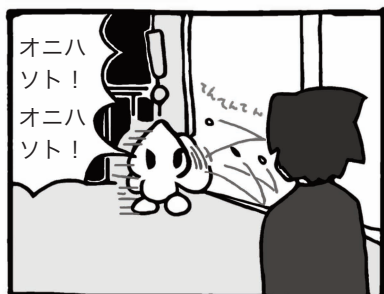
年間行事もユニバーサルデザインの時代



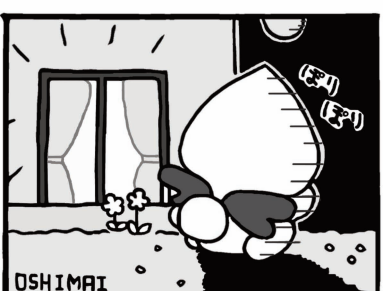
すなおなころ

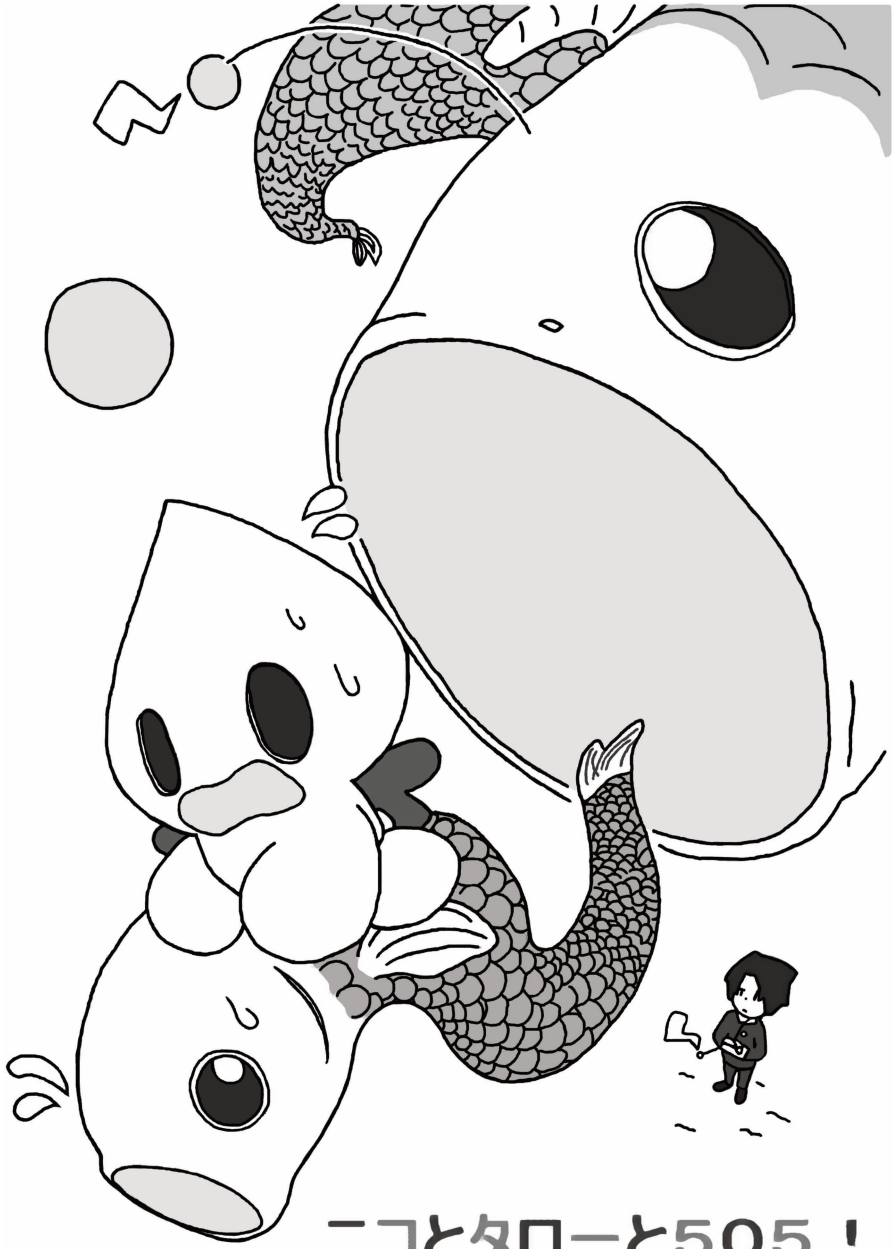


100倍返し



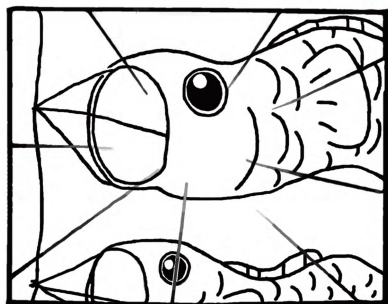
有言実行





ニコとタローと505！

ごめんこれ資料見て描いてないんだ

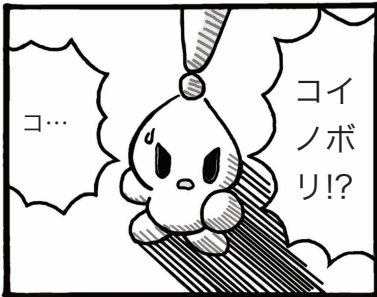


侵略兵器疑惑

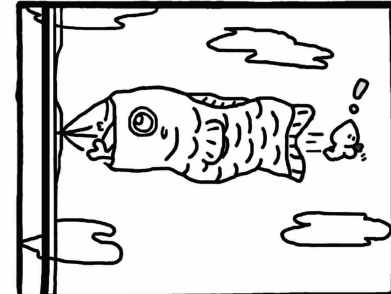
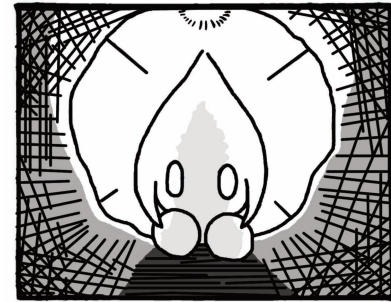


黙れ
近所
迷惑だ

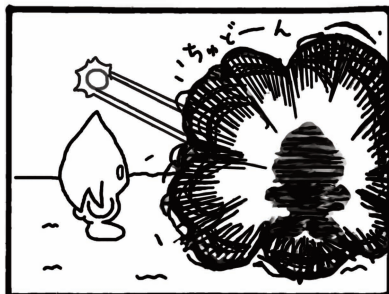
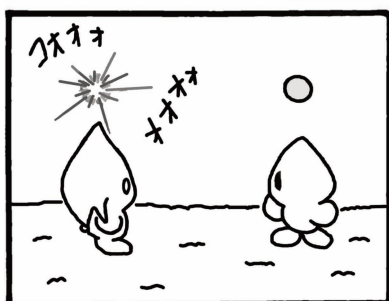
純粹なので



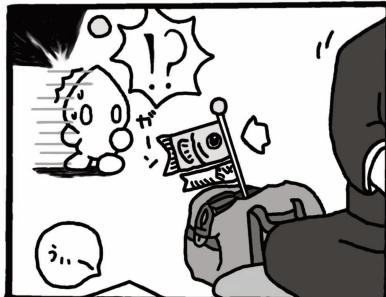
ライカ記念なので



最終兵器ライカ



まだ信じているので



～斬首～

斬守

斬守さんが自らの愛称をテーマに書いた、シリアスでギャグな聖誕祭記念作。三人のナレーターの使い分けが見所です。

当時の感想コーナーには「ぶっちゃけ、斬首って題名で吹くと思いますが」と自信たっぷりの言葉が書かれていたのですが、今となってはもう、愛称が定着しすぎてしまいましたね。

「んがあー…んがあー…」

部屋に響くイビキ……。

部屋の中は汚く、部屋の真ん中にご主人様は寝ていました。

ダークカオスの彼とヒーローチャオ（HN）の私。

そんな私達をご主人様を起こすために、ご主人様の体を揺らししました。

「チャチャーチャチャチャオー」

「んが……？ なんじゃ…まだ結婚とかは考えとらんど…」

どうやら寝ぼけているようです。

そこにダークカオスが、腹に向かって蹴りを入れました。

「ごうはッ！…げほげほ、なにするんじゃライドッ！！」

ライドと呼ばれたダークカオスは、ご主人様に捕まりました。

チャオーチャオーと叫ぶチャオに私は？？？を持ってきます。

「ん…なんじゃこれ……」

それは目覚まし時計でした。時間は7時45分。

「……仕事行かんと…って時間やばいやないかいッ！！」

そう言うのご主人様は、急いで顔洗ったり、着替えたり、ご飯を食べたり、ゲームしたり……あれ？ なんか余計な事してません、ご主人様？

「朝これせんと、チャオが死んでしまうんや！」

どうやらチャオのゲームだそうです。ゲームでもチャオなんですか、ご主人様……。

「よっしゃ行くぞ、ライド！ ヒューマ！」

そう言って、私達は仕事場に向かうのでした。

私はヒューマ。ご主人様のチャオです。

「お、お前は……」

「うるさい」

そう言って、黒い影は相手の首を斬り去った。

斬った者は、ただただ黒かった。

黒いヘルメットを外すと、影は携帯を取り出して誰かに連絡した。

『終わったか？』

「ええ」

『では、今日は休んでいいぞ』

そう言うのと、影はむっとした顔をした。

「まだ私戦えるんだけど……」

『今はお前に仕事はない。いくら過去の事が憎いからってそんなに斬る必要なからう』

「別にそんなんじゃ……」

反対の言葉を言おうとした時には、もう通話は途切れていた。

「……めんどくさいな」

影がそう言うのと、建物の光の下に消え去っていった。

～斬首～

セカンド

「さあ、らっしやい！ うまいたこ焼きあるじゃけいの！！」

とご主人様は、仕事をしていました。

ご主人様はたこ焼き屋を経営しています。結構売れる店なんですけど今日は誰も来てません。

理由は分かっています。

ご主人様……上半身になにも着てないのです。

「おっかしいのう……今日は不調かの」

そんな事言ってる間に、お客さんがどんどん遠ざかっていってます。

「なんで、お前そんなかつこなんだよ」

そう言うのと、一人の男性がやってきました。

ご主人様の友達^{とも}の蓮さんです。

「おう蓮か！ たこ焼き買いに来たんか？」

「その前に俺の質問に答えろ。なんで服を着てない？」

「暑いんじゃ」

「冬なのにか？」

「熱気がやばいんじゃ！」

蓮さんがため息をつくのと、隣のベンチに座りました。

「こんな外でやっている仕事なのに、そんな姿だとお客が来ないぜ」

「え？ この姿のせいなんか？」

「そうだ。いいから服着ろ」

そう言われると、ご主人様はここまで来る時に使っていた上着を着ました。

「これでええかの？」

「いいにきまつてるだろ。たこ焼き1パック頂戴」

「おう！ 300円じゃが、200円でええぞ」

そうご主人様はサービスして、蓮さんから200円貰いました。

「ちっと待ってな……ん？ おい。ここに焼いてた、たこ焼きどこ行ったか知つたらんか？」

と私に聞いてきました。私は知らないので首を横に振ります。

しかし、隣を見ればすぐに分かりました。

ライドがたこ焼きを食べていました。

「お前！ なに勝手に食つとるんじゃ！！」

ご主人様はライドに掴みかかりました。

「チャオチャオー！！」

「なにがチャオチャオーじゃ！！ 勝手に店のもん食うなってゆったやないかい！！」

しばらくライドとご主人様は、暴れていました。

私はその間、蓮さんの所にいました。

蓮さんが、優しい顔で私を撫でてくれた時はうれしかったのです。

そして、たこ焼き屋にあるラジオからニュースが流れてきた時に、喧嘩が終わりました。

「ああ、しんどいわ」

そんな事を言っていたご主人様を蓮さんは見ていました。

「だったら、チャオ連れてこなければいい」

そう言われたご主人様は、真剣な顔になりました。

「ワイとこいつらは、家族みたいなもんや。離れ離れにはさせられん」

そう言われた時は、私もライドもうれしかったです。

そして、ラジオの声を聞いてみると、

「次のニュースです。またしても、チャオ強盗です」

と流れてきました。

聞けば、珍しいチャオを売買している人達があいついでいるそうです。

「また強盗かいの」

「お前の所のチャオも気をつけろよ。珍しいチャオがいるからな」

そうです。ライドはダークカオスで……

私はライトグリーンで、体が光っているのです。

「分かっとな。こいつらは誰にも渡さん」

ラジオのニュースはまだ続きます。

「次のニュースです。敵か？ 味方か？ チャオ強盗の首を切っていく、暗黒ヒーロー『斬首』が昨晚も現れました」

「そういや最近『斬首』って奴が現れたらしいやないかい」

「そうだな。……そういやたこ焼き、まだか？」

「おおそうやったな！ じゃあ、200円貰おうかい！」

「さっき払ったじゃないか！」

「ちッ」

「知ってて言ってたのか」

そんな事を言いながら、ご主人様はたこ焼きを作ります。

こんなご主人様も、たこ焼き屋をやるまでいろんな事がありました。

ご主人様は昔、両親にチャオの森に捨てられた子でした。

その時、私とライドはチャオの森で熊に襲われていた所をご主人様が素手で倒してくれました。

以来私達是一緒に暮らしています。

ご主人様は私達をチャオの森から出して、人間の世界で過ごす事になりました。

ご主人様はチャオはワイらの家族じゃ！、と言ってとても優しい人のなのです。

「ほい！ たこ焼きできたてや！」

「ありがとうな」

そういうと蓮さんはベンチから立ち上がって、なにも言わずに帰って行きました。

「よし、ヒューマ！ ライド！ 仕事がんばっちゃろかい！」

ご主人様の今日の仕事はこれからなのです。

蓮はさっき買った、たこ焼きを公園で食べていた。

「やっぱりあそこのたこ焼き屋はおいしいわね」

さっきとは、違う口調でそう言った。

「……あいつはどう思ってるんだろ」

「斬首の事を」

サード

「いい夜空じゃな！」

仕事が終わって、夜になっていました。

私達は、アパートの屋上で一息ついていました。

「ほれ、丸い実じゃ」

そう言って、私達に丸い実をくれました。私もライドも丸い実は大好きです。

そして、後ろの屋上の扉がイキオイよく開かれました。

そこには、何十人かの黒い服を着た人達がいました。

「なんじゃワレら？」

「あなたに少し用がありましてね。……あなたの名は知りませんが、しばらく眠ってもらいます」

「あ？ なにを言うとるんや？」

その時、ご主人様の体が揺れて倒れて、私の目の前の景色が揺らめいて消えた。

「仕事まだかしら……」

蓮は自分の部屋で仕事に来るのを待っていた。

その時、蓮の携帯電話が鳴った。たこ焼き屋の人からだ。

「あーん」

声を調節して、携帯に出た。

「もしもし。なんのようだ？」

「おう！ ワイヤ！」

「そんな事は分かってる。なんのようだ？」

「ああ、ワイのチャオがさらわれたんや」

その言葉を聞くと、蓮は携帯を落としてしまった。

チャオがさらわれた？

仕事はないはずなのに……。

そして、急いで携帯を拾った。

「そ、それで、俺になんかようか？」

「ああ、警察に連絡してくれ。場所は??????だ」

蓮は少し間を空けた後、一つの疑問が浮かんだ。

「なあ、なんでその場所を知っている？」

「あ？ 車追いかけたにきまってんじやろ」

そんな無理な…と言おうしたがやめた。

コイツがチャオの森に住んでたなら、野生化されていてもおかしくないと思ったからだ。

「で、今その場所にいるんや。これからチャオ助けるために突入するんじやが一応警察を呼んでくれんか？」

「お前……てか、自分で警察呼べばいいんじゃないのか？」

「警察って何番やったかの？」

「アホか！ というか、お前死ぬ気か？」

「あいつらには世話になったからのう。助けんといかんのじゃ」

「……」

「今までたこ焼き買ってくれてありがとうな。…さいならじゃ」

「お前ッ…」

そう言うと言話は切れてしまった。

「……私とは、反対の人生だな」

そして蓮は迷わずに

影になった。

フォース

「ぐはッ！」

ご主人様は黒や白の制服を着た人達に殴られて、壁にうなだれていました。

とても、痛そうです。

「お前、馬鹿じゃないのか？ 一人で、チャオごときの物を助けに来るなんてよ」

そう白い制服を着た人は言い、他の人達も笑いだしました。

「ちやお……」

ライドも悲しそうです。私も悲しいです。

「ワレら……いいかげんにせえよ」

「ああ？」

「さっきから、チャオを物扱いしやがってのう……」

ご主人様はゆっくり立ち上がりました。

「ええか！ チャオはワイの家族なんや！ ライドもヒューマも！ ワイの家族なんや！！ それを奪おうとする奴はワイが絶対ゆるさんのじゃ！！」

周りの人達はまた笑い始めました。なんで笑うのですか、ご主人様の事をなんで笑うのですか。

「もういい。殺せ」

その時、ご主人様の前に
その時、大量の人の中に

影が現れた。

「し、漆黒のマントに、顔を隠す漆黒のヘルメットに、女性と分からせるための漆黒のスカート。そして……」

そんな事を言った男は、一回息を飲み込んで一歩後退してから、続けて言う。

「漆黒の刀……お前が^{ダークヒーロー}暗黒正義『斬首』か！！」

「分かってるじゃない。……死になさい」

そして、影が揺らめくとそこに影はなく、一人の男の首を斬り去っていった。

「な、うわああああああああああああああああああ！！」

男達は、逃げるが無駄な話。

一人斬り、二人斬り、斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って。
周りから一気に襲われても、一回転体を回し全て首を斬り落としていく。

一人が銃を持っていて撃ったが、黒い刀が弾を弾いて、撃った奴の首を斬る。
辺りに紅の血だまりができていく、鉄臭い匂いが部屋に充満した。

「後は……」

そう言うと、影の人はご主人様の所に行きました。
私は動きたくても、ロープで縛られて動けません。
怖いです…………。

「私を見たものは全員殺さないといけない」
そして、影は目の前の人を斬ろうと構えたが……

「なんじゃ、斬首ってお前やったのか、蓮」
この言葉で斬るのをやめてしまいました。
ご主人様？ この怖い人が蓮さんですか？

「誰の事かしら蓮って？」
「なんじゃ、自分の名前を忘れてしまうほどお前はアホやったんか？」

……何故？ 何故？ 私の事が分かるの？
影は焦りを感じてきた。

「てか、お前女声出せるんかい……」

「だまれ！！ だまれ！！ だまれ！！ 斬首するぞお前！！」
影はイキナリ叫び始めました。怖いです…………。

「だまれとはなんじゃ！！」
「うるさい！！ うるさい！！ うるさい！！ 斬首するぞ！！」
「うるさいとはなんじゃ！！」
「斬首するぞお前！！ その首とばされたいのかッ！！ 紅の血に染められたいのか！！」
「斬首ってワレ！ おい蓮！！ お前女がそんな事を言うんやないわ！！」

……え？

「お前……今女と言ったわね？」
「なにをゆーてんのや！」
そして、ご主人様は言いました。

「お前は昔から、女やったやないかい！！」

……影は一度黙り込んで。

「アンタには負けたわ……」

そう言うと、影の人はヘルメットを外しました。

そこで私が見たのは……

……蓮さんでした。

「私はね、昔チャオを飼っていたの。チャオが大好きで仕方なかった……」

蓮は天を見てから、話を続ける。

でも、アンタとおんなじようにチャオがさらわれてね。私は、実際そのチャオがどこにさらわれたのか分かってたの。

でも……助けなかった。怖かった。

後悔して、いつまでも後悔に縛られて……。

そして、チャオを売買する人を憎み、

影になった。

全て、斬首する事にした。

「……そうじゃったんか」

ご主人様は最後まで聞いていました。

私は、蓮さんが苦しそうに見えました。

「本当はアンタがうらやましかった。だから、アンタと友人になれたのかもしれない」

そうして、蓮さんは帰っていきます。

「おい蓮！」

蓮さんが振り向きしました。涙で顔が濡れてました。

「また明日！ たこ焼き買いに来るんじゃ！！ おごってやるさいのう！！」
そう言うと、蓮さんは微笑んで帰っていきました。

フィフス

今日、本当の私を見た人を一人殺さなかった。
だって、私にとってその人はとてつもなく大切な人だという事が分かったから……

ご主人様は私達と帰ってる時に話しかけてきました。
「……蓮は、アイツはまだ黒い闇の中にいるんじゃと思うんや。じゃけえワイは、アイツの闇を追い払う役目になりたいんや」
そして、夜空を見上げて言います。
「まあ、ワイはたこ焼きおごるしかできんのやがな」

朝が来た。
ワイはいつも通り仕事に行く。
そして、アイツにまたこう言ってたこ焼き食わせてやるんや。
「おう蓮か！ たこ焼き買いに来たんか？」

～斬首～

END

JAM

某

チャオの残虐な扱いが週刊チャオに物議を醸したことも久しい作品。
特に今作のマルチエンディングについては、この度書籍となったことで、また新鮮な感覚で読むことができるのではないのでしょうか。
続編として「diRty, ugly, and black coffee」などが書かれています。

1

楽園という物が、あるならば、俺たちは幸せなのだろう。
あるいは、そうだと意識できる、昔からある場所があるならば……。

したたかな猫はまた灰色、足早に路地裏を駆けていく。
俺を囲む左右のアパートは古く、それに伴うレトロな感じもない、
……ただ、汚かった。
人の動く声がする、話す声もする。

俺はまた立ち止まり、そして、歩き始める。

左から右へ、右から左へと竹竿が刺さっていて、そこに、茶色い汚れを塗りつけたシャツが乾かしてある。

ここはスラム街。
人が過去を背負い、未来を疑う。そんな街。

俺はまた歩き続ける。

キラキラと輝いているこの世界の裏側。
お金持ちがまるでゴミ箱のように、少しのお金をばらまく世界。

昔、日本は良い世界だった。
しかし、いつの間にか借金のはじけ、この国に正式な政府が消えた。
そして、この借金の山のこの土地を、引き取る優しい国はなく、

今、ここは大半がスラムとなった。

『JAM』

結露した道を通るといつも 変わりもせずに濡れる僕を
 誰も見ないよう路地の裏側 汚い人の足音が
 水色の天使 涙のように しかも笑顔で近づいてくる
 分からないよ 分からない
 見た目が正しいのか その顔が正しいのか

笑いながら立ち去る人と 「もう少しだけそばにさせて」
 寄り添いながら泣きながらそう 抱いているのは彼かそれとも……
 誰の両手も詰まっている 見えない透明な美しい『モノ』
 分からないよ 分からない
 偶然の悲劇か それが当然なのか

茶色いビルが右左から僕の身体を覗いて笑う
 汚されそうで でも慣れそうで
 どちらが怖い？ 分かりもしない

ただ誰かの頭
 撫でるだけで分からない
 愛があることを信じて
 今日も生きてみるんだろう
 ダストの中で背伸びして手を伸ばす

どこいきやあるの？ 幸せの骸^{むくろ}
 かすかに暖かい コンクリートの壁
 埋められたのか？
 沈められたのか？
 誰も知らない 誰もが持っている

ある日子供が 鉄のいたずら
 首を切られて 死んでしまいました
 誰が悪いの？
 何が消えたの？
 誰も知らない 誰もが持っている

気づかないんだ この世界では
 大きな爆弾 落とされてさ
 もしかしたさ あなたとの道も
 明日いきなり 壊されそうで……だから
 早く会いたい 早く会いたい 早く会いたい 小さな街で

抱きしめていた 抱きしめていた 抱きしめていた 小さな^{ろうそく}蝋燭
 爆竹のよう ボクシングのよう
 激しい音で 何かが消える
 僕は何かを 激しく求め たどり着くのは always in the dust

茶色いビルが右左から僕の身体を覗いて笑う
 汚されそうで でも慣れそうで
 どちらが怖い？ 分かりもしない……

Love is beautiful, therefore, love is ugly. (愛は美しい、故に醜い)
 誰かが語録に収めていた言葉を思い出した。
 自分はこの街の中でいくつの愛があるのか、見つけられるのだろうか。
 突然、左のビルから元気よく産声が聞こえた。
 誰かが「おめでとう」と言っている声も耳に自然と入った。
 俺は笑う。そして言う。
 「もう少し『東』で生まれてきたら、俺はおめでとうと言えるのかも。」

ここの土地の名前は「東京第一貧困地区」。
 スラム街が立ち並ぶ、汚い、水もない、光も少ない、
 まさに貧困のステレオタイプとも言える街。
 今、俺はまた右足を踏み出す。屎尿が^{しによう}混じる水たまりを踏んだ。舌を打つ。
 そして、ああ、こんな街だと悪態ついて、ため息をつく。
 今度は誰かが二階から路地に水を落とす。
 生活排水のるつぽと化した道を俺はまた一步、一步。

何分経っただろうか。時計もない、分からない。
 騒音のゴスペルを抜け俺は一つの家へと入った。
 裸の電球がぼつんとつるされている。
 窓はもはや窓ではない。
 ベッドは新聞紙で作られている。
 テレビなどない、ラジオは一つある。水道は幸いにも上水道がある。
 タンスの上には古びた写真と赤い苺のジャムが沢山置いてある。
 一人の女がいる。
 一匹のヒーローカオスチャオがいる。

「……おかえり。」

「……ただいま。」

女の名前は「赤井亜子」と言う。多分十六、七歳だと記憶している。

元々、他の家の娘だったが、ここに転がり込んできた。

最初、相手方の父親はこの子を召使いとして雇ってくれと言ったが、俺はとてもしゃないが人にお金を分けられるほどの裕福さではなかった。

次に、彼はこの娘と結婚してくれと言った。どうしても彼は、娘を養えないと言う。

俺は考えに考えたが、結局、亜子を見た瞬間結婚しても良いかなと思った。

亜子とは気が合った。

気が合わないと、ため息が出るこの生活に、お互いに笑顔が出来るはずない。……と確信している。

最初は敬語を使っていた彼女もいつの間にかため口をきくようになっていたし、今のところは順調にいつているはずである。

しかし、……しかし、何かが二人には見つかっていなかったようにも俺は思えた。

亜子にはそれがもう全部見つかったらしいが、俺には何かが……

何かが見つかっていなかった。

……俺は少し息をつく。ため息にならない程度に。

そして、窓の外、決して心地よいとは言えない風を浴びながら頭を出した。

窓の方向、見たのは、皮肉にも、『東』の方向。

東の世界は、同じ国であつたはずなのに、違う世界であつた。

名は「東京富裕地区」。

水は整備され、森もあり、木の家が並び、子供は勉強をして、男女は綺麗な衣服を身にまとい、自治は安定していて、それ以上に、食べ物には綺麗で、お金の金が太陽光線に反射して……。

夢だった。夢である。あの世界は。

亜子も、密かにその世界を夢見ていた。

俺は亜子が「全部見つかった」というのはそういうことだと思った。

その全部見つかったという内容は、あきらめでもあり、

夢が結局夢のままである……ということだと思った。

「……なあ。」

「うん？」

「亜子、お前さ、もしも俺が富裕地区の人間だったら……どうする？」

俺はヒーローカオスチャオを膝に抱いた亜子に聞いた。

そして、今までじっと見たこともなかった亜子を改めて確認する。

黒い大きな猫目、肩に触れる程度の髪の毛、小さいチャオを抱く小さい手。

確かに、亜子だ。

そして、その亜子は少し苦笑いをして、

「そっちの方が良いけど、どっちでも良い。」

「……そうか？」

「うん……富裕地区は夢だよ。夢だけど……やっぱり、ただの夢なんだよ。」

「それは、あきらめか？」

「……違う。自分の寝ているときに見た夢のような感じ。言葉じゃ説明できないよ。ムリ。」

「ムリ、か。そうだよな。悪い悪い、ちょっと聞いてみたかっただけだし。」

「ゆー（俺のことをこう呼んでいる）はどっちが良いの？ 私が……だったら。」

「俺が……かあ。」

俺は亜子を見た。ヒーローカオスがふわりふわりと膝の上で踊っている。

亜子自身は窓からの斜陽の橙の光に照らされ、瞳に潤いを保っていた。

彼女が富裕地区の人間だったら、どうなるんだろうか。

今よりもっと自由に、こんな俺を好きになる必要もなかったのではないか。

俺はお互いが好きなんだろうな、とは思いつつも、ある一点で疑心暗鬼になっていた。

亜子はあるとき俺を無理に好きになろうとしたのかもしれない。

それは結局成功したが、もしかしたら俺より好きになれた人はいくらでもないか。

もっと大きな成功を手に入れたのではないのか……？

今の亜子でなければ俺は亜子と一緒になんか、なれなかったのではないか……？

「俺は……『今の』亜子じゃないと嫌だな……。」

「……そう？……へえ……へへ。」

亜子は笑って上目遣いで俺を見た。

多分、今二人の解釈は違っているだろう。

亜子は今の自分を心底好いてくれていると思って嬉しくなったに違いない。

もちろん
勿論、俺は違っていた。……

楽園という物が、あるならば、俺は幸せなのだろう。
俺にとっての楽園とは人が一つの運命しか持ち合わせていないという楽園。
亜子と共になるのがお互いに決まっていたことだと感じられる楽園。
でも、楽園なんてない。

少なくともこの街には。この世界には。

……。

俺はまた亜子を見る。
亜子はチャオが大好きだった。俺と同じくらい、いや、それ以上に好きなのかもしれない。
暗い部屋にいても俺の居場所より、チャオの居場所の方が良く分かった。
(まあ、ヒーローカオスは全身かすかに光っているので分かるのは当然なのだが。)

窓の外が暗い。夜になりかけている。
「もう夜か……。」
そういえば外から聞こえる声も少なくなっていた。
亜子は俺を見て笑顔で「夕食にしようか」と言った。
その手には製造主も原材料も分からない赤いジャムがあった。
貧困地区で最も格安で売っている。何故か。分からない。何で出来ているのかは一部の人間しか知らない。
味は甘い。苺の味ではないが、かすかに苺のような感じもする。
亜子も俺も好きではなかったが、いつの間にかこれしか食べれなくなっていた。

ビタミンも炭水化物もタンパク質も糖分も、このジャムにはあり、第一貧困地区が貧困地区で、一番豊かになっている要因がこれでもあるのだった。
「ジャム、もう慣れたよね。」
「飽きないのか……お前は。この味に。」
「慣れたの。もう飽きたとか飽きないとか、あまり思わないかな。」
「お前は幸せなヤツだな。」
「何それ？……でもそう、今私は幸せだから……。」
「ふふ……なんで？」
「……聞かないでよ。分かるくせに。」

亜子は笑う。俺も笑ってジャムに手を伸ばす。

Inborn, Past, Yesterday, Today, Tomorrow, Future...

ジャムをむさぼりながら生きてきたこの二十五年間。

そして、ジャムをむさぼりながら生きるこれから、since today afternoon...

亜子と俺はジャムと共に、生きていく。いつまでも、生きていく。……

ふと、赤いジャムがスラムの街を埋めてゆく、浸食してゆく光景を想像した。

誰もがジャムに酔い、ジャムに生活をゆだね、この俺は幸せと並行してこのジャムを持っている。まさに皮肉だ。

生きる糧であるジャムが、人生を賭けて求めるべき『幸せ』と同じ価値にあることが俺はどうしても許せなかった。

でも、ジャム以上に素敵なモノは自分にはすぐには見つからなかった。

亜子？

一瞬「素敵なモノ」と考えた瞬間、すぐそばにいる顔が思い浮かんだ。

逆に言えば、それだけしか思い浮かばなかった。

つまり、それは……。

「亜子、……。」

「……何？ 良く聞こえなかったけど？」

「いや、何でもない……。」

「そう？……へへ、今日のゆーは朝から変だよ。変、変。」

「変？……ああ、お前みたいなヤツを即行で家に迎えただけのことはあるだろう？」

「……え？ ちょっとそれ……。……えー？ どーいうこと？ 何か不満でもあるのー？」

「……別に。」

「あるんでしょ？ あるならはっきり言ってよー。」

「ないない、さあ、早く寝ようか。」

「……ぶーぶー。」

俺は背中から来るブーイングを無視して、いつもの新聞紙の寝床に向かった。

電気は九時には完全に消える。

亜子は文句を言いながら、……でも、少し楽しそうに……俺の隣に寝ころんだ。

「おやすみ……。」

「うん……。……。」

亜子は数秒もしないうちに目を閉じて、そして、寝息を立てた。

俺は急に亜子が欲しくなったが、彼女を今無理に起こして、自分に従えようとは自分の理性が許さなかった。

俺は「欲求」や「疑心」を無理矢理押し込んで、寝返りをうった。

いいさ、幸せを感じるなら、きっとそんなモノなんて胡麻の一粒にもならない。

今宵、月の見える窓を少し眺め、色々な将来を考えているうちに、涼しい風が吹いてきて、いつの間にか目を閉じていた。

『Determine their future』 ～未来を決定せよ。

2A・次の日、その幸せはあっさりと壊れる形となった。…… —126

2B・次の日、俺と亜子はいつものように工場へと出かけた。…… —130

2A

次の日、その幸せはあっさりと壊れる形となった。

スラムとはこういう街なのだろうか？

……答えはイエスだろう。

事件があったのは朝だった。

その日も俺たちはいつものように工場に出かけようと、毎度のようにジャムに手を伸ばしていたときだった。

亜子が俺に話しかけようと前のめりになった瞬間、一匹の赤いチャオが入り込んできた。ピュアチャオらしい。

最近のチャオは赤色属性が多いという。

退化か、進化か、それは分からない。

俺の周りも最近赤色が多くなっている気がする。

そうして、『赤井』亜子はおびえているチャオを介抱した。

それは逃げてきているみたいだったので、亜子はそのチャオをさっとタンスの裏に隠した。

と、今度は茶色い肌をした男が数人窓から顔を覗かせた。

見たことある人達だと思ったら近くのジャム工場の人達だった。

彼らは俺と顔見知りというものもあるのか、穏やかな口調で、

「なあ、この辺にチャオがいたのを見かけなかったか？」

「……いや、見てねえな。」

「そうか……いやあ、困った。あれで『三本』は出来たのに……。」

……『三本』……？

俺の思考回路は一瞬止まり、言葉が思い浮かばないまま、彼らに、質問を投げかけた。

「へえ……。……は？……お前ら……？」

「ん？ 何か詰まったことでもあったのか。」

「……お前ら、チャオをどうするつもりだったんだ？」

「え……。？ お前、知らなかったのか……。……そこにあるじゃないか。」

……。そこにある……。？

俺が周りをきょろきょろと見ていた瞬間、男は冗談でも言うかのような軽い口調でこう言い放った。

「ジャムだよ。」

……。……。

……！？

ジャム、ジャム、ジャム……！？

その瞬間穏やかな空気は一気に寒冷化し、外にあった枯れかけた木が雪に覆われさらに枯渇していくイメージを目に写した。

いや、それは例えでも何でもなく、本当にそう見えたのだ。

俺はさっきまで良く動いていたジャムのスプーンを机に置き、冷や汗を背中ににじませながら彼らの目を見た。

彼らの目が一瞬先ほどの木とオーバーラップした。枯れ果てていた。

彼らはやがて窓枠から顔をはずし、またどこかへと走っていった。

俺は顔の向きを亜子の方に向けた。若干の恐怖を覚えながら。

若干の恐怖は、当たっていた。

亜子はスプーンを持った右手がブルブルと震えている。

目は瞬きをせず、ある一点……ジャムに焦点をじっと合わせていた。

そして、目が閉じたかと思うと、安い椅子と共にストンと床に転げ落ちた。

「亜子……！」

俺は亜子を抱きかかえると、急いでベッドにその身体を運んだ。

精神的ショックがかなり大きかったと見られる。

それもそうだろう。

俺でさえ、あれだけの衝撃を持って受け入れた現実を、チャオが大好きな、亜子はその衝撃に冷静に対応できるとは思っていなかった。

思っていなかったが……ここまでだとは思わなかった。

ヒーローカオスチャオは赤色じゃないし、不死身だから何しようが死なない。

多分、こいつがジャムになることはないだろうが……。

でも、それで気休めにはならないだろう、亜子にとっては。

こんなレアな特別なチャオの、

何千倍ものチャオが殺され、

ぐちゃぐちゃにされ、

ジャムにされる。

そして、何より、俺は二十五年、亜子は十六年、このジャムを食べてきたのだ。

そして、何より、これで幸せの柱を一本作り上げていたのだ。

総てががらがらと壊れる音がした。

その昼、俺たちの工場で事故があったらしいが、そんなことを追い抜くぐらい甚大な事故がここにはあった。

夜になっても亜子は起きようとはしない。

真夜中になって、彼女はようやく口を開いた。

「ねえ……ゆー。」

「……亜子……。」

「私、もうジャムは食べられないよ……。」

「ああ、良いよ、気にするな。俺が何とか、まかなう。」

「……嘘。そんなの無理よ。今のこのスラムじゃ、ジャムしか食べられないものの。」

「……でも、お前を餓死させるわけにはいかないんだ。」

「……私、以前あなたからきいた質問の答えを変えても良い？

……やっぱり、私、あなたが富裕者の方が良かった。

あなたが富裕者なら……私は……知らなくて良かったの……。

あなたと会うこともなかった、あなたといなくても良かった。

幸せを知ることなく死ねば良かった。

あなたは苦労せずに生きていけるの。……全部が良い結果になったのに。」

亜子は全身全霊で総ての言葉を吐いた後、ベッドで深呼吸をして、俺の方をじっと見た。

悲しくなった。切なくなった。

そう、実際、彼女を満足させられるくらいのジャム以外の食料など、手に入らなかった。

相乗効果だ。

もう、どうしても、悲しくならずにはいられないのだ。

「……そんなこと……。」

「ゆー？」

「そんなこと言わないでくれ……。そんなこと……。」

「ゆー。……ゴメン。ゴメン、ゆー。私のわがままなの。」

お願いだからうなだれないで……。」

亜子は少し涙を浮かべていた。

俺は悲しい声は出したが、涙までは流せなかった。

スラムという現実にあまりに慣れすぎて、順応する速度が速すぎて、涙を流す純情などとっくに消え去っていた。

翌日。

俺たちは悲しみで満腹になり、ろくに丸一日何も食べなかった。

亜子は今日もまた俺より早く起きて、俺の肩を揺すった。

俺は手を伸ばして新聞紙の塊から足を出す。

工場は爆発したらしく、今日からは当分復旧作業になるらしい。

俺は皮肉にも『ジャム』工場で亜子と共に働くこととなった、知らせを受けた。

スラムとは現実だ。

勿論、こんな『ちっぽけな』感情で工場を休めるはずがない。

俺と亜子は二人で家を出た。

亜子はずっと俺の腕で目を隠していた。

かすかに震えさえもしている。俺は思わず亜子を家に帰したくなった。

……が、ジャム『以外』の食料を買うには二人分働かないといけない。

亜子もそのことは十分承知していた。

……俺は決断した。

『Please determine their future』 ～未来を決定せよ。

3A・俺は、亜子を抱えて工場から家へと引き返した。…… —132

3B・俺は、亜子を抱きしめた。そして、手を握り、工場へ入った。…… —135

2B

次の日、俺と亜子はいつものように工場へと出かけた。

俺たちはいつものようにジャムをむさぼった。

途中で、ジャム工場の人達が、赤いピュアチャオを必死に追いかけている様子が目に映ったが、俺たちを即行で駆け抜けていったので無視しておいた。

いつものように工場に着く。

ここからは亜子と俺は違う場所で作業をする。

亜子は紡績工場。

俺は力仕事のいる野外での作業だ。

朝日を浴びる中、俺は木材を必死に運んだ。

持っていく場所は富裕地区と貧困地区を分ける川である。

俺はそこからたまに流域面積が広いその川の、遠く先に見える緑色の光る都市を見た。富裕地域だ。

「……ちっ……へへ。」

俺は舌を出し、苦笑いをして、元来た道を引き返した。

今ある道が、俺の運命だと俺は思った。

それこそがあんなちっぽけな都市の楽園なんかより、よっぽど良い楽園だと思った。

工場が見え始めた。

今日の夕方、俺は昨日の夜言い忘れていた言葉を言おうと思った。

あの中には亜子がいる。

そして今日の夜もまた彼女と同じ家で過ごすのだろう。

そうして、笑顔で工場を見た。

瞬間だった。

すさまじい爆音が辺りに轟^{とどろ}いた。

俺は思わず周りを見渡す。

……正面を向いたとき、俺は愕然とした。

工場が、工場が、爆発して、消え去っていた。

……工場が消え去るということはつまり、その中にいた人々も……。

「……亜子！」

俺は思わず自分の一番愛しい人の名前を叫んで工場へ続く坂を走った。

走って近づけば近づくほど、リアルが見える。

俺はだんだんと視界をぼやけさせながら、迫り来る工場の^{ざんがい}残骸を見た。

俺は急に力がなくなり、そこにへたり込んだ。

何か最初からあきらめていたモノが改めて現実になった時の、独特の空虚が俺を襲った。

夕方、工場にいた人間全員が死んだことが明らかになった。

俺は亜子の壊れたネックレスを形見としてもらった。

当然だが、形見など何の役にも立たない。

むしろ、自分の悲しみを深く深くしまって、そして、幾度となく、今日の光景を瞬間をフラッシュバックさせるだけなのだ。

家に帰っても、今日は誰もいない。

ライトカオスは抱かれる人間もいないままずっと座っていた。

……これが「運命」なのだろうか？

どうしようもない、逃れようもない運命だったのか？

俺は自問自答を繰り返した。

答えは出ない。

相手のいないままモーテルに泊まるかのような空白の頭をかきむしり、俺は今日もまたジャムに手を伸ばした。

明日からは職を変えないといけない。

新しい工場で働かないと、この世界は、生きてはいけない。

さあ、

明日は……どこへ行こう……？

(end 1... 廃墟のモーテル)

3A

俺は、亜子を抱えて工場から家へと引き返した。

「ゆー……。」

「やっぱり無理だよ。お前を不幸になんかしたくない。」

「ゆー……。」

亜子は嬉しそうに俺の顔を見た。

俺は黙って笑って彼女を家に置いた。

彼女は泣いているようにも見えた。

それは決して昨日のような涙ではない。

暖かくて、穏やかな、そんな言葉が似合うような涙だった。

「じゃあ、行ってくるよ。」

「うん……。」

結局、俺だけがジャムの工場に行くことになった。

最初入っただけだと、一見普通のロビーにも見えた。

ロビーの向こう側に工場があるらしく、ロビーではせわしく男女がそこら中を歩いている。

俺はふと色々なパンフレットがあることに気づいた。

「富裕地域で働く女性募集……ただし一生貧困地域には帰れない。……当たり前か。」

「なあ、その男のかた、早く工場で働いてこいよ。」

「ん……？ あ、はい。」

俺は帽子を取って軽く挨拶^{あいさつ}をして、

そのまま綺麗なのか汚いのか分からぬ、ジャム工場へと足を踏み入れた。

……。

見た瞬間にカルチャーショックを受けたのは初めてだった。

赤いピュアチャオが大量に生きたまま熱湯の鍋に入れられている。

悲鳴が聞こえる。鳴き声が聞こえる。やがて消える。

その繰り返しでマユさえ作らずチャオは形を残したまま死んでいた。

そして、鍋からチャオの死骸がどさりと網に掛けられ、また、鍋に砂糖などと共に煮詰められ、どろどろの赤い液体……ジャムが、どんどんと瓶詰めされていた。

「……ひでえ。」

「ん？ 何がひどいんだ？ 生きるためだ。しょうがないだろう？ じゃ、お前はチャオを熱湯の鍋に入れる作業だ。がんばれよ。」

男は乾いた目つきでにこりと笑うと、潤んだ生気のある俺の瞳を止めて、そして、肩を叩いた。

俺はしばらく立ちすくんでいたが、亜子の顔を思い出して、拳を握りしめ、工場の仕事に取りかかった。

チャオは確かに俺の手では生きていた。

俺が抱いた瞬間、チャオはまるで運命を悟ったかのような顔をする。

いや、実際は慣れていない人だから緊張しているだけだろうが——。

俺はこの光景で一瞬亜子を初めて抱いたときの光景を思い出した。

亜子は新聞紙のベットでじっと俺がなす事を見ていた。

かわいらしい目をきよろきよろとさせて、手は^{おぼつか}覚束なくて、口をもごもごさせて、俺の手をぎゅつと掴んで、そして……。

……ただ、未来のベクトルは全く逆の方向である。

亜子はその後俺の想像ではおそらく幸せになってきていることだろう。（今はかなり落ち込んでいるが。）

……このチャオは……。

俺は心中でゴメンと思いながら、そのチャオを投げた。

チャオは熱湯につかった瞬間急に表情を変えた。

俺は震えた。全身が震えた。

あのチャオが、あのチャオが、信じられない表情を出している。

そして、甲高い悲鳴が聞こえる。

——ああ、この世界^{はかな}儚きこと。

数秒後、鍋からは音が聞こえなくなっていた。

チャオは目をガッと開けたまま……ぶかぶかと浮いていた。

——その日、俺はその光景を百回見ることとなった。

夕方。俺は給料をもらった。

しかし、その「給料」を見た瞬間俺は愕然とした。

「……ジャム……！？」

「そうだよ、お金よりも価値はあるぞ。食べ物をあげるなんて。しかもここの中でも上級のジャムだ。何か文句あるか？」

「……いや……ない。」

俺は失意のうちに、家に帰った。

亜子は何を言うだろうか。

……いや、彼女は優しいから何も言うことはしないだろう。

ただ、彼女はその代わりジャムをもう二度と口にはしないだろう。

そして、日を追うごとにどんどん衰弱していつて……。

俺は家の前で立ち止まった。

深呼吸をした後、その家に足を踏み入れた。

ふと、そこで、俺は気づいた。これが運命なんだと。

亜子が生きていくという運命を支えるくらいの力が、俺の運命には、なかったのだ。

それはまるで、悲鳴をあげて死んでいったあのチャオのように。

俺たちは……

亜子が衰弱死したのはその三日後だった。

(end 2... 越えられぬ壁際にて)

3B

俺は、亜子を一度自分から解いた。

そして、亜子の小さくて弱い体を優しく抱きしめた。

「ゆー……。」

「……亜子、ごめんな。ごめんな……。」

俺は亜子を抱きしめ続けた。

スラムの人間はもはや野次馬さえもせず、平然と道を通り過ぎる。

俺は亜子にずっと「ごめんな」を言い続けた。

と、亜子がゆっくりと顔をあげる。

涙が出そうになっていたが、なんとかこらえながら俺に笑いかけた。

俺はもう我慢ができなかった。

亜子の唇を、奪った。

人が若干こちらを見る。だが、彼らにとっては自分自身の方が大切である、すぐにどこかに歩き去っていった。

亜子は「ん……。」と少し声を漏らしたまま、俺の腕を放さなかった。

俺も亜子の顔を放そうとはしなかった。

数分後、亜子は俺から顔を逸らして、……でも、腕を抱いたまま、本当に、軽い笑みを漏らして俺の方をじっと見た。

「ゆー……良いよ、もう良いよ。私はもう大丈夫。ありがとう……ゆー。」

「……ああ、……行こう、もうジャムは食べなくて良い。今日から俺は二倍働くから。」

俺は亜子と共に工場へと向かう。

雲はいつの間にかとぎれ、川はいつもより澄んでいた。

スラムの一瞬のある兆し。

あまりにもタイミングが良すぎるそれに、俺は笑みと言うより、むしろ苦笑いを漏らしていた。

……。

工場に入ると、そこは小ざれいなロビーがあった。

俺たちは拍子抜けしてその中に入る。

「……まだ大丈夫みたい。」

「ああ、良かったな。……それにしても雑な広告の貼り方だな……。」

「ねえ、中って、どうなっているのかな……？」

「……俺が見に行ってくるよ。」

「……大丈夫？」

「ああ……。」

俺は亜子のためにも単身で工場の中に入った。

……。

……見た瞬間にカルチャーショックを受けたのは初めてだった。

赤いピュアチャオが大量に生きたまま熱湯の鍋に入れられている。

悲鳴が聞こえる。鳴き声が聞こえる。やがて消える。

その繰り返しでマユさえ作らずチャオは形を残したまま死んでいた。

そして、鍋からチャオの死骸がどさりと網に掛けられ、また、鍋に砂糖などと共に煮詰められ、どろどろの赤い液体……ジャムが、どんどんと瓶詰めされていた。

「……ひでえ。」

俺は人間が見てはいけな光景を見てしまった気がした。

……やっぱり、亜子は帰した方が良いのだろうか？

こんなのを見せたら、俺は亜子に嫌われそうで、怖かった。

俺は足をかすかに震えさせたまま、ロビーの白い床を踏んで亜子の元へ行った。

と、そこで亜子は何か一つの広告に熱心に目を通して目に気づいた。

俺は亜子の肩越しに、その広告の内容、いや、大文字で書かれているところしか、読めないが……俺はその大文字を一文字一文字丁寧に読みとった。

『富裕地域で働く女性、募集中』

「……。」

「ん、ああ、広告か……。……。……なるほど。」

「ねえ、ゆー。……ちょっと興味があるの……。……。」

亜子は俺を猫の目で見た。

……。

ちょっとどころではない。

俺はそう思った。

亜子の目つきが違う。

俺は驚きと共に、何かずどんとのしかかるのが分かった。

クリスマスツリーの沢山のキラキラと輝く飾りたちの、一番の核心となるスターを見たときの感情とそれは似ていた。

俺はずっと裏切られていたような気がした。

亜子は結局そっちが夢であったのか、と。

俺と確かに何かを紡いでいたのは分かっていたが、それ以前からもっと何か他のモノを紡ぐ準備をしていたのだ。

俺はさっきの亜子の唇の味を忘れていた。

俺の唇はもはや冷たい乾燥した風に乾かされ、すすんでいたのだ。

「……亜子。……行くのか？」

「うん……。私……一度でも良いから……。」

「そう……なら、募集要項、読んでおきな。」

三年と十ヶ月前、俺と亜子は出会った。

そして、たった一ヶ月前、二人はつながり、

たった一時間前、俺と亜子は精神的につながったはずだった。

「……。あ……。」

と、ふと、亜子が驚いたような息をついて広告を見たので、俺はまたその忌まわしい紙切れに手を伸ばした。

『ただし、女性はまだ貧困地域に戻ることは許されない。』

もう貧困地域に戻ることは許されない。

それは、いわば……そう、そういうことだ。

亜子は俺の顔を黙ってみた。

その目はいつか、あのジャム工場の男の目を彷彿^{ほうふつ}とさせた。

義眼のように動かない彼女の目。

瞳は黒いというより、黒ずんで見えた。

俺の黒さは……無限に続く、ブラックホール。

亜子の目は……希望を俺に対する申し訳なさから、無理矢理黒くしているだ

け。

俺は舌を心の中で打った。

プライドや、意志や、社会や、愛や、欲や、希望や、譲歩や、色々なモノが混ざり、俺の心に億千万の針をぶっ刺した。

つまりは……そう、

『長い夢の終わりにピリオドを打つ』衝撃の名言が、俺を襲った。

「ねえ、ゆー。……私はどうすれば良いの……？」

「……。」

「ねえ……ゆー……。」

……俺を燃やしてくれ。もう一度燃やしてくれ。

つらい過去も、先々の未来も、全てジャムにしちゃって、ぐちゃぐちゃにしちゃって、燃やしてくれ。

燃やせ、燃やせ、燃やせ、燃やせ、燃やせ、燃やせ！

そして、俺に一本の金の針を与えてくれ。

亜子の未来を指し示し、そして、俺の心臓を突き刺す金の針を。

『Determine their future』 ～未来を決定せよ。

4A・俺は金の針を持った。そして、俺は自分の心臓を刺した。——139

4B・俺は金の針を持った。そして、俺は亜子の未来を指し示した。——142

4A

俺は金の針を持った。そして、俺は自分の心臓を刺した。

二人で工場から出た後、振り向いて亜子の顔を見た。

亜子の顔は良く分からなかった。

何が混ざっているのか、全く、分からなかったのだ。

だから、……俺は簡潔に、一言だけ言った。

「お前が好きなように……すれば良いんだよ。」

嘘。俺は嘘をついた。

でも、もう、亜子を抱くことはできないと思った。

もう、亜子の羽は伸びきっていて、風を感じ、虹を超え、川を越え、そして、羽は天を駆け抜けようとしていた。

多分、亜子はあちらに行っても、厳しい人生は送るだろう。

虐待も受けるかもしれない。

でも、ここにいるよりは、生きていられる。素敵な男性もいる。

亜子はスラムの人間のわりには、綺麗だった。

絶対、男性を引きつける女性だ。彼女はそういう運命で生まれてきたのだ。

「ありがとう……。」

俺は一言そう言った。

そして、そこの工場の人間に軽く話しかけた。

「この広告の連絡先はどこだ？」

……。

一週間後。

亜子はすっかり支度をすませた。

場所も分かる。その工場の人間は良い人達らしい。

多分、彼女は幸せになれるのだろう。……ここにいるよりも。

きっと、彼女は俺といたことを忘れるだろう。

「ありがとう……。」

「ゆー……。うん、ありがとう。本当に……。」

「……ありがとう、きっと、好きだった。」

「……うん。」

「俺のことはすぐに忘れろ。これからお前は富裕者の人間に近づくんだ。」

「……うん。」

亜子は家を出る。そして振り向いた。

数メートル歩く。そして振り向いた。

数十メートル歩く。もう振り向くことはなかった。

……。

俺は一人になった——ヒーローカオスチャオと、いつかの赤いチャオはいるが、心にはもう誰もいなかった。

分かっていたから、こうなることは分かっていたから、悲しくはなかった。
悲しくはなかったが……。

もう俺は金の針を亜子に使ってしまった。

そして、俺の金の針はもう……存在、しない、のだ。

俺はもはや、この世界にいる必要は、ない。

最近ジャムしか食べていない俺には久しぶりに見る事となった、一本の、銀色の包丁を、取りだした。

そして、二匹のチャオに呼びかける。

「なあ、……海へ行こう。」

あの日刺さったとげを抜かなきゃとりあえず俺たちに未来はない
行きすぎているんだ胸の奥まで……吸い出して欲しい
抱き合って何かを誓いたいけれど それって半信半疑じゃない？
微笑みの奥には悪魔がいた それじゃ切ないや
愛が 空中で獲物を狙うハゲタカなら 防ぎようがないね
それじゃ何を分かち合おうか……

海の果ての果てにキミを連れて
銀の砂浜でこの胸に銀の引き金引かなきゃ
キミは僕のことを忘れるだろう
EASY GO 今 燃やしてくれ サンシャイン

あのことで頭がいっぱいな夜は
ズブロッカでは消せない

人が海に戻ろうとして流すのが涙ならしょうがないね
それじゃ何を信じ合おうか……

海の果ての果てで恋も欲望も
波のように碎け散って幻のようになれば
僕はキミのことを忘れないだろう
潮騒ぎの銃声胸に響いて

長い夢の終わりを迎えるだろう
EASY GO 今 燃やしてくれ サンシャイン

砂浜に着いた俺は金色の代わりに銀色の針を抜いた。
夕日をバックに、俺は首にそれを当てる。
綺麗な光景……なのだろうか。
古典世は、同じような色と色がラップすると、美しさは際だつという。
ならば、今は同じ赤色で美しくしよう。
汚い人生を送ってきた俺の最初で最後の^{はなむけ}餞。
俺はチャオ二匹を少し笑って見つめた。
深呼吸をする息は深く。

俺はあえて『西』を向いて、下をしばらく見ていたが、

刹那に、首を天に向け、首横に思い切り銀の針を突き当てた。

(end 3... 聖なる海と運命の^{かせ}枷)

4B

俺は金の針を持った。そして、俺は亜子の未来を指し示した。

俺は勢いよく亜子の手を引っ張った。

そして、工場の中を一目散に駆ける。

亜子は俺の行動の真意を全く分かっていないらしく、俺にただただ着いてきた。

俺はふいに一匹の赤いピュアチャオを掴んだ、そして、それを思い切り鍋の中
にぶち込んだ。

勿論、熱湯だ。

「……！！ ゆー！！」

亜子は驚きと共に、これまで見たことないくらいの怒りの顔をして、俺を侮辱
するような叫び声をあげた。

次々と思いつくままの罵^ば声^{せい}を浴びせる。

亜子がどんどん鍋の中のお湯のように、沸騰に近づくことが分かった。

俺はそれをじっと、静かに聞いていた。

そして、彼女は最後にこう締めた。

「ゆー！ 最悪だよ！ 罪！ 罪！ 犯罪者！ 犯罪者！」

いつもの亜子からは聞かれない言葉。

でも、これで良かった。

俺は初めからこうなることを予想していた。

そして、ここで、俺はとっておきの……できれば一生取っておきたかった……
言葉を発した。

「……お別れだよ。」

「……へ？」

「俺は亜子にとって、たった今、敵になったんだ。お前はもう俺といつでも離れ
れば良いんだ。」

「へ……。」

そのとき、急に暖まったポットはコンセントを抜かれ、徐々に熱が冷めていく
のを俺は感じた。

でも、俺はもう自分の口を止めることはできずに、さらにたたみかける。嘘も
交えて、亜子を、責めて、責めて、二度と俺の所に帰らぬよう。

俺には他に女がいること

亜子の欠点や嫌いなところ
俺が持病で余命わずかなこと

そんなモノ、……あるはずがないのに、あるはずがないのに。

俺は嘘をただただ淡々と話して、自分の大切な人を、意味の分からない感情で追いやろうとする哀れなアジアンボーイだった。

……気がつくと、亜子の声も、俺の声も、いつの間にか、工場の雑音に消されるくらい小さくなっていた。

亜子の声は小さく、弱くなり、もはや先ほどの怒りをぶつける元気もなくなっていた。

隣ではチャオが死んでぶかぶかと浮いている。

そんな、亜子にとっては地獄のような風景のはずなのに、それも関係なく、俺たちは互いをじっと、見ていた。

「……もうやめよ。やめよ……。」

亜子が声を漏らした。

俺の言葉を真に受けたのか、俺の圧力に潰されたのか、泣きそうに、うつむいていた。

俺は抱きしめたくなくなった。当たり前だ。

……でも、もう亜子を抱きしめるわけにはいかなかった。

「ああ、やめる。もう、お前とは話さないでおくよ。」

「ゆー……。……。ねえ、ゆー……。ゆーは私のことが、嫌いなのか？」

大好きだよ。

もし、今の状況が、何の変哲もない日常だったならば……

素直になることが苦手な俺でも、そう言えたのに、

今は、……

「ああ、そうだよ。元々、そんな風にして始まった訳じゃないし、お前とは所詮形式だけの関係、形式だけの幸せだったんだ。もう良いだろ？ もうお前は自由なんだよ。」

「ゆー……。……。」

亜子は無言で涙を流して、その場にうずくまった。さっきの広告を見たことを後悔しているのか、俺にそれを提案したことを後悔しているのか、それとも、チャオが好きだったことを後悔しているのか……分からない。

ただ、亜子も自身を責めているようだった。

自分に責任を押し込んで、訳も分からず混乱して、泣いているのだ。

「……ここにいると邪魔だろ？ 俺はもう行くぞ。」

俺は亜子を無視して、場から去ろうとした。

その時、やっと落ち着き始めた亜子の呟いた声が、俺の心をちくちくとつついた。

「ばかだよ……ゆーは、ばかだよ……。私の気持ちなんて、ちっとも知らないくせに……ばか……。」

……。

次の日、俺は椅子の上で寝た。

ベッドだけは、開けておいた。

せめてもの、でも最小限の、亜子に対する償いだった。

帰ってきたとき、寝床くらいは用意してあげようと、そう思ったのだ。

しかし、亜子は、いつまで経っても、戻らなかった。

……俺は知っている。

亜子は決して自殺するような人間ではないことを。

誘拐されるような街ではここはないということを。

俺は知っている。

亜子が今、どこにいるかという答えを。

俺は知っている。

亜子は俺といて幸せであったことを。

それが過去形になったことを。

俺は窓から顔を出した。

『東』の方向をしばらく見つめていたが、その時、どこからか汽車の出発する音が鳴り響いた。

明日、亜子は初めて富裕地区というモノを見るだろう。
今日の夜の夢の延長線上で……

『Please determine their future』 ～未来を決定せよ。

5・三年後、俺はスラムの酒場で仲間と酒をかわしていた。——146

5

三年後、俺はスラムの酒場で仲間と酒をかわしていた。

俺は結局、あの後、暗殺者の仕事を始めた。

報酬は高い。

今更……だが、あいつを富裕地区に住ませる力もある。

勿論、犯罪者なのでその場所に住むのは不可能なのだが……。

だから、未だにこの貧困地区に家を構えて、仕事以外の時間は気楽に酒や肴^{さかな}をつまんで談笑していた。

明日、富裕地区のあるお偉いさんを殺すことになっている。

いつも、仲間は三人、つまり四人で行動することになる。

今日の終電の天井に乗って富裕地区に乗り込む。

……しかし、俺は前回に殺しを担当したので、実際、俺は今回行く必要はない。

逃走ルートの確保やそういう下準備を任されているだけなのだ。

もう、その仕事は遂行してある。

……そう、俺はつまり、別の理由があって富裕地区に行くのだ。

……。

翌日の夕方。

富裕地区のとある安アパートにて。

十九歳のとある女はまたいつものように割り当てられた部屋に帰ってきた。

そこは大して昔と住んでいた所と変わりしなかった。

夢とはかけ離れた過酷な生活が待ち受けていた。

ため息をついて、窓を開ける。

窓の外の景色だけが唯一昔と違う事だった。

綺麗な森、空、建物、確かに自分は今富裕地区にいる。

でも、その富裕地区と、かつて思っていた富裕地区は別のように思えた。

誰かと結婚なんてもつてのほか、世間にさえ出してくれず、虐待はないもの

の、過酷な労働を強いられ、食事はやはり、ジャムだった。

普通の食料など与えさえもしてくれなくて、自分は泣きながらそれを食べ続けているのだ。

……。

『ジャム、もう慣れたよね。』

『飽きないのか……お前は。この味に。』

『慣れたの。もう飽きたとか飽きないとか、あまり思わないかな。』

『お前は幸せなヤツだな。』

『何それ？……でもそう、今私は幸せだから……。』

『ふふ……なんで？』

『……聞かないでよ。分かるくせに。』

……。

いつか、大切な人と話した会話。

最後の別れの時、彼はきつとこのときの幸せを疑ったに違いない。

そして、私も、実際、あの幸せを疑っていた。

もし夢が叶ったら、もっと素敵な幸せが待っているのかと思った。

でも、今更……。

私はあのときが一番幸せだった。

嘘じゃない。不本意じゃない。

今となれば分かる。あのときの私が本当の私。

夢にあこがれたあの広告を見たときの私が、嘘の私。

そう、彼が富裕者でも、私が富裕者でも、きつとあの幸せは手に入らなかった。

あの場所が、あの状況が、二人が、運命を作って、幸せを産んでいた。

……私は、運命を見捨ててしまった……。

私は窓の外をぼーっと眺めた。

そして、涙で潤った目を、汚い布でこすって、

目を開けた。

目を開けると……そこには人がいた。

「……やあ、『亜子』様。お迎えに上がりました。」

「……誰？」

と、突然、その男は二匹のチャオを衣服の中から取りだし、肩に乗つけた。
白いヒーローカオスと、赤いダークカオスだ。

……まさか。

「あなた……もしかして……。」

「……ん？ ああ、衣服は職を変えて稼いだおかげで綺麗になってるだろ？ 赤いピュアチャオも俺が工場から買い取ってダークカオスにまで育てたぜ。食べ物も沢山あるし、お金かって沢山あるんだぜ。」

「ゆー……？」

「……やっとな、お前とまた一緒にになれる。……分かっている、こんなに放っておいて、傷つけておいて、本当に俺は、わがままな人間だって事。……暗殺が仕事だし、結局、犯罪者になっちゃったし……育てたチャオはダークのまま進化したし……。」

「……ううん……良いよ……過去なんて、汚い部分なんて、そんなの、良いよ……。」

亜子はいつの間にか涙を流し始めていた。

赤々しい、血生ぬるい過去を背負ってきた二人の思い出を想って。

白い、まだ何も分からない、でも疑いなく、続いてゆく二人の未来を想って。

決して悲しい涙なんかではない。

それは……。

「……さてと、後は心はどうにか満たさないと。お互いに。」

「ゆー……。」

「……あ、そういや、ずっと前に、お前だけが大切と思ったとき、呟いて、聞かえなかった言葉があったろ？」

「うん……覚えているよ、全部、覚えている。」

「今、言って良いか？」

「うん。」

「亜子、……愛してる。」

「……うん。」

俺は亜子を抱えた。前とさほど変わらない体重に驚いたが、走って持ち去るにはちょうど良い重さだった。

俺はアパートの屋上から、建物を飛び移り、

『西』へと、追い風を受けた。

暗い部屋で一人 テレビはつけたまま
僕は震えている 何か始めようと
外は冷たい風 街は矛盾の雨
キミは眠りの中 何の夢を見ている？

時代は裏切りも悲しみも 全てを僕にくれる
眠れずに叫ぶように 体は熱くなるばかり

GOOD NIGHT 数え切れぬ GOOD NIGHT 夜を越えて
GOOD NIGHT 僕らは強く GOOD NIGHT 美しく
儚さに包まれて 切なさに酔いしれて
影も形もない僕は
素敵なモノが欲しいけど あんまり売ってないから
好きな歌を歌う

キラキラと輝く大地で キミと抱き合いたい

この世界に 真っ赤なジャムを塗って
食べようとするヤツがいても

過ちを犯す男の子 涙化粧の女の子
例え世界が終わろうとも 二人の愛は変わらずに

GOOD NIGHT 数え切れぬ GOOD NIGHT 罪を越えて
GOOD NIGHT 僕らは強く GOOD NIGHT 美しく

あの偉い発明家も 凶悪な犯罪者も
みんな昔子供だってね
外国に飛行機が落ちました ニュースキャスターは嬉しそうに
「乗客に日本人はいませんでした」
「いませんでした」「いませんでした」
僕は何を思えば良いんだろう 僕は何を言えば良いんだろう
こんな夜は逢いたくて 逢いたくて 逢いたくて
君に逢いたくて 君に逢いたくて

また明日を待ってる

(true end)

スーパー宏タイム

宏

宏さんといえば、ショートショートな作風で知られる週チャオ作家ですが、今回はその膨大な作品の中から特に要望のあった五編を厳選して、このアンソロジーに取り揃えました。五編中、唯一の連載が「チャオの奴隷」。こちらは第一話のみの収録となっています。なお、この表題のネーミングはチャビルであるということを、宏さんの名誉のために、ここに記しておきます。

チャオの奴隷

チャオが、人間のパートナーとして世界的に普及した現代。僕にも一匹、パートナーとなるチャオがいる。カトレア、と言う名前だ。

カトレアが生まれたばかりの頃は、その愛らしい仕草の一つ一つを見ているだけで、心が癒される毎日だった。

えっちらおっちらと、ハイハイで一生懸命、僕の元へ寄ってくるカトレア。抱き上げてやると、満面の笑顔で喜ぶカトレア。大好きな青くて丸い木の実に、一心不乱に囓り付くカトレア。

赤ん坊のようだったカトレアがある日、拙い^{つたな}発音で僕の名前を呼んだときの感動は、幼い僕の心に強く刻み込まれ、この先も消え失せることは無いだろう。

だが、カトレアが人の言葉を話すようになってから、僕とカトレアの関係に変化が起きた。

比較的早い段階で、カトレアは人の言葉を話すようになった。家族や友人と会話するように、何の違和感も無くカトレアと会話するようになると、僕の意識は変わった。

それまでは、「僕がカトレアの世話をする」と言った具合に、僕が主で、カトレアが従だった主従関係が瞬く間に崩壊し、僕とカトレアは、まったくの対等な関係となったのである。

カトレアと会話することで、カトレアが何を考えているのか、カトレアはどうして欲しいのか、カトレアは何をして欲しくないのか等……カトレアの気持ちを考えて、カトレアのためになることを考える。

それはまさしく、僕が、家族や友人と過ごす日常そのものであり、カトレアが、真に僕のパートナーとなった瞬間のように思えて、僕はとても嬉しかった。

そして、現在。今年僕は、小学校高学年の仲間入りを果たし、小学校入学時から始まったカトレアとの付き合いは、四年目を迎える――。

僕は今、カトレアと一緒に木の実を買いにいくために、民家が立ち並ぶ人気の無い道路を歩いている最中である。

残暑が厳しい九月の初め。雲一つ無い爽やかなブルーに染まる天空に、太陽は優雅に浮かぶ。

照りつける日差しはむしろ、八月より力を増して降り注ぐ。右手で、ズボンのポケットから汗で湿ったハンカチを取り出し、額を拭いてポケットにしまう。

十メートルぐらい先に、飲料水の自動販売機が見える。何か買おうかな。何かがあるかな。

自動販売機のラインナップに僕の好きなメロンソーダがあることを、自動販売機の神様にお祈りし始めたときだった。

「ワカバ！ ちんたらしないで、さっさとついてこい！ このグズ！」

自動販売機の横で、一匹のチャオ——体の色はピンク色で、表面がツヤツヤしている、ニュートラルタイプのトビチャオだ——がそう叫んだ。

ちなみに、ワカバとは、僕の名前だ。

僕は小走りで、チャオの元へ向かう。

「ごめんごめん」

僕は着いた先で、足元のチャオに謝る。

「ワカバは、基本的に行動がとろい！ 見ててイライラする！ 亀じゃないんだから、もっとハキハキ行動しろ！ この鈍間！」

上空に浮かぶ太陽にも一歩も引けをとらない勢いで僕を罵倒するチャオ。

このチャオこそ、僕のパートナー、カトレアである。

「暑くてば一つとしながら歩いてたら、いつの間にか離れちゃって」

「言い訳するなっ、ワカバのくせにっ！ その女々しい根性、ドーバー海峡横断でもして叩き直してこいっ！ その途中で溺れて死ねっ！」

手足をぷんぷん振り回して、キンキン響く高音の声で、僕に罵声を浴びせ続けるカトレア。

この暑い中、よくそれだけの元気が保てるなあ、と僕は感心する。元気なのはいいことだ。

「僕、ジュース買うけど、カトレアも何か飲む？」

僕はカトレアに聞いた。

「いらんっ！ 金の無駄遣いだ！ この世間知らずのボンボンがっ！」

「そっか。ええと……あ、あった」

自動販売機は、僕のピンポイントな希望を叶えてくれた。なんと、メロンソーダがあったのだ。

ありがとう自動販売機の神様。硬貨を投入し、感謝の念を右手人差し指に込め

てボタンを押した。

がこん、と音を鳴らして出てきたメロンソーダ入りの缶を、自動販売機下部の取り出し口から拾い上げる。

ぶしゅつ、と音を立てて開いた飲み口から、中身の液体を口に流し込む。

「ああ、美味しい」

「ワカバのくせに、私を待たせるとは何様だっ！ さっさと飲め！ 三秒で飲め！ 炭酸で骨が溶けて死ねっ！」

メロンソーダが喉^{のど}を駆け抜けていく至福の瞬間を堪能する。三口飲んだところで口から缶を離し、しゃがみこんでカトレアに差し出す。

「ワカバ！ なんのつもりだ！」

「カトレアも、飲む？」

「……」

カトレアは押し黙り、俯^{うつむ}いて視線を左右に行ったり来たりさせている。

その目にはきつと、コンクリートと僕の靴しか映っていないはずだ。

手をもじもじさせて、たつぷり数分間悩んだあと、カトレアは俯^{うつむ}いたまま、力なく呟いた。

「……じゃあ、ひとくち」

…

うだるような暑さの中、僕とカトレアはまだまだ歩いていく。メロンジュースは買ったその場で飲んでしまい、缶は自動販売機の隣に設置してあった空き缶用ゴミ箱へ捨てた。

歩きながら、カトレアの、主に外見的特徴を紹介したいと思う。

まずは、体の色。全身、鮮やかなピンク色で、表面がツヤツヤに輝いている。ツヤピンク、と言う奴だ。

通常のピンクチャオと比べて、ツヤが入っている分、見る角度によってピンクが濃く見える部分と、薄く見える部分がある。そのグラデーションが僕には、美しいピンク色の花のように見える。

その鮮やかなピンク色の顔には、大きな瞳が二つと、小さな口が一つ張り付いている。

大きな瞳は、カトレアが眠っているとき以外、つまり起きて行動している間は、いつもほぼ大体吊^つり上がっている状態だ。

そして小さな口は、喋^あったり物を食べているとき以外、つまり口を動かしていない時は、いつもほぼ大体への字に結ばれている。

要するに、ムスツとした、怒っているような表情がカトレアのデフォルトなのだ。

ただし、カトレアの場合は、表情だけでなく本当に怒っている場合が多い。原因は……僕であることが多いようだ。

ちなみにカトレアはその怒りを、大体の場合は、直接僕を罵^{ののし}るという形で体外に放出すると言うことは、先ほどのシーンで分かってもらえたと思う。

話を、外見的特徴に戻そう。

トビチャオに進化したカトレアには、背中に普通のチャオとは違う、大きな羽がある。体と同じように、薄くピンクに色付いた、まさに花びらのような美しい羽である。

これは、トビチャオにしか現われない特徴の一つである。さらに、頭部の形状にも、トビチャオ特有の特徴が現われている。

カトレアの頭の後ろには、二本の角がある。正確に言えば、二本の角のように、頭が出っ張っているのである。

ぱつと見、小さな女の子に多く見受けられるツインテールのような形だ。少し上に伸びたあと、下に向かってゆるりと円を描くような形になっている。

鏡の前で、カトレアはよくその部分を手で弄^{いじ}っている。女の子が、髪を整えるのと同じようなものだと思う。

その光景を見る度に、カトレアの意外な女の子らしい一面に、僕は顔がほころぶ。

チャオに性別は無いけれど、その性格や仕草で、イメージは出来る。人間として生まれていたら、カトレアはきっと、元気な女の子だろう。

少なくとも、僕はそう思っている。

「ワカバ！ またちんたら歩きやがって！ 常に私の真後ろに居ろ！ それが出来ないなら死ね！ 豆腐の角に頭ぶつけて死ね！」

気が付くと、カトレアは随分前にいた。どうやらまた距離を離されてしまったようだ。

僕はまた、カトレアの元へ駆け足。

「ごめんごめん」

「謝って済むことばかりだと思うなよ！ ましてや、同じ過ちを繰り返すなど言語道断！ 死ね！ メモカのデータ全部消えて死ね！」

「もう離れないようにするからさ……ほらっ」

「！」

僕は、両手でカトレアを拾い上げ、胸の前で抱きかかえる。

チャオのくせに、人間の大人と変わらないスピードで歩くカトレアにとって、

僕の歩行スピードは我慢ならないものがあるかもしれないが、こうすれば離れることは無い。

「行こっか」

僕の方を向いていたカトレアは、僕の手の中でもぞもぞと反転し、進行方向へ体を向ける。

そのあと、消え入りそうなか細い声で、一言呟いた。

「……うん」

…

僕が透明なガラスの扉の前に立つと、来客を迎え入れるため、扉は自ら左右に割れていく。

一歩足を踏み入れると、僕の体は冷ややかな空気に包まれる。暑い日のデパートは、都会のオアシスである。

僕は、このデパートの一階部分の片隅、チャオ育成のための商品が多数陳列されている方へ歩いていく。

木の実や玩具、それに勉強道具など。

チャオ育成に欠かせないもの、あるいはチャオ育成をサポートするものなど色々あるが、僕の手の中でカトレアは、無言で木の実コーナーを睨み付ける。

そして、すっ、とそのまん丸な右手を差し出す。手で示した方角へ移動しろと言う命令だ。勿論、僕に対しての。

「はい。どれが欲しいの？」

木の実が陳列されてる棚の前に移動した僕は、カトレアに尋ねた。

チャオと同じぐらいの大きさの木の実が、白い包装紙をその身に纏^{まと}って、ずらりと並んでいる。一口に木の実と言っても、その種類は多種多様だ。

味が違っていたり、栄養素が違っていたり。さらに、進化の際に何らかの影響を与えると、特殊な木の実も存在する。詳しいことは知らないけれど。

さて、先ほどカトレアにどの木の実が欲しいか尋ねた僕だが、実はその答えはもう知っている。そして、多分合ってる。

カトレアは、無言の舵を取り続ける。僕は、それに忠実に移動する。着いた先には、青くて大きな、丸い木の実。

カトレアは、自分と同じほどの大きさであるそれを、両手でがっしりと掴み取る。カトレアは、昔から青くて丸い木の実が大好きだ。そして、それ以外の木の実を食べようとしない、頑固者だ。

「それでいいの？」

一応、確認は取る。カトレアは首だけ後ろに捻り、無言で頷いた。^{うなず}

僕は、会計を済ませるために、レジへと向かう。

「いらっしやいませ」

若い女性の店員さんが、笑顔で応対してくれた。

カトレアに、木の実を放すように言う。しかし、カトレアは両手にしっかり持った木の実を手放そうとはしなかった。

「こら、離せよ」

左手でカトレアを抱えたまま、右手でカトレアから木の実を引っぺがす。

一度手にしたものは、意地でも離さない。本当に、変なところで頑固なのだ、こいつは。

僕は、木の実を店員さんに渡す。その際、店員さんは柔らかな微笑みの表情をしていた。

僕とカトレアのやり取りを見て、思わず笑顔がこぼれたのだろうか。

その笑顔の由来はともかく、僕は店員さんの笑顔の間近で見てしまい、自分の顔がどんどん熱くなっていくのを感じた。

腰まで伸びた、美しい黒髪。見事なまでにさらさらのロングヘアーが、店員さんが僅かに頭を動かす度、静かに、繊細に踊る。

色白の肌に、白魚のような指。端正な顔立ちの中でも、一際存在感を放つ、澄んだ大きな瞳……。

——と、こんな感じに、僕は店員さんに見とれてしまっていた。

「あの」

「は、はいつ」

突然店員さんに呼びかけられて、僕は思わず、素っ頓狂な声を出してしまった。

見ると、僕と店員さんの間を隔てる机の上に、ビニール袋に入った青くて丸い木の実が置いてあった。

どうやら僕は、かなりの間、店員さんに見とれて、惚けていたらしい。^{ほう}

「あの……」

店員さんが、何かを言おうとしたときだった。

「ワカバ！ ぼさっとしてないでさっさと金を払え！ この暑さで脳が溶けたか！ 死ぬ！ 口内炎が痛くて死ぬね！」

カトレアが、僕の左手に抱かれたまま、大声で喚き散らす。^{わめ}心臓が飛び出るほどに驚き、そして焦った。

「ち、ちょっと、静かにしてよ」

周りの人たちから、一斉に視線が向けられる。それらは「一体何事か」と言う

好奇の視線であつたり、「やかましいな」と言う白い視線であつたり。

一刻も早くその場を離れたくなつた僕。そうだ、代金を払わなければ。

「えっと、お金、お金……あつ」

僕は黒い財布から小銭を取り出そうとして、焦って床に数枚の硬貨をぶちまける。

ちゃりちゃりといやらしい音が鳴り、さらに周りの視線が集まる。僕は、穴があつたら入りたいと言うのは、今のような心情を表しているのだと思った。

小銭を拾い集め、店員さんに木の^か実の代金をお釣りが発生せぬようぴつたり渡す。木の^か実入りビニール袋を^さ搔^さうように右手で掴み、^あ呆^あ気にとられている店員さんにかまわず、僕は脱兎の如き勢いでその場を駆け出した。

一刻も早くこの場を去りたい。デパートから出る直前、後方から店員さんの大きな声が聞こえた。

「ありがとうございますー！」

...

デパートからの帰り道。僕は、カトレアに怒られながらとぼとぼ歩いていた。

左手にはカトレアを抱え、右手にはビニール袋をぶら下げて。

「大体、ワカバはぼーっとしすぎ！ いつも、意識が途中でどっかに飛んでる！ そんなに飛びたければ、エベレストからバンジーしろ！ 紐なしで！」

「だから、ごめんって」

確かに僕は、ぼーっとしていると、よく言われる。

注意散漫、と言う奴だろう。改善する努力をするべき、悪い癖だと自分でも思う。

ただ、そのことをずばりカトレアに、それも強い調子で言われたものだから、僕は少々、ばつが悪い。

「カトレアだって、何もあんなに大声出すこと無いじゃないか」

「うるさい！ ワカバのくせに口答えするな！」

「……」

「……」

カトレアは、おい、と前を向く。

それきり、お互い黙ってしまった。しばらく、沈黙を引きずりながら歩く。

右手にぶら下げるビニール袋の擦れる音が、耳障りなほど大きく聞こえる。

「……ワカバ」

突然、カトレアが呟いた。

「何？」

僕は、カトレアの次の言葉を待った。

カトレアは、両手で自分の頭を——後ろに伸びた、二本の角のような部分を——さわさわと撫で始めた。

しばらくそうしていて、俯き加減に前を向いたまま、絞り出すような小さな声で、こう言った。

「……ツインテールは、嫌い？」

折れる時

「コイツは新入荷した、『ミラクルチャオの実』。一口かじるだけで全スキルが最高まで上昇だ」

「またまた、嘘ばかりチャオ」

「ドロドロだった血がサラサラになり、お腹の脂肪も燃やしてくれるスグレモノだ」

「都合のいいことばかり言ってるチャオ」

「コレだなんとたったの10リング」

「ますます怪しいチャオ。そんな手には引かからないチャオよ」

「女の子にもモテモテ。食べた次の日に好きな子から告白されたって言う話もある。どうだい、騙されたと思って」

「まあそこまで言うなら試してやってもいいチャオ。…ホントにモテるチャオね？」

(ぱくっ)

次の日。

「…何も変わらないチャオ」

「まあ、騙したからな」

「…」

半魚人と桜の木

「ちょっと、行ってくる。留守番してろよ」

「ゲ、ゲゲッ……」

チャオ幼稚園の片隅にひっそりと^{たたず}佇むロッカー。その中から、一匹のチャオが出てきた。

サングラスとマスクを装備したチャオ——闇の取引所の店長だった。

店長は憤慨していた。今朝、商品の数を確かめていたところ、「きのこ」が一つ足りないことに気がついたのだ。

誰かが、盗んでいった。

そう確信した店長は、犯人を捜すためにこれからチャオガーデンへ向かう所だ。

「絶対、許さねえ」

そう言い残して、店長はロッカーを後にした。

「ゲェ〜……」

店長がいなくなったロッカーの中で、盛大にため息をつく者がいた。

店長といつも一緒に行動している、半魚人である。

半魚人は、非常に悩んでいた。今後自分がとるべき行動が分からないからである。

このまま黙っているべきか、正直に謝るべきか。半魚人の頭の中で、天使と悪魔が激戦を繰り広げる。

——そう、商品のきのこを勝手に食べてしまったのは、半魚人であった。

昨日、店長が半魚人に留守を預け、ほんの少し出かけたときに、半魚人は食べてしまった。

ふわふわして口の中で蕩けるような食感のきのこは、半魚人に爽やかな後味と壮大な罪悪感を残していった。

頭を抱えて、狭いロッカーの中を右往左往する半魚人。

言うべきか、言わざるべきか——。半魚人は、決断を迫られる。

「帰ったぞ」

店長が、帰ってきた。

「全部のガーデンを回ってきたけどよ、犯人は分からなかった」

それもそのはず、きのこを食べてしまった犯人は店長の目の前にいるのだから。

店長は、ロッカーの中に入り、扉を閉めるとどっかと座り込んだ。
「まったく、一体何処のどいつが俺の大切な商品を盗みやがったんだ」

渦巻くポヨが、店長の怒りを表している。

店長がロッカーの内側を蹴飛ばす。ガツンという音が響き、ロッカーが揺れる。

それを間近で見ている半魚人は、もういつそこの世から消えてしまいたいくらいに思い、身をすくめていた。

取り返しのつかないことをしてしまった、と半魚人は思った。

加速度的に膨れていく罪悪感。それでも吐き出せない、謝罪の言葉。

半魚人は、このまま罪の意識に押しつぶされて死んでしまいたいと思つた。

「——正直に言えば、許してやるのに」

半魚人の心に希望の光を差したのは、その一言だった。

今だ。今しかない。今言うしかない。

半魚人は、きのこを勝手に食べたのは自分だと、正直に話した——。

「……そうか、お前が食べたのか」

「ゲエエ……」

半魚人は、うなだれて呻いた。店長の顔を直視できない。

張り裂けそうなくらい激しく鼓動する心臓。店長が次の言葉を発しただけで、ショック死するかもしれない。

半魚人は、店長の言葉を静かに待った。

「わかってたよ」

「……ゲッ？」

半魚人は、まったく予想外の店長の言葉に驚いた。

「俺が留守を預ける相手は、お前しかいないんだ。朝、お前の様子がおかしいのもすぐに分かった。——よく正直に話したな、偉いぞ」

半魚人の目から、涙が堰を切って流れ出る。心の底から、安堵したからだ。

店長が、半魚人を抱きしめる。

半魚人は、店長の腕の中がとても暖かいことに驚いた。優しさという温もりに、半魚人は包まれていた。

ありがとう。そして、ごめんなさい、店長。

半漁人は、心の中で、何度も何度も^{つぶや}呟いた。

「だが、罰は受けてもらわねーとな」

「ゲッ？」

きゅびーん。

「ワシントンと桜の木の話は、俺は好きじゃねえ。罪を犯したものは罰を受けるもんだ」

「ゲ、ゲゲエ……ゲフッ」

ほんの一瞬、ロッカーの中がまばゆい光に包まれた。

その光が取まったとき、店長の頭の上には青白い火の玉が浮かんでいて、半漁人はミイラのようにからからに干からびていた。

クジャッカー

チャオの代わりにクジャクを持っていったら先生たちはどんな反応をするか？
やってみよう！

ケース1 ～園長せんせ～

——せんせ～。教えてほしいことがあるんですけど。

「はいはい、何でしょう？」

——ウチの子が成長しないんです、なんででしょう？（と、クジャクを差し出す）

「おや、この子はチャオじゃありませんよ？ ガーデンで飼えるのはチャオだけですよ？」

——あ、ごめんなさい、間違えちゃいました。

実験結果：普通でした。

ケース2 ～オバ s（あべしッ！）

...

ケース2 ～占いせんせ～

——すいませ～ん、この子に名前をつけたいんですけど（と、クジャクを差し出す）

「あなた、なかなか面白いコトするのね。ところでそのクジャクとっても可愛いわね。食べちゃいたいくらい可愛いわ。ええ、食べちゃいたいくらい（ギリ）」

——しっつれいしましたー。

実験結果：危なかったぜ。

ケース3 ～店長せんせ～

——すいません、この子に似合う被り物ありますか？（と、クジャクを差し出す）

「ジーーーーーーー」（半漁人がクジャクに熱い視線を送る）

——…。

「ジーーーーーーー」（半漁人がクジャクに熱い視線を送る）

——…。

「……………ゴクリ」（半漁人が^{なまつば}生唾を飲み込む）

——だッ！（クジャクを抱えて逃げる）

実験結果：この子は俺が守ってやらねば。

ケース4 ～医者チャオせんせ～

——すいませーん、この子を診て…。

「いひひひ…あと少し…あと少しで完成する！ 私の長年の夢…もうすぐそこまで来ているのだ！ そう！ あとひとつ！ クジャクの！ クジャクの首さえあれば！！ いひ…いひ…いーッひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ！！」

——そろへり…（気づかれる前に逃げる）

実験結果：OhMyGod…。

結論：クジャク可愛い！

～City Escape～ —3rd Mission—

「ったく、ちょっと目を離すとすぐコレだ。ここら辺は車も多くて危ないんだからな」

そういつてソニックは、ボクの頭をわしわしと撫でる。

その表情は、何度言っても言うコトを聞かないボクに対する呆れと、ボクが無事だったコトに対する安堵が入り混じっている。

ソニックは優しい。だから、そのソニックの気遣いを無視するコトには、やっぱり後ろめたさを感じている。

でも、どうしても、僕は抑えられない。狭いガーデンを飛び出して、街中へ飛び出して行きたいという衝動を。

特に、今日は。

ボクは、いつもの場所に来ている。

壁にポッカー空いた、小さな穴。ココがボクの、指定席。

ボクはぺたんと座り込む。今頃、またソニックはボクがいないコトに気づいて、心配しているかもしれない。呆れ果てているかもしれない。

ごめんなさいソニック。でも、今日はどうしてもココに来たかったんだ。

……。

ボクは、しばらく無言で呆^{ほう}けていた。目の前に広がる光景を、しっかりと両目で見据えて。

そのまま、しばらくの時間をすごした。何分ぐらい経っただろう、ボクは誰かがやって来る気配を感じた。

誰がやって来るかなんて、知っているけれど。

「よっ」

下から、目の前にひょっこり現れたのは、もちろんソニックだった。

「まったく、頑固なヤツだぜ」

どういう意味なんだろう、と一瞬考えて、すぐにわかった。

何度言っても聞かないボクを頑固といったのか。確かに、そうかもしれない。

ごめんなさい。でも、今日は絶対来たかったんだ。

ボクは、ソニックにも、さっきまで僕が見ていた景色を見るように指示した。

「……なるほど、確かに気持ちはわかるな」

僕達がココから見下ろしている街は、輝いていた。

街はクリスマス一色だ。煌びやかな光を放つネオン、ライトアップされている大きなクリスマスツリー。

軽快なクリスマスソングは、ココまで聞こえてくる。もう夜も遅いのに、道を行きかう人は後を絶たない。

世界が、輝いていた。

「お」

小さくソニックが^{つぶや}呟いた。なんだろうと思ったけれど、すぐにわかった。

空から、まったく音を立てずに、白く小さな雪達が降りてきた。

ボクは落ちないように注意しながら、身を乗り出して降ってきた雪を手にとっ
て見る。雪は、静かに消えていった。

光り輝く街へ向かって、雪達はゆっくり降っていく。

ボクとソニックは、しばらくその光景を黙って眺めていた。

「寒いな」

静寂を破ったのは、今のソニックの一言——ではなく、その前にした、ボクのくしゃみだった。

ボクは鼻をすすって、うん、と^{うなず}頷いた。

「そろそろ帰るか」

ボクは、ほんの少し間をおいてから、うん、と頷いた。名残惜しいと思った。

「またこの次、だな」

うん。

ボクは、頷いた。

「さ、帰るぜ。しっかりつかまってるよ」

ボクは、ソニックの背中にしっかり張り付いている。
振り落とされないように、その手に力を入れる。

「音速で行くぜ！」

ソニックはそう言うと、いきなり飛び降りた。
ボクの体が上に引っ張られる。

わーわーと、悲鳴を上げるボクの顔は、笑っていたと思う。

チャオのはね

スマッシュ

いじめ、学校、壊れた人間。近年のスマッシュさんのテーマと照らし合わせれば、生まれるべくして生まれた作品であるように思える今作。けれどもここに行き着くまでに困難があったことは明白で、それを乗り越えてこの冬に「チャオのはね」が読めるのは、ひとえに「聖誕祭には人を動かす力がある」からだ、そう感じずにはられません。

誰よりも教室に早く入る。自分の居場所を確保するには早く来る必要がある。特に、その居場所が少ない人間にとっては死活問題である。例えば、自分の席に誰かが座っていた場合。例えば、自分の席に誰かが危害を加える場合。例えば、自分の席に危害が加えられていて、何かの処理をしなくてはいけない場合。そういう事に対応するためだ。

自分の席に座る。ドアから一番近い。非常にいい席だ。他人と接触する事なく、自分の席に辿り着ける。

今日もいつも通りだ。今日も無事な朝である。その事への満足感を味わいながら、誰もいない教室を眺める。どこへ視線を向けようと、そこには人がいない。悪意も善意も存在しない。干渉がない。平和な空間だ。

人が来るまでは、のびのびとしていても構わなかったが、本を広げた。ブックカバーで表紙を隠したその本を、黙々と読み続ける。読書に没頭するのだ。意識は本だけへと向く。感覚は本からの情報のみを捉えるようになる。そうなったとき、他人は存在しなくなる。近くを誰かが通っても、誰かが大声で話していても、それを情報として処理しない。あるいは、それらに気付く事さえしないかもしれない。だから、孤独である。一方でそうであるからこそ安定しているという面がある。心が安定していない状態が好きではない。好きではないというよりも、一種の不安がある。意図的に孤独になりながら過ごす。放課後になれば、たちまち教室から出る。他人はまともに視覚する事なく、記憶もしない。完全に近い孤独だ。

放課後。家に直行するわけではない。チャオガーデンへと俺は足を運ぶ。人間にとって公共の遊び場が公園であり、チャオにとってそれに当たるのがチャオガーデンだ。他に目立った交流場所があるわけでもない。チャオ同士の交流も、チャオを飼う人間同士の交流も、ここで行われている。

チャオは好きだ。見ていると、落ち着く。飼うわけにはいけないので他の人のチャオを眺めている。泳いだり、競争したり。そうやって遊んでいる姿を観察す

る。喧嘩をする事はあるのだろうか、と見ていた事もあった。だが、そのような様子は見られなかった。結局その時は騒ぎを見つけ出すよりも先に睡魔が勝った。チャオはなかなか争いごとをしないようである。たまに、チャオの蹴ったボールが飛んでくる。それを投げ返してやると、飼い主の人が笑顔を見せながら感謝してくる。ここはチャオを飼う人たちの交流の場であつたりもする。俺のように、チャオを飼っていないやつもまた、ここに来る。

誰もがチャオを求めている。チャオとはそういうペットだ。

「……」

チャオを抱えた少女が俺を見つめていた。見た感じ、俺よりも何歳か下のようだ。ニュートラルフライチャオの大きな羽がより少女を小さそうに見せている。だが、俺と同じ高校の制服を着ている。なので、それほど下じゃない。あるいは飛び級しまくって既に大学を出た教師なのかもしれない。いや、それなら制服は着ないか。しかし、まるでぬいぐるみでも抱えているかのようなその容姿がその少女を高校生とは思えない程度に幼く見せていた。見覚えは……。あるはずがない。人との交流はあまり得意ではない。本を取り出す。他人との会話を回避する場合、これに限る。しかし、本を開く前に、少女は口を開いた。

「準君ね」

俺の名前は高見準だ。少女の口から発せられた名前は間違いなく俺の名前だ。それで俺は、彼女がクラスメイトであろう、と予測した。こちらは関わる気がないから顔も覚える気はないが、向こうもそうである可能性は低い。だから、彼女がクラスメイトであり、俺は彼女の存在を知らない。そう考えるのが自然だった。

「いかにも、俺は準なんだが」

そう返した。あなたは誰ですか、と聞こうとしたが、それはとりあえずやめておいた。そういう事を言うのは人と付き合う中であまりいい事ではない。他人と関わるのを避けている俺でも、それくらいはわかる。相手にうまく合わせよう。そう考えていた矢先だった。

「わたしは、木村かえで」

「え？」

「あなたと同じクラス」

「お、おお、そうなのか」

「あなた、クラスの人の事、誰も覚える気がない……」

「ま、まあ、そうなんだが」

「関わる気がない、から」

不思議な人間だった。初対面の相手には質面攻めをする場合が多い。しかし、

それがなかった。まるで俺がどういう人間なのか、捉えているような感じだ。

「チャオ、好きなのね」

「ああ。見てると落ち着く」

「うん。そんな感じ」

彼女は続けて言う。

「あなたはいつも落ち着くために何かしてる気がする」

この少女……。かえでとか言ったか。不思議な人間だ。他人をよく観察しているのだろうか。それとも直感が優れているのか。

「君はあれか。エスパー少女とかそういう類なのか？」

「いいえ。すうばあしぞいど」

「スーパーシゾイド？」

「ノン。すうばあしぞいど」

「どう違うのかわからない」

「スーパーってかっこよく言うのではなく、すうばあって可愛く」

「なんで可愛くする必要があるんだ」

「可愛らしいものだから」

「……わからん」

……電波娘だった。

「シゾイド？」

「ノン。しぞいど。すうばあしぞいど」

「わかったからとりあえずその意味を教えてくれ」

「ある種の称号」

「もしかして、前世が偉大な戦士でいらっしやったり？」

「今、闘う人してる」

やっぱり電波娘だ。

「あなたも、闘う人」

「いや、それはない。そんな展開は起きえない」

心の底から否定をする。怪電波は需要のあるところにだけ発信されていればいいんだ。

「あなたは、勇者シンデシマエクソヤロウの生まれ変わりなのよ」

「違う！ 絶対違う！ っていうかそんな名前の勇者なんて存在しねえ！ 妄想の中でも存在しねえ！」

そこで彼女のにやけている表情に気付く。悟った。本当の電波娘ではない？
ネタ？

「もしや、お前……。伝説のカラナベ使いか」

「それしぞいどと違う……」

「ところでヤンデレが俺に何の用か」

「……見込み通り」

見込み通り？ 彼女は優れた悪事を思い付いたかのようににやけていた。

「見込んだ通り、人間として終わってる」

「初めて話す相手に言うセリフじゃねえなそれは……」

「お友達にならない？」

突然のお友達になってくれませんか発言だ。大抵そういうのは人付き合いが苦手プラス友達いない属性の人間のセリフだ。たまにバイオリンが凶器になるくらいに下手だったり、両親がいなかったりするがそこらへんは個体差がある。

「しかし、終わってる人間と友達になろうとするお前もなかなかあれだな」

「でも、わたしはおにゃのこだからEDにならない。終わらない」

「おにゃのこはそんな事言わねえ！！」

「されど真実」

「そっちの意味では俺だって終わってねえ！！」

公共の場所で下品な話をした（相手は女子）。これが、木村かえでとの初めての接触だった。

次の日。いつも通り登校。一番乗り、のはずだったのだが。

「あれ」

昨日の少女がいた。本当に同じクラスだったようだ。

「ドモン」

「は？」

カッシュ？

「グッドモーニングの略」

「わからん……」

相変わらず不思議さんでおられた。

「朝早い」

「うむ。孤立した人間としては当然の行いだ。自分の机は最強の砦にして、絶対に守らなくてはいけない場所だ」

「きびしー」

「慣れると楽」

「呼び出しをしたので、他もすぐ来る」

「お前みたいなのがまだいるのか？」

想像する。……。随分とゆんゆんとしたグルーブが想像された。

「あまりの不思議空間っぷりに、幽霊が一人紛れ込んでいても気付かなかったりしそうだ」

と、妄想の行き着いた所を^{つぶや}呟いた瞬間。

「かえでから離れろおっ！！」

叫び声。猛烈な足音。後ろからだった。振り返る。そこには俺に飛びかかる女の姿が。一瞬の出来事だったので対応できない。思いきり蹴られた。

「ぐおうっ！？」

数秒前まで立っていたのに、いつの間にか倒れておまけに壁に頭をぶつけていた。

「大丈夫？ 怪我不い？」

まるで俺が不良のように扱われていた。かえでは不良に絡まれた人のように扱われていた。というか、蹴られた。俺、吹っ飛んだ。

「背後から蹴るとはいい度胸じゃねえか……」

ナイフを取り出した。主に首の辺りを傷つけるための物だ。相手を威嚇する意味もある。だが、相手もそれに^{おび}怯える事なく立ちはだかる。

「消えな、不良」

「地獄まで失せやがれ」

一歩、踏み出したところで。

「二人ともやめなさい」

かえでが制した。それで、相手側から戦闘をしようとする気配が薄れる。どうして俺を^{かば}庇うのか困惑しているようだ。

「わたしの友達」

それは、俺に言っているようでもあつて、女に言っているようでもあつた。女の方はそれに納得して、戦闘態勢を解除する。張っていた気も緩む。その隙を俺は見逃さなかった。

「もらったあつ！！」

一瞬で距離を縮める。そして、少女に掴みかかろうとした。その瞬間。

「623パンチ！」

横からアッパーカットが俺の^{あご}顎を捉えた。俺は思いきり吹っ飛んだ。そうなりながらも、俺の目は上空に飛びあがりながらアッパーカットをしているかえでを発見していた。彼女がしたのか？ アッパーカットを放った腕にエフェクトがかかっていた。なぜ？

俺は地に落ちた。かえでは逆にかっこよく着地した。

「危なかった」

ふう、とかえではため息をついた。

「623パンチは電卓型テンキーが基準」

「何が言いたい……」

「ちょっとやばい場面でも無理矢理ギャグシーンへと転換すれば解決できるの」

現実では起こりえない事が起きた気がする。俺の想像と似たような事が？ 本
当に不思議空間なのか、ここは？

「落ち着いた？」

「あ、ああ、一応」

「なら、ナイフはしまう」

「すまん」

ナイフをしまう。

「助かった」

「警察のお世話、いる？」

「いない事を望んでいる」

「そう」

それでこの小規模な騒動は一段落した。

「で、だ」

その後、また一人女が来た。そちらの方は眼鏡をかけていた。三人とも外見に
随分差がある。ついでに俺は男であるから、全員バラバラだ。

「これで全員なのか？」

「うん。こっちが絆でこっちが奈々」

暴力をしてきた方が絆で、眼鏡をしている方が奈々だそうだ。

「そしてこれが新入り準」

「これ言うな」

「よろしくお願いします、準さん」

奈々がべこりと頭を下げる。なかなか礼儀正しいようである。

「これでくそみたいな話題に盛り上がりが増す」

「くそみたいな話題？」

「くだらないわけでもないけど」

「……わからんな。具体的にどういふのだ？」

「うんこ」

「マジでくそじゃねえか」

マジでくそじゃねえか。いや、マジでくそじゃん。俺は混乱した！

「イエー、うんこー」

かえでは口数が少ないなりに超ノリノリだ。他の二人は引いていた。得意な話

題ではないらしい。というか、得意な女子自体少ないと思う。

「そういうのが許されるのは小学校低学年までだと思うが」

「わたしはこういうの好き」

「他人の目も気にしたらどうなんだ」

「どうでもいい。うんこー」

二人の方を見る。超引いていた。

「他の話題にしてくれ」

「ほか……」

「できれば下ネタじゃない方向で」

かえでは黙った。頭が時折少し揺れる。目がどこか変なところを見ていた。

「もしもし？」

「すてき……」

「お前の頭で何が起きていたんだ」

「かえでは妄想癖がある」

絆が解説した。

「ほう」

「よくこうなるんだ」

「頭の中で幸せー」

かえではそう言って顔を輝かせた。

「バナナ」

「はああん」

くねくねした。顔が紅潮している。

「面白いな」

「は、はは……」

奈々は苦笑いしながらくねくね少女を見ていた。

「バナナ取り上げ」

「あっ……」

うるんだ瞳で見つめてくる。上目づかいで見られる。何かを欲している事が目からわかる。何を？ それもまた目を見ればわかる事だった。

「そうか、欲しいんだな」

「うん……」

「ゴー、バナナゴー」

「はああん」

「あ、あの……。そういうのはやはりよろしくないのでは」

「どうして？」

奈々の言う事はもつともであるのに、かえでは首をかしげた。
 「その……他の人から低俗な人間だと見なされてしまいますし、恥をかいてしまいますから……、その」
 「わたしはどうでもいい」
 「私がよくないんです」
 「奈々はやってない」
 「でも、一緒にいる事で、その同じ人間であるという扱いを受けてしまいますし、笑われたり恥をかいたり、してしまいます……」
 「ん」

かえではそこから何も言わなくなった。奈々の意見を受け入れたのだろうか。それとも飽きたのだろうか。どちらにせよ、奈々は安心したようだった。

今日もチャオガーデンで和む。ずっと来ていると、チャオを覚えてくる。姿が似ているチャオでも、しぐさを見れば大体判別がつく。

「コッチン子」
 「死ね」
 「こんにちはを可愛くしたの」
 「可愛くない。下品だ」
 かえではやはりニュートラルヒコウチャオを抱えていた。
 「羽がでかいチャオだな」
 「うん」
 「好きなのか？」
 「好きというよりきょーみあり」
 「興味あり、か」

チャオを眺める。羽が特別大きいのはこの種類のチャオだけだ。確かに、興味を持つという事はあるかもしれない。

「あなたはチャオを？」
 「前はな。今はいない。色々と危険だからな」
 「妊娠させちゃう？」
 「させちゃわない」
 「でんじゃーな男……」
 「違うと言っている」

そこで話がびたり、と止まる。突然話が切れたときの独特の空気は人を困らせる。何か話題を、と少し考える。だが、かえでの方は放心状態になっていた。また妄想か。好きにさせておくか、と思った瞬間。かえでがチャオを放した。チャ

オはそこから飛ぶ。羽をばたつかせて、上昇していく。

「なかなか、絵になるな」

飛ぶのが上手いらしい。下降する気配を見せず、空中に我が身を存在させている。このまま降りてくなければ、誰にも捕まる事がなさそうだ。ここが野外ならばどこかへと行ってしまいそうだ。よくここまで育てたものだ。

「わたしは、飛ぶの」

かえでが言った。顔は天井に再現された空の方へ向けたまま、目線をそちらに移す。

「……？」

かえでは俺を見つめていた。顔の向きも、俺を見るために調整されている。少女の表情は神妙な空気を発していた。

「わたし、チャオにキャプチャーされて、それでチャオのはねになって、飛ぶの」

またおかしい事を。そう一瞬は思ったが。明らかに今までのそれとは違った。まるで、自らの決意を語っているようであった。本当にそんな事ができるのだろうか？こちらにまでそう真剣に考えさせるような面持ち。俺は何も言えず、またかえでもそれ以上何も言わず、無言でお互いを見つめたまま時間が過ぎた。一分か二分。そのくらい経って、チャオがかえでの元に戻ってきた。再びチャオは抱きかかえられる。

「ところで、チャオって気持ちいいの？」

「そういう事はしていないと言っている」

「どっちが受け？」

「そういう事はしていないと言っているぞ」

「知ってる？」

「何をだ」

かえでは胸を張って、得意げに言った。

「チャオにドッグフードをあげると、複雑な顔をする」

「……」

「……」

「するだろう。それは」

「すごい発見」

「ペットだからって犬の餌与えられるチャオの気持ちにもなってやれ……」

「わたしの勝手ー」

笑顔だった。汚れない、いわば、超・笑顔だった。天然物の悪党だ。

「チャオの未来のためにお前を抹殺するぞ」

「む、悪者？」

「お前が悪者だっ！」

「悪者は撃退せねば」

「話を聞け」

「くらえーでんぱびーむう。ヨヨヨヨヨ……」

口から怪電波を放出した。

「くらわねー」

「なんと……」

かえでは驚愕した。

「こ、このままではやられてしまう……」

そして怯えた。

「バナナ」

「はあん」

軽く痙攣してその場に座り込んだ。

「そしてここでバナナがなぜか振動！！」

「あぁーっ！」

声を上げる。息遣いが荒くなる。

「なにしてるのー？」

どこからともなく子供参上。よく考えれば、ここはチャオガーデン。公共の施設である。

「ここでこのトークは危険だ。やめるぞ」

「は……あ……」

「バナナ取り上げ！」

「ふにゆうー」

かえでの全身から力が抜け、へたり込んだ。

「妄想はもう少し大人しく頼む」

「えー」

「えー、じゃない」

「ばななー」

子供がかえでに向かって叫んだ。俺は速攻で解除してチャオガーデンから連れ去った。施設の外に出る。辺りを見回して、人がいない事を確認する。

「いくらなんでも子供の前ではやるな」

「えー」

抗議される。

「えー、って……」

「まーいいや。また明日ー」

「おう」

とてとてと走り去る。その様子はとてもさっきまで変な挙動を見せていた人間とは思えないほど普通で違和感があった。そこに彼女の健全さを見た――

朝。集団で行動するようになったとはいえ、登校にも変化があるわけではない。一週間、彼女らと過ごしたところで特に自ら行動を変える事もなかった。いつも通りの時間に家を出る。早い時間帯では他の生徒と遭遇する事も少ない。

「……む」

「……ぬ」

少ないが、ないというわけではない。よりによって数少ない知り合いであったという可能性だってある。遭遇したのは絆であった。

「早いな」

「かえでが早く来いって言うから」

「ほう」

「私はかえでを守るためにいるから」

傲慢げな絆と同調してポニーテールが上下に揺れた。

「守るだと？」

「そう。ちょっかい出してくる連中がいるからね」

「そんなのいたか？」

見た事がない。探したわけではないが、目立ってこちらに意識を向けている連中もいなかった気がする。

「きっと、様子見しているんだと思う」

「俺がいるからか」

「そう。でも、たぶんまたすぐに来ると思う」

「そうなのか」

「で、それからかえでを守るのが私の役目」

「役目？」

「そう。かえでから頼まれたの」

誇らしげである。

「かえでってさ、外部に無関心なところがあるから、私がいないとダメなのよ」

「外部に無関心でもいいんじゃないのか？」

「それだと、いついじめられて酷い事されるかわからないじゃない」

「自分の身くらい守れるだろうさ」

「守れたら私が守る意味ないじゃない」

「ふむう」

その後、絆はかえでは自分に守られなくてはならない説明を延々と続けた。体が小さい、だとか。反応が鈍い、だとか。思いつく限りの理由を挙げていく。

「なあ」

「何？」

「蹴ってきたのも守るためだろう？ 守るために暴行をしていいのか？」

特に学校ではそういう事をするとは処分される可能性がある。大事になれば、最低でも停学にはなるだろう。

「かえでがそうしろって言うから……」

「あいつは権力者じゃないぞ。ただの学生だ」

「でも、ちょっとかえでが来たならただじゃ済まないって事をアピールした方がいいってかえでが」

「そうか」

学校の敷地内に入る。ここまで来ても、生徒の姿はあまり見かけない。朝から活動している運動部の姿がちらほら確認される。

「今日もかえでのお守頑張るぞー」

「頑張れ」

「あんたもやるのよ」

「やる必要ないと俺は思っているんだが」

「男なら当然の事でしょ」

「ぬう」

あんまり騒がしいのは好きではないのだが。争いごととかは苦手だ。刃物で襲いかかった手前、そんな事は言えなかったが。そういうわけで俺は不覚にも絆を手伝う事になった。

休み時間だ。教室を見渡す。人が多い。当然だ。生徒は自分の教室で授業を受ける。だから、自分の教室にいる事が多い。そうであるから、教室には生徒がある程度溜まる。そして、それらはいくつかの集団に分かれ、会話する。こちらの集団では、奈々が青ざめた顔をしていた。

「どうしたんだ？」

「なんか、私の事を噂されているような気がして」

そう言って辺りを見回す。俺も周辺をうかがうが、特にそのような様子は見当たらない。それぞれがそれぞれの会話に夢中である。

「被害妄想じゃないのか？」

「そうかもしれませんが、でも……」

顔色はどんどん悪くなっていく。困った。かえでの方を見る。

「こいつはどうしたらいいんだ？」

「……」

本を読んでいる。聞こえていないようだ。

「……くそ」

「ひいつ」

奈々が怯えた。魂が口から抜けていきそうな勢いを感じる。

「いや、お前に言ったわけではない」

「あうあう……」

「しかし、困ったな」

このままでは倒れてしまいそうである。かえでの方を再び見る。頭を叩いた。

「あうっ」

その瞬間、絆が動いた。

「違う」

蹴りが来る前に、手を突き出して制止する。

「場所を移動しないか？」

「なんで？」

「奈々の顔色が悪い」

「あー……」

「で、でも、移動したら余計変な目で見られてしまうのでは」

意外にも反論したのは奈々であった。顔色の悪さが不安の強さを物語っていた。

「しかし、このままではお前倒れそうだぞ」

「で、でも……」

「移動って、どこにするの？」

かえでが割り込んで質問する。

「いい場所がある。人のいない教室があつてな」

そう話すと、かえでの目が輝いた。本を閉じ、立ち上がる。

「案内して」

「あ、あの……」

「移動でいいか？」

奈々に聞く。

「えー、あー、あの一、その一」

何かを言いたげであった。そうであったが、ついには言葉が出ずに、

「それで……いいです」

賛同した。廊下へと出る。

「大丈夫か？」

「え、ええ……」

「しかし、考え過ぎだろう」

「で、でも誰かが私の事を非難しているかもしれないですし、そういうのは嫌じゃないですか」

「そういうものかね」

「ああ、もし本当に笑われていたらどうしよう、私……。死んでしまうかも……」

「大げさすぎる」

俺は案内をするために先頭に立っていた。かえでなどは途中ではぐれるかもしれないし、奈々は顔色が悪いので時々後ろを振り返った。奈々が周囲を挙動不審に見渡しているのが気になった。

誰もいない教室がある。人気のない階でひっそりと存在する部屋で、隠れた名所である。

「ここは大抵人がいない」

「へー」

「いるとしたら、昼休みか放課後でカップルが盛ってるくらいだな」

実際に見た事がある。大体、週に一回見るか見ないかではあるが。しかし、ここは別に人のいない場所を知っている。こちらより遠いが、盛っているところに入るよりかはいいだろう。という事を三人に説明した。

「盗撮するといいかも」

かえではそう言いながら部屋を探索する。埃の溜まっている場所に指をなぞらせて、^{しゆうとめ}姑みたいな発言をしたりもしていた。

「ここらへんにカメラを……」

「やめろよ？」

かえでは本気だった。

「でも、よくこんな所を知っていますね」

奈々は普通の状態に戻っていた。こちらも興味深そうに部屋を眺めている。

「人のいない静かな場所が好きだな」

そういう場所をよく探す。そしてそこでくつろぐ。この学校内では、五つくらい穴場を見つけてある。それは俺が快適に学校生活を送る上で重要な事だった。

「こういう場所だと、落ち着くだろ？」

「はい」

奈々は微笑んだ。それができるくらいに落ち着いたのだろう。適当な椅子を見つけて座った。絆もそれに便乗して座る。かえでは動き回っていた。俺は壁にもたれた。

「私って、社会の人間として不適合な部分があると思うんですよね。なんていうか、変な人というか……」

奈々は誰から促されたわけでもなく話し始めた。

「そういう面もあるから、やっぱり魅力にも欠けて……。そういう普通より劣っている点で他の人から狙われていると思うんですよ」

「そうなのか？」

「いや、成績優秀だし真面目だし、そんな事全然ない」

絆が俺の質問に答えた。

「だ、そうだが」

「いえ、そんな事は全然……。私なんかダメ人間ですから」

「成績優秀なのだから、ひとまずよく出来た人間だろう」

「そう、でしょうか」

表情は曇ったままである。自信がないタイプの人間のようなのである。

「クラスだと、一番頭いい。三番目くらいにかえでが」

「……ほう」

眼鏡のこちらはともかく、電波のあちらも優秀なのか。その事実に対し驚きを隠せない。

「頭いいの二人、悪いの二人でバランスが取れてるわけだよ」

「俺は悪いというわけではないぞ」

「いや、私だってそうだけど」

^{にら}睨みあう。

「自分で悪いと言っておきながら何を訂正するか」

「うるさい。少なくともあんたよりかはできる」

「ほう、ならばここで決着をつけてやる」

「学力でなくて暴力で勝負になってます……」

平和に過ごした。

今日も学校帰りにチャオガーデン。そう思っていたのだから。

「む？」

チャオガーデン前に、かえでが立っていた。いつも通りニュートラルヒコウチャオを抱きかかえている。

「どうした？ 入らないのか？」

そう聞くと^{うなず}頷いた。そして、空を見上げた。なるほど。ここで飛ばすつもりなのだ。俺も上を向いてチャオが飛ぶのを待つ。しばらくすると、羽のばたつく音が少しして、視界にチャオが入ってきた。

「よく飛ぶな」

「うん」

二人でチャオを眺める。天井のない空だからか、気持ちよさそうに飛んでいる。自由に動く。そして、チャオは突然大きく動いた。

「ん？」

どんどん遠くへ飛んでいく。途中で引き返す気配はない。逃げた？

「おい、いいのか？」

そうかえでに問いかけたが、既にそこにかえではいなかった。チャオの飛んでいた方向を見ると、そちらへ向かってかえでが走っていた。

「ぬう」

俺も追う事にする。チャオは時々こちらを振り返り、速くなったり遅くなったりする。かえではそれほど必死に追いかけている様子もない。つまり、これは遊びなのだろう。

「なるほどな」

俺も軽く走って追いかける事にする。それでも、少しずつ迫っていく。もう少しで追いつきそうだ。その時であった。建物の上を通り、チャオは別の道路へ出る。こちらは建物の上を通れない。つまり、かなりの距離を離された事になる。

「……」

チャオはそれを理解しているようで、大幅に減速した。

おちん、と俺の頭が音を出した。

「……………やってやる」

ナイフ^{とうてき}投擲。だが、真横を通り過ぎて直撃とならなかった。チャオがこっちを慌てて振り返る。投擲。避けられる。

「ほう」

二本投擲。これも避けられる。

「上等一つ！！」

腕と手をフル稼働させる。片方につき五本のナイフを投げつける。絶え間なく五つの光沢がチャオを狙い続ける。途中から右腕に重みを感じる。構わない。投げ続ける。しかし、当たらない。

「もっと近づかなければな……」

走る。途中で、狭い道に入ったり、高層ビルに隠れるようにしながら少しずつ近づく。相手から見えない位置で様子をうかがう。どうやら、見失ったようであ

る。チャオは辺りを必死で見回している。

「俺の勝ちだ……」

姿勢を低くしたまま動き、距離を詰める。隠れられる障害物を頼りに、できるところまで近づく。チャオは上にいると狙われて危険と思ったのか、降りてくる。それでさらに距離が縮まる。

「ドゥーダァーイ！！」

物陰から飛び出て両腕から十本のナイフを解き放つ。その時、ついでに右腕から何か重い物体も飛んだ。

「かえで？」

右腕の重みの正体。それはかえでだったのだ。推測。俺がナイフを投げる。このままだと自分のチャオに当たる。止めるために右腕にぶら下がる。

「しかし大して効果はなかった、と」

チャオはかえでをどうにかしようとして失敗し、下敷きになった。ナイフは外れていた。

「痛いー」

「すまん」

かえでが立ち上がる。埃を払う。そして、チャオを抱きかかえた。

「大丈夫か？」

「うん」

かえでは、じっと俺の方を見つめてきた。数秒間、二人の間に沈黙が流れた。口を開いたのはかえでの方だった。

「飛び降りるなら、どこからがいいと思う？」

「突然なんだ」

「チャオにキャプチャーされる時、高い所から飛び降りながらキャプチャーされたい」

「なぜだ」

「そうすればキャプチャーされて飛ぶ時、綺麗な景色が見れるから」

教えたら実行しそうだ。しかし、それは自殺と変わらない。チャオが人間をキャプチャーできるはずなどないのだ。だが、思い当たる場所はある。

「一応確認しておくが、自殺じゃないんだよね？」

「うん」

「自殺に使うなよ？」

「うん」

こいつの返答は本当にわかっているのか不明で不安だ。

「近くの山に廃校がある。そこなら、山の自然と街が見れる。結構遠くなるけど

な」

「おー」

メモした。かえでは飛び降りスポットの情報を手に入れた！

「……自殺に使うな？」

「うん」

やはり不安だった。

日が経つに連れて、学校内の空気が変わりつつある事に気付いた。どうやら、俺たちを快くなくと思う連中がいるようだ。

しかし、それにしてもおかしかった。教室の空気がいつもと違う感じがした。部屋の置物を全て別の物にしたかのような違和感。俺たちに意識を向けられている。そんな気配。絆の方を見る。

「……っ」

同じようなものを感じ取っているのか。目つきが鋭かった。誰かが動く度に細かく反応を示す。かなり警戒しているようだ。

「これって、ちょっとまずいか？」

わかりきった事ではあるが、絆に聞く。

「まあ、確実に、来るだろうね」

苦しい状況に立たされている事が、語気から感じられた。結構まずい。という事は、そのうち何かされてもおかしくない、という事だろう。

「逃げるか」

「とはいえ、ちょっかい出されるだけでどうなるってわけでもないから」

「俺はそういうのも好きじゃない」

絆は困った顔をした。そして、かえでの方を向く。

「どうする？」

「んー」

かえでは無関心であった。

「できれば移動したいかなーと思うのですが」

代わりに奈々が発言した。

「との事だが」

「でもかえでが」

「そうか」

どうやらこいつはかえでの事が気がかりなようである。俺はかえでの背後に回り、抱きかかえた。人間にしては軽いので大きなぬいぐるみを持つような感じだ。

「これでよしだ。行くぞ」

「うーん……」

そのまま廊下へ出る。絆は乗り気ではなさそうだったがちゃんとついてきた。

「しかし、何かしたのか？」

「何が？」

「何かしなければあんな状態にはならんだろう」

「あー……」

「どうなんだ」

「特に何もないんじゃない、かな」

歯切れが悪い。嘘だとわかる。しかし、追及していいという意味の表れでもないという事は確かだ。例の部屋に着いたので適当な位置にかえでを放り込む。ここへ来るまで一切無反応で本を読んでいた。そして現在進行中だ。

「こいつも被害を受けるの自分なのに無関心すぎないか」

「なんででしょうかねえ……」

「まるで自分が関係ないかのようだよ」

「そういられるのは羨ましいです」

奈々は転がりながら本を読むかえでを見つめている。掃除がそれほどされていない部屋なので制服が汚れ放題である。

「私なんかこういうのは全然ダメで……。もう不安で死んじゃいそうです」

「とりあえずはここに避難した方が無難だな」

「で、でも陰口とかされているかもしれません……」

「それは心配するだけ無駄な種類の攻撃だ」

結局、ここに避難する事になった。絆は俺がかえでをここまで連れてくればついてくるような感じであつたし、奈々は一人になりたくないとの事だったからだ。

休み時間。移動。休み時間。移動。そうやって、回避する事に成功した。

「しかし、疲れるぞ」

かえでは相変わず全く動こうとしないので、俺が持つ事になった。毎時間これをするのは骨が折れる。

「やっばさ、向こうから来るのを待って、反撃した方がいい」

「こうしていた方がいいんじゃない……」

絆と奈々の意見が分かれた。そして、かえでは相変わず無関心である。

「こうしてたって時間の問題。とっとと追い払おうよ」

「でも、もしかしたら大丈夫かもしれないじゃないですか」

奈々がぼつりと言った。

「もしかしたら私たちに悪意なんて向けられていなくて、私たちがただ思い込んでいただけかもしれないじゃないですか」

有り得ない事だった。ここでそんな事を言うのは。

「そんなわけないじゃない」

「でも、まだ何もされていないんだから、そういう可能性だってあるじゃないですか！」

叫んだ。現実を拒否するために。自分の言った事が現実だと言いたいがために。

「そんな事言ったら痛い目に遭うよ。ねえ、かえで？」

絆が語りかけるも、かえでは反応しない。ただ本を読んでいるだけだ。

「かえで？」

しかし、反応はない。

「おい」

頭を叩く。すると、顔を上げる。

「お前は どう思うんだ？」

「んー」

すぐさま本に視線を落とした。

「どうでもいいかなー」

「で、でも守った方がいいよね？」

絆は焦っている感じでそう尋ねた。

「うん」

はっきりと肯定されて、絆は安心した様子だった。

「そういうわけだから、かえでのためにどうにかしないといけないと思う」

「具体的には？」

「向こうからちょっかいを出させる。そこでどうにかして喧嘩に持ち込んで、ぼこぼこにすれば……」

「できるのか？ 少なくとも喧嘩まで発展させないと逆効果になるぞ？」

「できると思うけど」

「無理だろう。わざわざ手を出してこないだろう」

「じゃあこっちから手を出す」

「それは停学になるぞ」

絆はそれにすぐさま反論してみせた。

「停学になるならないは問題じゃないでしょ」

そういう決意のようだ。そうしてでも相手に自分たちが恐ろしい者だと知らし

める必要がある。そう思っている事がわかった。

「でも、まだ……」

奈々は呟いた。一人だけ過去の話題に居残って、現実を拒否し続けていた。

教室に戻る。クラス中から密かな笑いが聞こえる。何が起きた？

事態はすぐに把握できた。教科書が破かれていた。中を確認すると、しっかりとマジックで文字が書かれていた。死ね。消えろ。わかりやすい悪意だ。他の教科書やノートも確認するが、どれも同じような感じであった。ノートはもう使用できないだろう。そうなるくらいには念入りに破かれていた。やったのは誰だろう？

それは特定できない。だが、クラス中から笑い声が聞こえるところから、多くがグルのようだ。

三人はどうなっているか確認する。

絆。驚いているようだ。こちらと目が合う。苦笑い。お前もか。それが通じたようで、向こうも苦笑いした。やられちゃった。とでも言いたげである。

奈々。一番問題ありと思うのがこいつだった。案の定、顔が真っ青になっている。教科書から目が離れない。俺が見ている事にも気付かないようである。

かえで。いたずら書きを興味深そうに観察している。様々な角度から教科書を眺める。ページをめくり、またそれをする。ページをめくる。観察する。ページをめくる。観察する。以下ループ。楽しそうでもあった。それ、自分いじめられてるんだぞ。と言ってやりたいほどに悪意に無関心なようだった。

しかし、どうしたものか。破かれた部分はどこへ行っただろうか。机の中を探す。ない。という事は、捨てられたか。後でゴミ箱を探すか？ 気が進む作業ではないな。そうするところを見て笑うに決まっている。しかし、早く探さなければ処分されてしまう。そうなったら、もうどうにもならない。

教師が入ってくる。授業が始まった。授業で静かな教室は救いになった。どうすべきか。教科書は役に立たず、ノートは使えない。まともに授業を受けれる状態ではないので、その事に集中する。どうやって身を守ったらいいだろうか。教科書とノートに手を出された。その時俺たちは例の部屋にいた。いたずら書きを見る。誰がやったかわかるような記述は見られない。名前を書いて決闘を申し込んだりするような変な人間が相手だったら簡単なのだが。これは困ったな。

授業中は静かだった。誰も俺たちの被害を騒ぎ立てなかった。

授業が終わると俺たちはすぐに集まった。奈々は自分で歩いてきたものの、泣いている。

「これはまずいぞ」

「うん」

「俺たちのいない所で俺たちが攻撃される。反撃はできん」

「え？」

絆の目が動揺を隠せず丸くなる。

「例えば教室にいれば、靴に何かされたりな。そのうちそうなる」

教室内を見回す。クラスの人間はほぼ全員揃っている。今手を出されているという事はなさそうだ。

「本当に？」

「ああ」

「嘘……」

「嘘じゃない」

絆は食い下がる。

「でも、どうにかして対処とか反撃とか……できるんじゃないか……」

今度はこいつか。苛^{いらだ}立っていた。現実を受け入れろよ。

「そんなわけないじゃないか」

「かえで？」

「準は正しい」

これが効いた。急に大人しくなる。絆がぼつりと呟いた。

「もう、ダメ……」

「どうした。随分弱気だな」

「こんな風に来るなんて思わなかった」

「ふむ」

「こういうのはどう対処すればいいかわからないよ」

かえでは本を読んでいる。特に変わりはないようだ。いつも通りであるその様子が今は異質に見えた。

「どうすればいいの……？」

絆にいつもの活発な言動が見られない。相当参っているようだ。

「靴とかは持ち歩いていれば保護できる。けれど、机とか下駄箱とか、持ち歩けない物は諦めるしかないな」

かえでの頭を叩く。

「なに……」

こうでもして本から目を離させないと聞いているかどうかわからない。

「靴とかは持ち歩くように。わかったか」

「ん」

軽く頷いた。その後、瞬間的に読書に戻ったが、ちゃんと聞いていたようなので気にしない事にする。今度は泣いている方にも聞く。

「わかったか？」

「……ぐす」

頷いた。

「それと、教科書やノートだがな」

ゴミ箱の方へ視線を移す。同じくゴミ箱を見たのは絆だけであつた。

「丁寧に生ゴミと混ぜられていた。液体もあつたし、拾い上げる価値はあんまない」

狙いはわかっている。そうやっておいて、探している姿を見ながら楽しむつもりなのだ。だが、ゴミ箱を見ればすぐわかった。相手はやりすぎってしまったのだ。拾う気が起きなくなるくらいに酷くされていた。

「ひぐつ、えぐつ」

奈々が咽び泣く中で、放課後を待った。

チャオガーデンに入る。今日はとりわけ疲れた。チャオは癒しだ。中を見渡す。知っている顔を見つける。かえでだ。かえでがチャオを飛ばしていた。高く飛んでいるチャオをかえででは顔を真上に向けて見ている。

「今日もよく飛ぶな」

「十分くらい飛んでる」

「お前ずっとその状態で見てるのか？」

「うん」

相変わらず自分のペースで生き続けるやつだと思った。こいつは、今日だってずっと変わらなかった。いじめなどでは揺らがないう精神。それはただ精神が強い、というのとは違う気がしていた。俺は質問を投げかけた。

「なあ、なんで俺たちはいじめの対象になったんだ？」

彼女に聞いても、答えが返ってくるとは思わなかった。だが、かえではこちらを向いた。

「わたしたちは壊れているから」

「壊れている……？」

「普通の人間として、見られていないから」

そう言い直されて、わかった。異質な人間として見られている。だから攻撃される。なるほど。理解できる理由だった。

「みんな、壊れている」

「絆も奈々もか？」

かえでは頷いた。

「そう……なの、か」

疑問で返す事はできなかった。薄々感じていたからだ。どちらも普通とは言い難い。そんな空気がある事に。

「普通として扱われない。だから、そういう者同士で一緒になった」

「それはお前が考えた事か？」

かえではこれにも頷いた。

「絆は、人に依存する」

そして、初めて会った時のように、鋭く分析された彼女の情報を披露し始めた。

「彼女は誰かに依存して、自分を守るの」

「どうやって？」

「依存する人のために何でもする。停学になるような事でも、依存する相手に拒絶されないためなら」

その依存の対象は目の前にいる少女なのだろう。だから彼女はいつもかえでを気にしていたのか。

「奈々は？」

「彼女は、敵意を極端に恐れているの」

「いじめか」

かえでは小さく首を振った。

「非難されたり、集団から排除されたり。自分の存在が認められない事に恐怖を感じている」

「それは誰だって嫌だろうさ」

「その度合いが異常なの」

確かに、そうだった。いじめが発生する前からよく顔色を悪くしていた。笑われたりする事へ敏感で、嫌っていた。挙句の果てには有り得ない仮説を立ててまで自分が拒絶される対象である事を拒んだ。

「集団でいる事は、そんな彼女に必要な事だったの」

「少なくともその集団には認められるから、か」

「同じ理由で、優等生でいるようにしている」

一位だとか、言っていたか。確かに、やりそうな事だ。悪い成績で親や教師から叱られたら彼女はどうかになってしまうだろう。それを想像する事は容易だった。

「わたしたちはわたしたちを守るために一緒になったの」

「どういう事だ？」

「みんな壊れていて、同じだから。同じなら依存できるし、拒絶もしない」

「それを考えたのはお前か？」

頷く。

「うまくいくように頑張った」

「頑張った？」

「そういう集団だって事を教えてはいないから、今みたいな関係になるまで時間がかかった」

壊れた人間の集団を作るために、こいつは。人から依存されるようにした。拒絶をしないようにした。そうある事を彼女たちが望んだから。

じゃあ、こいつは？ こいつは何のためにそんな事をしたんだ？

「お前は……」

「わたしは、すうばあしぞいど」

「それは冗談だろ」

「統合失調質人格障害」

あれは、冗談じゃなかった。それを知る事になった。

かえでが付け足す。

「別名、シゾイド型人格障害」

こいつは、木村かえでは、すうばあしぞいどなのだ。

チャオが降りてくる。記録更新だ。そうかえでは喜んだ。

「それで、人格障害っていうのは？」

統合失調質人格障害。別名、シゾイド型人格障害。それが自分の壊れた部分である。そうかえでは言った。

「最近は、パーソナリティ障害って言うらしい。でも」

かえでの表情は曇らない。淡々としている。

「どうであれ、お前頭おかしいです、って言われてる事には変わりはないから」

「障害……か」

「うん」

「どういう障害なんだ？」

かえではそこで少し沈黙した。

「身体障害の性格面バージョン」

「精神的に不自由だと？」

「わたしは大丈夫。けれど社会的に大丈夫じゃない」

社会的に大丈夫じゃない。その意味している事はなんとなくわかった。おかしい人間とされ、避けられる。そういう状況が目に見えた。

「だから、集まった。みんな同じなら、異常ではなくなるから」

壊れた人間の集団。その事に妙に納得できている自分がいた。

チャオガーデンから家へ帰り、その後俺はパソコンへ向かった。シゾイド型人格障害。それを調べた。どういう人間がそれに当てはまるのか。そして、それはかえでに当てはまるのか。調べに調べた。結果は、確かにかえでに当てはまっているようだった。

得た知識を基に、改めて彼女を観察する。今日もいじめは行われていた。死ねなど書かれた紙がガムテープで机に貼られていた。放課後にやられたのだろう。俺の来た時にはかえで以外の人はいなかった。何重にもガムテープは貼られていて、処理に困った。正攻法で、頑張ってはがした。かえではどうだろう。スルーだ。少しの間、視線は釘付けになっていたものの、すぐに読書にふける。超然とした態度。他人に無関心。他人の評価など気にしない。そのような態度は例の人格障害者に見られるようである。

彼女は空想へ没入する癖もあった。それもまた、そうなのだ。なるほど。どうやら彼女は本当にすうばあしぞいどのようだ。

「それ、はがしたらどうだ？」

近寄って語りかける。かえでは読書しながら答えた。

「こっちの方が面白い」

「なるほどな」

俺も読書をする事にする。いじめられているのに集中できるものかね。そう思いながら読み始めたが、案外自然に集中できるものだ。集中が途切れたのは絆が登校してきた時だった。

「はがすの頑張れ」

机の惨状を見て、面食らっていた。

「……かえでのは？」

「見ての通り絶賛放置中だ」

「……」

絆はガムテープをはがし始めた。自分のではなく、かえでの机のを、だ。

「そういうのはいいから自分のをはがしたらどうだ」

「でも……」

「じゃあ奈々の方をはがしてくれ。そっちの方が助かる」

「奈々の机は何もされてないみたいけど」

「は？」

何もされていない？ 確かめてみる。机の上。何もされていない。他の部分に何かされているかもしれない。軽く探してみる。異常、なし。マジかよ。

「本当に何もされてないぞ」

「うん」

「なんでだ？」

「さあ？」

やがて奈々が来た。絆がかえでの分の処理を終えた頃であった。

「おはようございます」

「ああ」

「どうか、されたんですか？」

絆が自分の机に貼られているガムテープの処理をしているのを見て尋ねた。

「お前は何もされてないか？」

そう返すと、奈々は自分の机を調べ始めた。細かい所まで念入りに見ている。

「何もされてないみたいです」

「そうか」

「で、どうしたんです？」

「見ての通り、ガムテープといたずら書きのコンボだ」

絆の机にまだ原形を留めている被害を見て、奈々は力なく笑った。

「で、本当に何もされてないのか？」

「はい。そのようです」

「妙だな」

「はあ……」

「何かされないように気をつけろよ」

「はい」

奈々ははっきりとした声で返事をした。その後、ぱつが悪そうな顔をした。

奈々への被害はその日、なかった。

今日は念入りだった。教室のドアは制圧されている。もう、クラス中が敵になったのだと感じる。明らかに敵だとわかる人間の数が多すぎる。

「なあ、どう思う？」

絆に聞く。

「何が？」

刺々しく返してくる。機嫌が悪いようだ。それも当然か。ここまでされれば腹が立つ。

「クラス全員が敵になったって見ていいかな」

「いいと思う」

返答したのはかえでだった。珍しく自分から本を読むのをやめていた。その事

に少し驚く。

「もう、みんな敵」

かえでの瞳は厳しく教室を見据えていた。この目がこいつの観察力なのか。そんな風に感じた。

「そうか」

俺は立ち上がる。我慢できない。手近な所にある椅子を掴む。近くにいる集団に意識を集中させる。そして、椅子を投げた。

「——っ！」

悲鳴が上がる。その時には俺はもう次の行動に出ていた。ドア付近で固まっている集団に向かって走る。途中で椅子に手をかける。投げる。椅子は低く飛び、途中で着陸しつつ、ドアにぶつかった。ナイフを取り出す。やみくもにそれを振るって威嚇する。集団は腰を抜かしつつ教室から出ていく。それを見てから、残っている連中を確認する。

頭の中から、逃げ出す連中を除外。多くが俺の行動を見る野次馬だったが、何人かの男が俺の方へ走ってくる。机が密集している地帯に移動する。相手がやってくる。それに合わせて、机を蹴飛ばしてやる。机が倒れ、中身が散乱する。連中がその様子に目を奪われた瞬間、一気に距離を詰める。ナイフを握った手で一人の頬を殴りつける。そいつは倒れた。それ以外を、ナイフを振るって距離を保つ。殴ったやつが起き上がろうとしていた。体を踏みつけ、足場にして跳ぶ。まだ立っている連中とは倒れているやつを間に挟んで向かい合っている構図になる。ナイフを投げる。一回目は外す。二本目を取り出し、今度はよく狙う。ナイフを投げたところで相手を傷つけられるわけがない。椅子の方がまだ威力はある。それでも、投げられたのが刃物であるという事は精神的に効果がある。目を狙って投げる。避けられるが、こちらがどこを狙っているのか相手にはわかった。顔色が危険を感じて青くなっている。

「くそっ！」

逃げ出す。追わない。倒れていた男はその様子を見て、俺を見る。俺を倒さないと気が済まない。が、仲間は逃亡で形勢不利。

「……くっ」

それを理解すると、男は去っていった。周りを見る。人は少ない。廊下から見ているようで、クラス一つ分以上の人数がそこにはいた。大騒ぎになっている。

俺と視線が合うと、集団は余計にざわついた。うるさい。

かえでたちの方に目をやる。

「無事か？」

見た感じでは何事もなかったようである。絆が頷く。かえではいつも通り読書

でもしているのだろうと思った。しかし、かえでは本を置いてこちらをじっと見ていた。ずっと見ていたのだろうか。

そこへ教師が入ってきた。教室内の騒ぎはもうない。それに一瞬教師は戸惑ったようだが、教室の散らかりようを見て、次に俺を見た。

「準」

「……」

どうしようか。

家にいる。俺は家にいる。時計を見ると、既に授業が始まっている時刻だ。それでも俺は家にいる。停学処分を受けた。数日の間は学校に行けない。幸運なのか、不幸なのか。そこが曖昧になったまま、くつろいでいた。何もする事がない。寝転がったまま天井を眺めているだけで時間が少しずつ過ぎていく。

「あー……」

そのまま寝てしまおう。そう思って、目を閉じた。

「うおお！！」

男が殴りかかってくる。対応する事ができず、体が吹っ飛ぶ。

原因は、いじめだった。向こう側から仕掛けてきた事だ。その反撃として、こちらが少し過激に動いた。相手の様々な私物を使用する事のできない状態になるまで破壊し、事実上損失させる事に成功した。これは、その反撃だ。誰がやったかはすぐに明らかになった。目撃者がいたわけではない。やるであろう人物が一人しかいなかったためだ。事実、その人物である俺がやった事だった。その事を脅迫じみた質問をしてきた相手に伝えると、相手の顔は赤く染まった。怒りによるものだ。そうして、殴られたのだ。理不尽だ。元々は向こうからやってきた事だ。それをやり返しただけで殴られる。それが許せなかった。ゆっくり起き上がる。相手を睨む。そうだ。こいつを——てしまえばいいんだ。俺はナイフを取り出した。

「うわあああ！！」

悲鳴。目の前には赤があった。机や椅子は倒れ、大惨事だ。目の前に人がいる。性別は男だ。首を押さえている。その手で押さえられている部分からは赤い液体が流れ落ちている。血だ。刃物に目を移す。俺の手に握られているそれは、彼の首から出ているそれと同じ色に染まっている。そこから導き出される結論は。やってしまった。そういう意識が脳を支配する。どうすればいいのだろうか。

ただただその流血する有様を見ているだけである。誰かが駆け寄った。応急処置でもするのだろうか。立ち尽くしたまま見守る。

「大丈夫？ ねえ、大丈夫？」

応急処置、というわけではないようだ。ただ大丈夫かどうかと問いを投げかけている。どう見ても大丈夫ではないだろう。俺の一部が心の中でそう他人事のように呟いた。世界がぼやけてくる。意識が遠のく。どこかへ行ってしまうような感覚。落ち着きを取り戻した俺にとって、この教室で何がどうなっているかと興味ない事だった。悪い夢なら覚めてくれとでも思うべきだったのだろうか。だが、そんな事を思う機能さえ失われていた。頭の中は妙にすっきりとしていた。

悪い夢を見た。起きた瞬間、負の感情が渦巻いた。時計を見る。十二時。飯の時間だ。気分を数割だけ切り替える事に成功し、飯を食う。

「……くそ」

また寝ようかと思った。だが、さっきの夢が頭の中で再生される。何もする事はない。仕方ない。散歩でもするか。そう考えて俺は着替えて外に出た。快晴だった。

チャオガーデンに来る。平日の昼間だ。人は全然いない。全然いないから誰も行かない。そういう流れで、人が少ない。適当な所に腰を下ろす。そして、本を読む。場所が変わってもやる事は変わらないな。そう思って、ため息が出た。他にやる事もない。仕方なく、文章を頭の中に入れていく。

「こんにちは」

聞き慣れた声がした。本から目を離す。

ニュートラルヒコウチャオを抱えた少女が立っていた。

「お前……？」

「来てみた」

来てみたって。時間を確認する。二時。学校は絶好調で授業中だ。それなのにここにいるという事は。

「サボタージュか」

「すうばあさぼた一じゅ」

「それはもういい」

「むう」

「で、どうして？」

かえでは考え始めた。うーんなどと唸^{うな}りながら適当な理由を探している。やがて、首をかしげた。

「あなたと話すため？」

「だからってサボる必要もないだろうに……」

「ごめんなさい」

突然、頭を下げられた。意味がわからない。何に対して謝っているんだ。

「わたしのせいで停学にして」

「……」

こいつは何を言っているんだ？ 俺はまた夢でも見ているのか。こいつからまともな発言だなんて。信じられなかった。

「とりあえず、頭を上げてくれ」

「うん」

頭を上げたそいつの顔をまじまじと見る。確にかえでのような顔だ。双子の姉妹とかそういうものだろうか。

「なあ、どうして謝るんだ？」

「それは……停学に……」

「俺はお前に命令されて動いたわけではないぞ。それなのになぜ謝る」

「……」

かえでは下を向いた。おかしい。いつものかえではない。それだけは明らかだった。

「引き込んだじゃったから」

少しずつ、言葉を発していく。

「あなたも、仲間だってわかったから、引き込んだじゃって……」

「それは別に悪い事じゃないだろう」

かえでは首を激しく振った。ひくっ、という音がかえでから聞こえた。泣いている？ かえでが責任を感じて？ わけがわからなくなる。

「あなたが、一人で静かにして欲しいのは知ってた」

「……」

「そうしないと。落ち着いていないと、前と同じ事をしてしまうから」

俺は目を見開いて硬直した。前。

「前にあなたは刃物を振り回して同級生を負傷させている」

「なんで……それを」

「調べたから」

泣きながら喋る。そんなかえでらしくない振る舞いのまま、かえでらしい事を言ってくる。それで、こいつが本物のかえでなんだな、とわかった。

「負傷した男児は首から出血した。原因はあなたへのいじめ」

「……やめてくれ」

思い出してしまう。いじめの反撃をして。殴られて。それが理不尽だって納得できなくて。それで。ナイフで。そしたら首から出血して。やつは首を押さえ

て。誰かが大丈夫なはずなのに大丈夫かと聞いて。俺は立ち尽くして。

その後、俺は飼っていたチャオを捨てた。いつか、自分のチャオも傷つけてしまう気がしたから。それが、怖かった。

「ごめん」

「……いい。で、続きは？」

「うん」

今は、かえでの話に集中しよう。記憶の回想を止める。

「一人で落ち着いていようとしているから、やめようと思った。けど」

「けど？」

「色々調べているうちに、今でもナイフを持ち歩いているってわかって。それで、ああ、本当は刃物を振り回してしまう自分を理解してほしいんだな、って」

「……」

「だから、引き込んだ。けど、そうしたのに、理解してあげられなかった。もう振る必要はないんだって、言ってあげられなかった」

震えながら涙を落としている。自分がした事に責任を感じて。しかし、責任を平常心のまま受け止める事ができなくて、泣いている。そんな彼女に俺は――

「ありがとう」

感謝していた。

かえでの顔に驚きの表情が浮かぶ。

「それをしようとしてくれる人すら俺にはいなかった。だから、ありがとうだ」

立ち上がる。

「それじゃ、帰るわ」

「え、あ……」

「泣きただけ泣いとけ。そういうのは必要だ」

来た時とは逆に、俺の心は満たされていた。ここに来て、よかったな。

停学処分から解放され、登校する。今日は何をされるのかと考えると行きたくなるが、とりあえず行く。教室が騒がしかった。いつもならば、俺たちが一番乗りであって、騒がしいなんて事はないはずだ。嫌な予感がする。ドアの前で呼吸を整えて覚悟を決める。開けた。教室には大勢の人間がいた。クラスの大半が既にいる。時計を見る。時間はいつも通りの時間だ。やはり、おかしい。奈々がいる。目が合う。奈々は気まずそうな顔をしていた。奈々は絆の席の傍にいた。だが、その絆の机は倒れていた。

「どうした？」

机の中には何もなかったの、倒れたという被害しかなかった。だが、机に直

に落書きがしてある。奈々の方を見る。マジックを持っていた。まさか。

「おい」

奈々は無視して、俺の席へ向かう。そして。

「……！」

マジックで落書きをする。机の表面、側面、内側。椅子の背もたれにも。書ける所に書きまくる。最後に、机を倒した。その瞬間。歓声が起こった。クラス中が奈々を称賛した。それを浴びた奈々は、ピースしてそれに応じた。歓声が強まる。拍手の音も聞こえた。こうして、奈々は彼らに受け入れられたのだ。

「……おはー」

「……おはよう」

かえではいつも通り読書中だった。倒された机も^{もちろん}勿論そのままだ。元に戻してやろうとして、机を持ち上げる。その時、表面にされたいたずら書きの数々が目に入った。死ね。そう大きく書かれていた。太い一本の線を描くために重ねられたいくつもの細い線は、独特の勢いを持って主張していた。これもきっと奈々が書いた文字なのだろう。そう思うと、死ねとだけ書かれたこのいじめは重すぎた。精神をえぐられる。

机を起こし、適当なプリントを持ってくる。それを机の上にばらまいて、いたずら書きを隠してやる。

「こんなものか」

自分の机にも同じ事をしておこう。そう思った時に、絆が来た。

「おはよう」

「ん」

「今日はとびきり辛いぞ。覚悟しておけ」

彼女が机に目をやる前にそう忠告しておいてやる。そして、絆は恐る恐る自分の机を見た。

「いつもとそれほど変わらない、かな」

笑顔が引きつっている。これだけでも結構なダメージであるようだ。

「書いたのは、奈々だ」

絆は硬直した。

「え……？」

絆の目が奈々を探す。奈々は、いじめっ子集団と混ざって楽しげに話していた。今流行しているテレビ番組の話題であるようだ。

「嘘……」

「本当だ」

「嘘……。そんな……」

裏切りはよくない。依存する彼女にとって、裏切られる恐怖は計り知れない。今回はかえではなかった。しかし、次彼女を裏切るのかえでかもしれない。その恐怖がある。彼女は膝をついて、口を押さえた。恐怖によるストレスは、平常を保てるレベルを超えている。俺はそれがわかった。

「大丈夫だ」

「え？」

「俺とかえでは、裏切らない」

それを聞いて、絆の表情に少し余裕ができる。しばらくして、こくり、と一度頷いた。この日、奈々とは一度も話さなかった。

今日もチャオガーデンへ行く。かえでのチャオはどのくらい飛ぶだろうか。中を探す。が、かえでは見当たらない。走り回る。隠れられそうな所も全て。隅から隅まで探す、いない。

「まだ来てないのか？」

それならば、と、見つけやすい場所に腰を下ろす。そして、読書開始。時間が経ってやってくれば向こうから話しかけてくるはずだ。そのはずだったのだが。

なかなか来ない。本一冊読み終えてしまった。おかしい。再び探す。しかし見つからない。

ふと、視線を上の方へ上げた。そこに、ニュートラルヒコウチャオがいた。
「あれは……」

おそらくかえでのチャオだ。観察する。降りてくる気配はない。よく飛ぶチャオだ。間違いなくかえでのチャオだろう。目を離さないようにする。子供の声が聞こえた。

「あのチャオ、ずっと飛んでるよー」

ずっと飛んでいる。いつからだろう？ もしかしたら、俺が来た時には既に飛んでいた？ そう考えている時に、入口から入ってくる少女を見つけた。かえでだ。かえでは自分のチャオを探すため、顔を動かす。しばらくして、見つけたのか、顔を固定させる。俺はかえでに駆け寄った。

「いつから飛んでるんだ？」

「朝から」

耳を疑った。朝から？ ずっと飛ばしていたというのか、こいつは。

「これなら、いける」

「行ける？」

「どこにでも、いつまでも飛んでいける」

ニュートラルヒコウチャオもかえでを見つけたようだ。かえでは腕を大きく動

かし、サインする。それに応じて、ニュートラルヒコウチャオは降りてきた。それをかえでは抱きかかえる。

「わたしは、チャオにキャプチャーされて、チャオのはねになって、飛ぶの」

「ああ。前にも聞いた」

「……明日にでも、そうしようと思って」

「……そうか」

こいつにも何か思うところがあるのだろう。

「念のため確かめておくが、自殺じゃないよな？」

「うん」

「それならいい」

「うん」

「いい旅をしてくれ」

「うん。する」

希望にも決意にも満ちた返事だった。そこだけを目指しているような感じだった。

それなのに、なぜか俺は不安を感じたのだった。

かえでがいなかった。俺よりも早く来る事が多い。だが、いない。しばらく待つ。絆が来た。

「かえでを見てないか」

「そっちこそ知らない？」

「全く」

「そう……」

今日はいじめっ子共は来ていないようだ。まだ何かをされた様子もない。だが、奈々は教室にいた。向こうから話しかけてくる気配はない。それもそうか。話しかけるのには少し勇気を出す必要があった。

「かえでを見なかったか」

「……」

無視だ。聞こえているはずである。耳を確認する。イヤホンなどを着けているわけではないようだ。つまり、聞こえていながら無反応でいるわけだ。

「かえでを見なかったか」

もう一度聞く。しかし返事は来ない。もう一度。

「かえでを見なかったか」

やはり返事はない。しばらくしたらもう一度聞く。それを繰り返す。何度目かになって、奈々はこちらを向いた。

「……知らない、けど」

「そうか」

「……」

すぐに無視をする態勢に戻る。そういう姿勢を貫こうとしているのがわかる。それが彼女のためなのだろう。今の彼女の境遇でいる方が、彼女にとっては生きやすい。俺たちをいじめる事で、多くの者から褒められ、認められる。そういう世界を選んだのだ。

「ありがとな。それじゃ、俺行くわ」

「……」

「またな」

その瞬間、奈々はあつと声を上げた。気付くのが遅い。わざわざ心を痛めるような事をしなくたって、お前を認める連中はここにいたんだ——

廊下へ出る。絆も追いかけてきた。

「探すの？」

「ああ」

「外を？」

「ああ」

「私も行く」

絆ならば、そう言うだろうと思っていた。よりによって依存対象であるかえでがいないのだ。俺が探そうとしなくたって、探すに決まっている。

本来なら手分けして探すべきなのだろう。しかし、かえでがどこにいるのかは大体わかっていた。

「場所はわかってる。俺だけで行く」

「でも……」

「……校内を探してくれ。特に屋上とか自殺しやすい所な」

「……」

釈然としないようであった。どこにいるかわかっていて外に行くようなやつに校内を探せと言われればそうなるのももっともだが。

「……わかった」

それでも、しぶしぶ受け入れた。

「頼むぞ」

俺は廊下を走った。すぐにでも走って急がないといけない気がした。走らないと間に合わないという意識があったわけではない。ただ、走らないと。必死にならないとかえでを掴み損ねる。そんな抽象的な不安があった。

ただ病気で休んでいるだけかもしれない。精神的疲労が病を引き起こした。それで熱を出して——それならば。なぜ俺は走っている？ここは道路だ。学校ではない。わかっている。俺はどこに向かうんだ？かえでのいる場所。それは、かえでの自宅ではない。学校にはいなかった。チャオガーデンでもない。じゃあ、どこなのか。おそらく彼女は、チャオの羽になりに行ったのだ。昨日宣言したように。その際、高い場所から飛び降りる。すなわち、それは自殺を意味する。もしかしたら、すっかりキャプチャーされるかもしれない。けれど、そうではなかったら？チャオはどう頑張っても人間をキャプチャーする事ができない生き物だったら？彼女は絶望するだろう。だから、自分がチャオの羽になれなかったという現実を突きつけられるのであれば。その前に死ぬつもりなのだ。

二つのパターンが考えられる。一つ目は、俺たちの知らない場所で実行した可能性。この場合、どうしたって助かりようがない。絆と手分けして探したとしても、見つけた時には手遅れだ。確実に成し遂げるために俺たちの知らない場所を選ぶのだから。だから、もう一つの可能性に賭けるしかなかった。知っている場所で実行しようとしている可能性に。近くの山に廃校がある。そこなら、山の自然と街が見れる。結構遠くなるけれども、綺麗な景色を眺めながら飛び降りれる。彼女はそこにいるに違いなかった。彼女は。かえでは——

「はあ……はあ……」

ずっと走っていると、流石に疲れる。着いた。目的地に。廃校。使われなくなった後も、なぜかそのまま残されている。とても静かな場所だった。俺はこの場所が気に入った。だから、こんな遠くまでたまに来る。こんな遠くにある場所にまで、安らぎを求める必要があった。今日もきつと俺は、安らぎを手に入れるためにここへ来たのだ。校舎を眺める。屋上に、人の影があった。それを見て、再び走りだした。校舎の中に入る。屋上へと続いている階段を全速力で上がる。そして、ドアを開く。風が吹きつける。かえでの背中が見えた。チャオを強く抱きかかえている。歩み寄る。かえでが振り返った。

「わたしは、チャオのはねにつ……」

「すうばあしぞいどなら、そういう夢を見て飛び降りれただろうな」

「夢なんかじゃ……」

「お前は、すうばあしぞいどじゃなかったんだ」

かえでが硬直した。目が大きく開かれている。普段のかえでからは予想できないほどの表情の変化だ。

「お前は……普通に異常にもなりきれなかった、そういう人間だ」

かえでは何の言葉も発する事がない。ただ、風の吹くままに髪を揺らしてい

る。続ける。

「もし自分が普通の人間ならば、普通の人間と平等で仲良くできる。もし自分が異常ならば、異常な人間と平等で仲良くできる。でもお前は、そのどちらでもなかった。だから、お前は自分をすうばあしぞいどと名乗って、自分が異常な人間であるかのように振舞ったんだ。そうすれば、絆や奈々や、俺のような人間と仲良くする事ができる。そう考えたんだ」

自分もいじめに加わらなければ、仲間外れにされていじめられてしまうように。相手と同じテレビ番組を見て、相手と同じ事をして、そうやって相手に合わせてなければ冷めた目で見られてしまうように。一緒にでなければいけないはずなのに。それなのに彼女には。かえでは自分と一緒に人間がいなかったのだ。だから、絆や奈々に近づくために異常な人間を演じた。そうすれば近づける。相手から拒否される事はない。平等なのだから。いつものかえでは完全にかえでそのものではない。相手と平等であるために演技をしている。俺の停学に責任を感じて泣いたかえで。あれこそが本当のかえでなのだろう。

「だけど、完璧には成功しなかったんだ。俺を停学にさせてしまい、おまけに奈々はいじめの側になった。せっかく演技してまで作った仲良しグループはどんどん悪化した。それで、お前に残された最後の世界が、チャオの羽になって飛ぶ事だったんだ」

「……」

「それなのに、お前はまだここにいる。なぜだ？」

「それ……は……」

「お前はまだここにいたいんだろ！ この世に居場所が欲しいんだろ！」

それが彼女がここにいる理由だった。俺がナイフを持ち歩くように。持ち歩かなければ誰も傷つける事がないのに持ち歩いてしまう。誰かに自分の存在を認めてもらうために。本当に飛び降りるためならここである必要はない。だけど、ここを選んだ。それは俺がこうやって来る事を望んでいたに他ならない。

「でも……」

「俺は平等だからお前と一緒にいたわけじゃないぞ」

「え？」

「俺は、お前だから一緒にいたんだ」

ナイフを取り出す。それを思いきり投げ捨てた。ナイフは木の陰に消える。見つけるには、それなりに探さなければならないだろう。ナイフはいくつでもある。俺は一本ずつ取り出して、同じように捨てていく。様々な方向へ投げて、散乱させる。

「刃物を振り回してしまう自分を理解してほしい。そういう風にお前は俺の事を

言ったな」

投げながら語りかける。どれほどあるのだろう。一旦、全てのナイフをその場に落とした。思ったよりも大量にある。よくこんなに購入したものだ和我が事ながら感じる。そして、その中から一本を拾い上げて、再び捨てていく。

「お前は俺を理解してくれた。それなら、俺はもうこんな物っ……」

渾身の力を込めて投げる。ナイフは回転しながら遠くへと消えていく。どこへ落ちたかわからない。

「必要ない」

かえでの方を向く。

「お前はどうかんだ」

「え……？」

「お前はまだ、自殺する必要があるのか？ チャオの羽にならなきゃいけないのか？ 自分を偽り続ける必要があるのか？」

返答を待つ。数秒後。かえでは大きく首を振った。横に。何度も何度も。首を振った。

「ありが、とう……」

こいつは結構涙もろいらしい。しかし、泣いている姿はこれまでになく自然な彼女を映し出していた。

俺はナイフを二本拾う。そのうち一本の柄を、かえでの方へ差し出した。

「手伝ってくれ。一人じゃ疲れる」

「うん」

かえではチャオを空高く飛ばした。チャオがかえでの体から離れていく。キャプチャーとは無縁なほどに距離が開く。

俺たちは二人でナイフを力いっぱい投げ捨てた。

しばらくして、いじめは消えた。そのしばらくというのがどれほどの期間だったかは覚えていない。覚えないようにしたし、思い出そうとしなかった。長かった気もするし、短かった気もする。ただ、向こう側のいじめのネタが尽きて、徐々に治まった。何よりも、あの後奈々がいじめに関与しなくなったのが大きかった。それによる減速が、いじめを消滅させる起爆剤になった。こうして、何はともあれいじめによる被害はなくなった。今でも冷たい視線は投げかけられる。いじめられない事と、仲が良い事はイコールで結びつかないようだ。それでもいいのだと思う。害がなければ非難する理由にはならない。向こうには向こうの感じ方がある。そういう認識で十分だ。

結局、奈々は戻ってきた。必死に頭を何度も下げて、許してもらおうとした。

おそらく、どうやって謝るのか必死で考えたのだろう。そのクオリティはすさまじかったが、残念ながら彼女の苦労は空しく、俺たちは簡単に彼女を許したのであった。そのせいで、今ではその時の謝罪が時折ネタになる。

絆はかえで以外にも依存するようになった。最初に依存されたのは俺だ。次第に、奈々にも依存するようになった。最終的には、俺たち三人に満遍なく依存するところに落ち着いた。その結果、彼女は随分とまともな人間に見えるようになった。多少彼女の周りには友人が増えたようだ。たまにかえでを見物するため人が来るのはそのせいらしい。

休日。かえでと俺はチャオガーデンに来ていた。

かえではニュートラルヒコウチャオを抱きかかえている。今では無理に飛ばす事をしないので、昔ほど飛べるわけではなくなっている。それはそれで惜しいと思うのだが、そうさせるのが方針らしいので仕方がない。

俺もチャオを再び飼う事にした。ナイフを所持していない今では、飼っても平気だからだ。かえでの強い希望により、こいつもまたニュートラルヒコウチャオへと進化した。

「さて、どっちがあそこの壁まで早く着くか、だ」

「年季の違いを見せる」

「それは勝ってから言うんだな」

二人で同時にチャオを飛ばす。二匹のチャオが遠ざかっていく。

ゴール地点へ向かってスピードを上げていく。

チャオの羽は自由に空を飛ぶのであった。



チャオ生誕十周年記念

週刊チャオ ベスト・アンソロジー

2008年12月23日 初版公開

2009年 1月30日 第二版公開

作者	懐仲時計 ホップスター DX チャピル ろっど ぺっく・びーす 斬守 某 宏 スマッシュ
企画・編集	チャピル
イラスト	ぺっく・びーす
発行	週刊チャオ編集部 http://www3.to/weekly-chao/
印刷・製本	あなた